關西學生山岳聯盟報告

I

ANNALEN DES AKADEMISCHEN ALPEN-VEREINS, KWANSAI

1930

關西學生山岳聯盟報告

I

1930

關西學生山岳聯盟の目的とする處は各學校山岳團體間の連絡親睦を計り，山岳界諸先輩の後援指導を仰ぎ，統一ある自覺的行動，目的達成に必要なる事業に依り新しき方面への活躍の準備を爲し，アルピニズムの理想に邁進し，延いては日本山岳界全般の水準意識を高め些かなりとも斯界に對する貢獻を爲さんとするに在り．

一九二九年六月二十三日

關西學生山岳聯盟

加盟校（ABC順）

第八高等學校山岳部
第三高等學校山岳部
同志社大學山岳部
岐阜高等農林學校山岳部
關西大學山岳部
關西學院高等部山岳部
神戸商業大學山岳部
甲南高等學校山岳部
京都府立醫科大學山岳部
京都帝國大學旅行部
浪速高等學校旅行部
大阪醫科大學山岳部
大阪商科大學旅行部
富山高等學校山岳部

（其後の加盟校・加盟順）

大阪工業大學山岳部
大阪高等學校山岳部
大阪藥學專門學校山岳部
富山藥學專門學校山岳部
名古屋高等商業學校山岳部
京都藥學專門學校山岳部
縣立神戸高等商業學校山岳部
姫路高等學校山岳部

北岳バットレス登攀……（京都帝大）細野重雄…（1）
春期後立山連峰概観……（神戸商大）田中伸三…（7）
三月の積尾谷ピーク．穂高……（甲南高校）田口一郎 湯川孝夫…（18）
早月尾根……（同志社大）見島勘次…（33）
越百山南方のコルのトラヴァース……（第三高校）遠山富太郎…（35）
二股のスキー合宿……（第三高校）本野亨一…（38）
新雪期に於ける集團登高の經驗……（大阪醫大）水野祥太郎…（42）
二月の大山……（大阪醫大）小林義郎…（47）
雪中露營に於ける温度……（京都帝大）伊藤愿…（50）

登高記錄抄……（72）
聯盟ノート……（80）
編輯後記……（87）

挿圖

北岳バットレス…（扉）……高橋健治
北岳附近概念圖……細野重雄
長衛ノ岩小舍ヨリ見タル北岳…（スケッチ）……細野重雄
北岳バットレス……高橋健治
杓子岳．鎖ケ岳……田中伸三
早月尾根……見島勘次

（表紙圖案　中村氏）

1929-7
—1930-3

編輯委員

水野祥太郎
伊藤　愿

北岳バットレス（御池尾根より）

目次

早月尾根

北岳バットレス（雨池尾根より）

目次

杓子岳・鑓ヶ岳（小蓮華登攀の途中より）

目次

北岳バットレス登攀

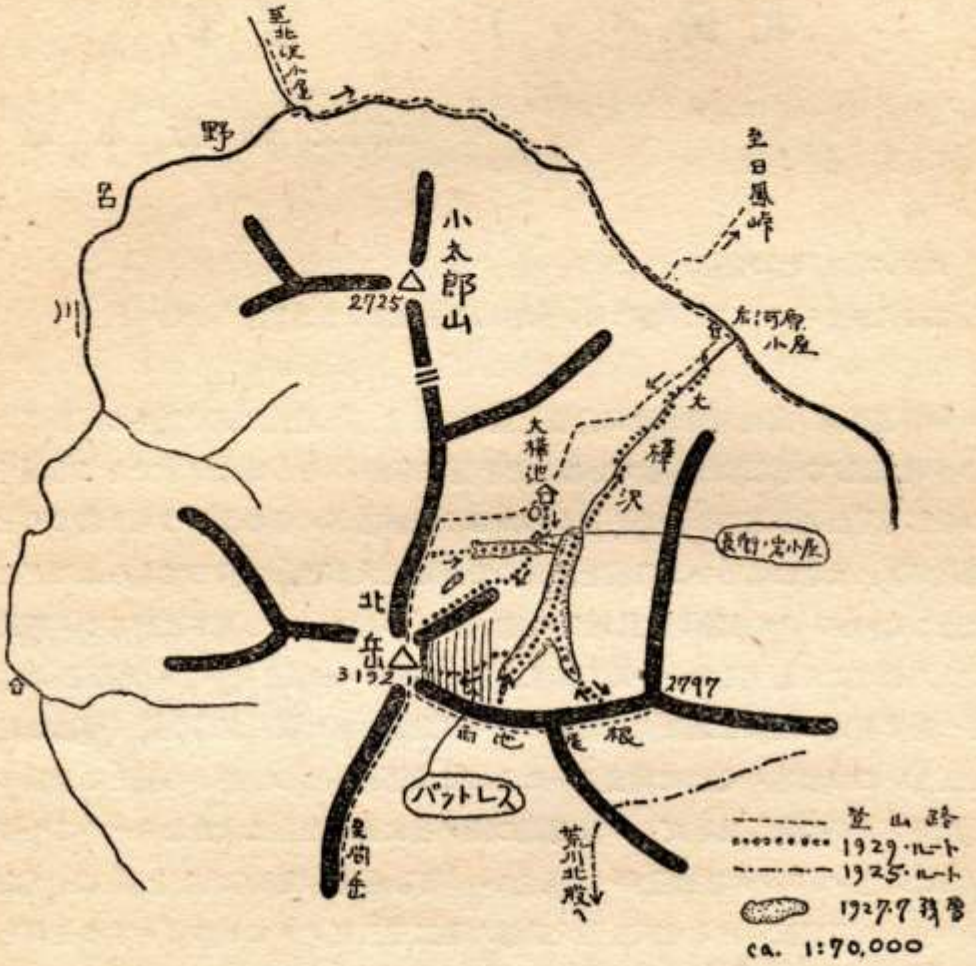
京都帝大 細野重雄

1929.7.11—21 の紀行.

高橋健治（リーダー）酒戸彌二郎，奥貞雄，細野重雄，竹澤長術（人夫）

1925 年の夏西堀，高橋兩君が荒川北股を登つたとき雨池尾根に出で北岳の東西が大きなバットレスをなして大樺澤に落ちてゐることを見て來た．その時は夕方でとても凄く見えたものらしく登れるかどうかわからなかつたさうであるが，その後みつちり岩で手を磨いた高橋君があれは登れるといふ自信を得たので僕達三人が連れて行つてもらふことになつた．實際このバットレスは餘りに目立たぬ所にある．バットレスの眞下に到るか，雨池尾根の上に立たねばこんな大きな——四百米もあるバットレスが見えないし，大樺池，北岳，間ノ岳をつなぐ普通の登路を通る人は勿論，我々が登攀の爲に撰んだ岩小屋（略圖參照）からも見えないのである．それに尙更悪いことには大樺池からの登路から見える北岳の岩は風化したガラガラの部分丈けだし，反對側の間ノ岳に面した方は大きなカールさへ作つてゐるからこんなバットレスを想像すべくもない．然し鳳凰山塊から北岳を見ると（山岳十六年第一號一六頁寫眞，日本地理風俗大系第六卷二三三頁グラビヤ參照）すつと肩をひいた雨池尾根のこちら側がかなりの急傾斜で大樺澤に落ちこんでゐるから斜ではあるが遠望出來るわけである．

このバットレスの最も面白い部分は寫眞の (3)(4) の岩稜であらう．この (4) の岩稜は側面から見るとマツチ箱を二つ續けて並べた樣な（スケッチ參照）形を呈し，プリズムを以てすれば廣河原からも明かに之を認めることが出來る．このバットレスは寫眞でも明かに認められる樣に逆層であるからこの岩稜の端のオーバーハングを直接にアタックすることは未だ我々の技倆の外である．その南側は益々明かな Stratification を持つた四十度乃至七十度の傾斜を持つフェースであつて，我々のとつた登路はこのフェースの部分である．更に南すると草付きや這松が多くなつて一本のガリーを昇して雨池尾根に迄續いてゐる．このフェースの上部はクラックやプロジェクションが多くなつて知らぬ間に脆い岩と變つてし



まふ．この箱の岩稜の北側は急傾斜を以てガリーを限つてゐる．このガリーは北岳頂上の直北に迄上つてゐる．第二日目のクライムではこのガリーのすつと上の方をトラバースしたが誤つて蹴落した石が連れをさそつてもの凄く木靈しながら落ちて行つた．而もこのガリーの落口はバーティカルでかなり長い．このバーティカルの部分を上るとガリーの右側から小さな tributary ridge（3）が出てゐる．この岩稜が高橋によればこのバットレス中で一番面白いものだといふが，僕は(4)の方が手強い點では一番だと思ふ．このガリーの北隣に入るガリー（2）は北岳より小太郎山へのメーン・リッヂ迄上つてゐない．相當急なガリーだから可なり手強いかも知れぬ．このガリーの北を界する尾根の下半部の繁りはかなりひどい．特にその北面はすごい程の樹だ．その北に一本北岳頂上から東北の方向に出る

目次

かなり長い岩尾根がある（(2)のガリーの頭は更にこの岩尾根から出た支尾根である）．第二日の登攀はこの尾根通しを登つたもので假に北岳東尾根と名付けて置く．(2)のガリーの北隣のガリー(1)はこの東尾根から出るもので上は二俣に岐れてゐる．右俣の方が容易であるが，上は這松の東尾根である．以上は全部大樺澤本流に落ちるガリーであるが，その左岸に岩小屋を持つところの支流に，東尾根の南側に喰む數本のガリーを集めた小谷が一本流れ込んでゐる．以上でバットレスの地形は大體述べた積りだが，登攀のスケッチ・ルートについては高橋のノートを引用しやう．

（1） Gully climb で終りには這松の北岳東尾根に通ずる．

（2） Gully climb で falling stones に氣を付けぬと危險なルートであるが Gully の暗い面白味がある．

（3） 七つの variations の中第一流に位する小さい ridge をたどるもので，逆層のこの岩を頂上へ direct に attack すれば最もエレガントなクライムを味ふことが出來ると思ふが 1929 年度のこのパーティーではその力がなかつたことは確かだ．

（4） (3)に劣らぬ ridge climb であるが上の方で這松が多いのは一寸困る．

（5） 吾々のルート．

（6） 這松の尾根，一番容易なルート．

（7） Gully を登つて雨池尾根に達す．

Stratification はマッチ箱の Nose を中心に著しく表はれてゐるが(1)のガリーになると不明瞭になるし，逆に雨池尾根に於ても消えて見えなくなる．バットレスも頂近くなるとやはり不明瞭になり，それと共に色調も多少赤味を增した，脆い岩に變つてしまふ．このバットレスを作る岩片を持つて歸つたのだが失つてしまつてわからないが，堅い層理のある部分の岩は Hornstone で，上の脆い部分の岩は砂岩ではなからうかと思はれる．地質調査所發行に係る十萬分之一地質圖甲府圖幅（1888年發行）によれば白峰三山附近は秩父古生層に屬するものであるからこの岩の層理は火山性のものではあるまいと思はれる．穗高や劍の火山性の massive の岩にしか觸れたことのない筆者にとつてはこんな stratified Rock は全く興味深いものであつた．

7月11日（晴），京都發，12日（晴），戶台着．12.30 竹澤長衛方泊．13日（晴，驟雨），戶台發 8.50—北澤小屋着 7.30 荷が重いのと雨宿りをしたので時間をとつた．14日（晴），滯在．所用で一日遲れた長衛を待つ．15日（晴），小屋發 7.20—北澤出合 9.30—廣河原小屋着 2.30．16日（晴，驟雨），小屋發 9.30—大樺池小屋着 2.00．17日（晴），小屋發 7．

長衛ノ岩小屋ヨリミタル北岳
●●●●●ノ點線ハ東尾根登路，一番遠ク左ヘ長クスカイラインヲ
限ルノガ雨池尾根，中央ニマッチ箱ノ岩稜ガ見エル

00—岩小屋發見7.30．大樺池からブッシュの中を等高線に沿ふてトラバースすること30分右側から這入る澤（明治三十年木暮氏が大樺澤の右俣を登つて北岳を極めやうとされたが雷雨に遭つて果さず途中から引き返してしまはれたといふのはこの澤らしい）に出た．谷には未だ相當の殘雪があつて左岸は50乃至100米もあらうか可成り廣い幅の草原である．恐らく雪崩の崩落路であらうと思はれる．グンナイフウロやキンバイの類が一面に咲き誇つたその中に巨岩が横はつてゐるので，近付いて見るとその下が concave になつて人が泊つた跡がある．少し手を加へると立派な岩小屋になつた．長衛が造つたので「長衛の岩小屋」と呼ぶことにする．この溪の兩岸はもはや濫木帶でミヤマハンノキ，ナヽカマドの類，ハウチハカヘデ等が多く，ダケカンバは少い．それから人の込み合ふ小屋に引きかへして荷物をこの岩小屋に運び，午後はバットレスの偵察に向つた．

7月18日（晴），天氣は相變らずかはらない．カラリと晴れて微風がそよそよと渡つて行く．皆ハチきれさうな元氣だ．雪溪を登りつめてマッチ箱の Nose の下に着いたのが8，00（寫眞8點）．直ちに繩で結び合ふ．繩の使用を心得てゐない長衛は連れて行かない積りだつたが登行心が强いので同行することにする．順序は奥，高橋，長衛，酒戸，細野．Fight-

ing spirit の强くてテクニクの巧な者を top にし，リーダーを二番に置いてパーティーをマネヂするのは高橋の採用するシステムである．各員の間隔は10米宛．寫眞に明な如く我々のとつた（5）のルートでは S 點に落ちる小さなガリー——これは上のフェースに直角になつてゐる——の落口は小さなピッチだがオーバーハングで登り難いので，右岸のリッヂを登る．いよいよアタックし始めたのが8.30．ラストマンはこのオーバーハンギングの下で小一時間も待たされたのだからやりきれない．このピッチをリッヂ通りに登つてから直ちにガリーに這入りフェースに取りつき易いところまで登る（9,30）このフェースの傾斜は下程ゆるやかで岩稜に近づく程，上に登る程，急になる．逆層でダイヤモンドの様に堅い．約100米この愉快なスラップをコンティニュアスに登る．惡いといへばいへる位の小さな突起が一つあつた丈けで，二時間半のクライムの後晝飯にする（寫眞 A 點）．この草付きから上は比較的簡單で，頂上近くは草付きと岩の組合せになり，岩は脆くなる．北岳の頂上に出たのが12,15．縱走路を來たものが丁度頂上に出てくる時刻だ．天候は崩れ出したのか午後になると霧が少し深すぎる．登つて來た所を見るが何も見えない．遙々京都からもつて來たパイナップルの一鑵に歡聲をあげる．天氣が面白くないので雨池尾根を飛ぶ様にして下りる．岩小屋まで二時間とはかゝらずに歸る．

岩小屋發 6.45—ベットレス直下 S 點着 8.00—アンザイレンしてクライムを始む 8.30—スラップを登り始む 9.30—晝食をとる A 點 11.00—.15—頂上 12.15—1.00—雨池尾根を下り岩小屋着 2.40．

7月19日（晴）．高橋はベットレスの寫眞を撮りに單身雨池尾根まで登る．岩小屋發 8.00—雨池尾根 11.00—岩小屋 12.30．

あとの四名は北岳東尾根を登る．岩小屋の對岸にはいる小さな ravine（前記）を登り，直ちに岩小屋に向つて出てゐる尾根をアタックする（S 點 8,50）．アンザイレンの順序は長衛，酒戸，細野，奥．一番とりつき易さうなガリーを登る．ガラガラ石で一杯だ．歩くたびに石が落ちる．今日のクライムで一番惡かつたのはこのガリーの中で5米程の瀧（水無し）のピツチである．一時間にしてリッヂに出る（10,00）．雪渓の上を行く高橋とエーホーの呼應をやる．これから上は灌木，更に少し高くなると這松との苦鬪だ．大體リッヂ通りに行つたがマッチ箱の岩稜の北のガリーから數へて三本目（寫眞(1)）のガリーの上部の邊から稍這松も減じ，岩との組合せとなる（スケッチ B）．岩は相當風化してゐるので落石に注意を要する．箱の岩稜の北側のガリー（寫眞(3)と(4)の間）のすつと上の方を横ぎ

つて箱の岩稜の上部に出る（11,45）．クライムは殆どコンティニュアスであつた．12,10頂上に出る．這松くゞりや平凡なリッヂで，今日とつたルートが北岳東面では一番つまらぬルートの様に思はれた．然し今日はよく晴れてゐるので我々の岩小屋が草地の真ん中にポツンと横つてゐるのが見える．下りは縦走路を傳ひ，岩小屋の澤のつまりと思はれる邊まで下り，草原を下りてガリーにはいる．このガリーは概してゆるやかだが唯一所瀧があるので小さな高まはりをしなければならなかつた．一時間餘にして岩小屋に歸る．

出發7.50—岩にとりつく，S_1點．—ガリーを登りきつてリッヂに出る 10.00—B點 10.30—(3)と(4)の間のガリーの上方をトラバースする前 11.45—北岳頂上 12.10—12.20—大樺池への縦走路を下り岩小屋の谷のつまりと覺しき所から谷を下り始む 1.35—岩小屋 2.30 夜甲府盆地に盛に雲湧き上り雷光が美しかつた．

20日曇，少雨，岩小屋出發 7.00—大樺澤を澤傳ひに下つて廣河原小屋着 9.00，雨が來たので滯在にしたら午後あがつてしまつた．21日（曇後晴），小屋發 6.10—細野と長衛は鋸へ行くので別れて北澤小屋へ，他は白鳳峠を經て青木湯へ 5.30．

この記錄は高橋のノートから作られたものである．高橋が直接筆を下せばよいものが出來上つたであらうが色んな事情で僕が書く様になつて結局こんな疏漏な紀行文になつてしまつた．又このバットレスについての記載はかなり探して見たが不幸にして一つも見つからなかつたことを附記して置く．

目次

春期後立山連峰概観

神戸商大　田中伸三

我學生山岳聯盟の春期に於ける後立連峰登山に關する記錄としては，舊くは京都大學パルティの4月に於ける小日向よりする杓子尾根登攀あり，又昭和3年4月下旬に於ける鹿島營林署小屋よりする五龍岳行がある．

而して最近に於ける記錄を時間的に羅列するならば，

昭和4年春期

▲杓子岳主稜登攀，3月26日，神戸商大　パルティ　三名，ポーター　三名．

▲唐松岳行，3月30日，神戸商大　パルティ　二名，ポーター　二名，

▲白馬岳より小蓮華山へ，3月30日，大阪醫大　パルティ　二名，

昭和5年

▲白馬岳，3月21日，三高　パルティ　四名．

▲白馬澤より小蓮華，白馬岳へ，(途中引返し) 3月22日，甲南高校　パルティ　六名，ポーター　一名．

▲唐松岳 (途中引返し) 3月22日，神戸商大　パルティ　三名．

▲五龍岳 (平川入廻行大黒經由) 神戸商大　パルティ　三名，ガイド　一名．

▲赤澤，鳴澤，岩小屋澤岳，3月31日，京都大學 (先輩)　パルティ　二名．

▲スバリ，針ノ木岳，4月3日，京都大學 (先輩)　パルティ　二名．

▲鹿島槍ケ岳，爺ケ岳，4月3日，神戸商大　パルティ　三名．

等である．

便宜上此を四つのグルッペに分つ，

第一を小蓮華以南，不歸以北．

第二を不歸以南，五龍岳以北．

第三を五龍岳以南，爺岳以北．

第四を爺ケ岳以南，針木岳以北．

とし記錄を中心として以下述べて見やう．

第一グループ

A. 白馬岳　附（小蓮華山）.

（一）大阪醫大　南勇吉，小林義郎.

大雪渓ー白馬岳ー小蓮華.（1929）

3月30日，（快晴）. 出發5.25 猿倉舊小屋ー6.50 白馬尻ー10.00 頂上小屋，（晝食30分）ー11.00 頂上ー12.30 小蓮華頂上（休憩30分）ー1.10 乘鞍下（第二回晝食30分）ー之よりスキーを穿く. ー3.30 猿倉歸着.

此の行の前の天候狀態は，

3月23日晴，24日雨後曇，25日霙後晴，27日晴，（2,000米以上霧卷く）28日晴後雨，29日曇（1,600米以上霧卷く）以上の様であつて降雪なき爲，新雪雪崩の危險は無く，日射，降雨による雪崩のデブリを多少認めたるのみ.

（二）第三高等學校　長谷川清三郎，本野亨一，田中敎，本尾一郎.

大雪渓ー白馬岳ー大雪渓.（1930）

3月21日（晴）. 出發4.15 猿倉新設小屋ー5.50 ウシロ澤（スキーを穿く）ー6.20 白馬尻ー8.05 第一回食事ー9.54ー10.14 スキデポ，葱平ー11.03ー11.25 縣設小屋ー11.55ー12.05白馬岳頂上ー12.55ー1.30 スキデポー3.10 白馬尻ー5.00ー5.30 猿倉小屋ー9.00細野村.

以下長谷川君の記述による.

午前3時起床，下方には薄雲があるが大體晴天. 明大パルティが午前3時45分に出發. 私等はそれより30分遲れて行く. ウシロ澤迄雪がかりかりの爲スキーを穿かずに行く. 雪渓の雪は風の爲大分クラストして居た. 其爲アザラシを屢々外した. 大雪渓中途（大雪渓が上部に於て急に傾斜を增して居る下部）にてパンを食ふ. 大雪渓上部の急傾斜は雪が固いためスキーをぬいで行く. しかしラッセルが相當あるので交互にラッセルをやる. しばらくすると雪はマーブルクラストとなり，本野のトリコニでキックステップしつゝ上る. 大雪渓の最上點の岩蔭（葱平ならん）にスキデポを設け，こゝよりクランポンをつけて進む. 此處より縣設小屋の間は小雪渓を通らず雪渓のうんと北邊を通つて行く. 御花畑は一部偃松を現はして居るのみ. 縣設小屋は大體（一つを除いて）埋まつて居た，此處より白馬館小屋迄の間はクラストといかぬ迄も大分固かつた. 白馬館小屋も最南のものゝ外は皆埋まつて居た. これより上は殆んどクラスト. 頂上近くでは風の爲雪少く夏道も現はれて居た. 白馬館小屋へ來た時明大生が漸く登つて來た. スキーデポで晝食，大雪渓中途よりスキー

を穿く．大雪渓は雪が固くて横ヒりで下る，雪渓を出るとブレーカブルクラスト．小屋へ歸ると甲南の人々が居られた．（以上）

（三） 甲南高等學校　西村格也，楠木義明．西村雄二，多田潤也，井上正憲，（大島寛一）

この外にポーター　一名．

小蓮華—白馬岳（途中引返し）—小蓮華．（1930）

3月24日，（晴，西烈風）．5.10　猿倉新設小屋出發—5.40　長走澤—6.20　白馬尻—6.55　白馬澤—11.30　小蓮華頂上—1.00　引返し—5.00　タカスノ尾根—5.20　白馬尻—6.00　小屋歸着．

以下西村君の記述による．

出發はも少し早くしたかつた．3時30分現在零下4度氣壓567，先づ大丈夫と出發する事にする．5時過ぎの出發となつたので既に明るい．別にラテルネの必要は感じない．雪が堅いので小屋からアイゼンで出掛ける．昨日下檢べしておつたので今日の進行は早い．アイゼンで此の緩かな且相當ブッシュのある登りが行けた事は大變時間をセーブした．御殿場（猿倉と白馬尻との殆ど中間）の少し上からスキーを穿く．（其後小蓮華頂上下200米迄スキー）大雪渓も白馬尻から見た所随分ゆつたりして居るし，12月來た時の様にデブリも出て居ない．白馬側からも杓子側からも此處より見た限りでは出て居ない．尤も相當物凄いのでなければ此處からは眺められまいが．白馬澤を遡る．夏は餘りよい感じを與へないが今は素適だ．随分廣く感ずるし緩い．白馬も頭こそ見えぬが此處から見た姿は凄い．白馬澤より分れてタカスの尾根に殆ど平行に入つて居る澤に入る．此の附近相當のデブリがある．高さは1米乃至1米半だが長さは200米程も續いて居る．此の澤を餘り深くは入らないで，途中から尾根に取付く考へだつたが澤の方がすつと樂な様なので雪崩は大丈夫として澤をぐんぐん上る．傾斜は次第に加はるが別に大した事もなく氣持よく進行出來る．登り切つて50米も行かぬ内に尾根はぐつと痩せる．そして岩だ．エッヂは別に鋭くはないが岩ががらがらして居り雪が悪いので相當慎重に行動する．之が約120—30米．夫が盡きて純然たるパウダースノーの急傾斜となる．之が7—80米それで小蓮華の東走するメインリッヂへ出る．頂上より約80米の所だ．疾風にたゝられて遂に白馬迄は行かずに了つたが天候さへ普通であつたら白馬への日歸りは容易だらう．　（以上）

参考として私が本年1月2日，大雪渓より白馬岳へ登つた記錄を此處に掲げやう．

3.45　猿倉新設小屋出發—4.50　白馬尻—6.30　葱平（スキーデポ）（第一回食事）—8.30—8.50 縣設小屋—9.30　白馬岳頂上—9.40—9.55　頂上小屋—10.30　葱平—10.

50　白馬尻—12.00　猿倉小屋.

今上記の記錄を比較對象して見やう.

白馬尻迄は醫大パルティは1時間25分.三高パルティは2時間5分を要し,甲南パルティは1時間10分を要して居る.冬期此の間は1時間で行くを普通として居る.勿論雪質の相違は所要時間に影響する所ありとしても此間に2時間以上を要する事は如何かと思ふ.白馬尻より葱平迄普通2時間,三高パルティは1時間50分を要して居る.私達の1月の記錄は1時間40分.此處から縣設小屋迄3月で1時間,冬期1時間半位のものであらう.私達は烈風に正面から吹付けられたため2時間を要した.白馬は冬期登山の對象としては冬雪崩の研究と言ふ大きな問題があつて可成り困難な山であるが,併し春期登山の對象としてはステップカットも大した必要なく,むしろあつけない位の山である.

歸途の時間はスキーの利用域の多少により相違する.

甲南パルティが白馬澤を遡行し小蓮華より白馬岳へ向つて,登頂出來なかつた事は殘念ではあるが之とても烈風がなかつたならば,問題ではない.後立のみならず北アルプスの山では晴天でも尾根筋に强風のある時は登行は不可能の事が多い.私達が同日細野村より唐松,不歸へ行かうとして果さなかつたのも此が爲である.

B. 杓子岳主稜,

神戸商大　田中伸三,笠原速男,宮村堅一,外ポーター丸山靜男,大谷定雄,鹽島鐙司.

3月26日,晴後曇—6.05　猿倉舊小屋出發—7.40　スキーデポ—10.30　中山澤から見て頂上の樣に見えるピーク上—11.00　惡場下(天候惡化の徵あり)—12.05—12.10　頂上—1.15　惡場下—3.20　スキーデポ.スキーを穿つ—4.10　歸着.

雪堅きためスキーをトラーゲンす.スキーデポは長走澤の中部.長走澤を上り途中より杓子岳主稜へからむ.2,000米より上方は粉雪(深さ20糎)尾根の大雪溪側はウインドボードをなす.中山澤より見て頂上の樣に見えるピークより上方はリッヂがナイフエッヂとなり大變惡い.田中トップで馬乘りとなりステップを切りつゝ登る.ザイルは使用せず.此のリッヂは所々もろい岩が露出して居る.ホールドの確かなものは持ち,不安定のものは右側を卷く.頂上には一寸した Gipfelwächte が出て居る,其を叩き壞して右手より匍上る.歸途アブザイレンするには適當のビレイングピンもなしアンザイレンして下る事は時間の點から不利なので上りのステップをキックし大きくしながら下る.下るに從ひ雪質軟かく,膝迄埋る樣な事が屢々あつた.此んな時はライフェンがあるとよいと思つた.スキーデポはもつと上方の方がよかつた樣だ.

杓子岳は前述した様に曾て京大四手井氏パルティが小日向より登られた事がある．しかし主稜へ直接取付いたのは恐らく初めてゞあらう．本年1月商大藤井パルティが白馬尻より杓子主稜へ取付いたが，此も春期に於て面白いコースであらうと思ふ．

杓子岳へは，勿論大雪渓を經由して行く事が出來るがそれでは登攀の興味は大部分減殺されてしまう事と思ふ．勿論我々のコースは夏期に於ては絶對に通過不可能である．唯積雪期に於てのみ比較的面白いクライムを樂しみ得るであらう．

G. 鑓ケ岳其他，

鑓ケ岳は杓子岳と共に信州側から見る時は可成り物凄い様に見えるが黒部側は緩くて問題ではない．さりとて信州側からの根據地は得る事が殆んど不可能に近く，それがためよき登攀の對象たり得ない．勿論白馬頂上小屋を根據とするならば登頂は問題ではないがたゞ興味が全然無くなるわけである．白馬頂上より唐松岳八方小屋迄の縱走は我々が昨年3月計畫したものであつたが天候惡く，終に果す事が出來なかつたが今春，立教，明大の人々により實現された．

〔註〕 唐松小屋よりの不歸縱走は本年冬期京大高橋君によつて，既になされて居る．

D. 根據地，

猿倉小屋，

四谷から約4時間の行程，夏の賣店が舊小屋，其の少し左寄りに新らしいスキー小屋が出來て居る．可成りよい小屋だが勿論スキーヒユッテとして，もつと改良すべき餘地は充分ある．山毛欅の林の中にあり，附近にスキーの好ゲレンデがある．寢具，食料も此處で得られる．登山者のある毎に番人が一人上つて炊事をやつてくれる事になつて居る．現在の様に丁度夏の山小屋と同様な經營法でぎつちりつめられたりすると一寸嫌になる．小屋の位置は雪崩からは完全である．

白馬頂上小屋，

頂上小屋で積雪期宿泊の出來るのは最も南端の小屋である．本年初めて宿泊の設備をした程度で未だ不完全なものである．第一に困る事は煙突が拔いてない．小屋も夏のまゝでたゞストーブを置いた程度のもの．薪炭，毛布，米，味噌等は大分置いてある．煙突を拔き小屋に目張りして此を完全な冬小屋とするならば大分興味のある登行を企て得るであらう．

第二グループ，

A. 唐松岳，

神戸商大　田中伸三，宮村堅一．ポーター　郷津長兵衛，矢口伍郎．

3月30日，(快晴)，3.00　四谷出發，細野よりアイゼンを穿く—6.00　黒菱—8.00　中繼小屋，スキーを置く，(第一回食事)—11.00　唐松小屋．

中繼小屋より上方は尾根が可成り痩せて居る．夏道を通らず尾根筋を行く．雪堅くアイゼンのツアックは殆んど埋らない．牛首(唐松小屋東方のピーク)附近は風强き爲か雪があまりない．小屋の掘出しに2時間を要した．人夫を小屋へ殘し二人で唐松岳頂上へ．(30分にて到着)．此處から見た不歸は黒部側殆んど積雪なく比較的簡單に行き得ると思ふ．別に登行心をそゝられると言ふ事もない．不歸は矢張二股から見た姿が最もアトラクティブだ．

〔註〕唐松へは3月28日，田中，笠原，宮村が第一回登山を試みたが出發遲く，スキーを使用したため時間をとりすぎて失敗に歸した．

細野村(11.00)—中繼小屋着(4.20)—細野(6.00)小屋は秋に使用した者の不注意からか雪が一杯つまつて全然使用が出來ず其上天候が惡化したため匆々引上げた．

唐松岳，(途中引返し)，

3月22日，快晴(2,000米以上烈風)

神戸商大　田中伸三，富川清太郎，藤井盛藏．

出發4.00 村を離れてすぐアイゼンを穿き，スキーをトラーゲンして八方尾根を登る．中繼小屋(10.00)八方山を越えて2,000米迄登つた頃から物凄い風が正面から吹付けて中繼小屋附近では呼吸するのも困難を感ずる樣になつたので遂に退却と決定，五龍へのコースの遠見尾根の偵察をしながら細野へ歸る．(3.00)．

唐松は其の時間記錄の示す樣に大變樂な山である．天候さへよければ實にのんきな氣分で登れる．それだのに我々が手をつける迄全然未踏破で殘されて居たのだから面白い．初めて登る時，唐松小屋の事も氣になつたし，又中繼の小屋も利用し得るか否かについて大分氣にしなければならなかつた．八方尾根は後立獨特の强風の作用で新雪直後か，春期ならば日中4—5時間の間よりスキーの使用は出來ない．本年冬期は京都大學の人々が約1ケ月に亘つて唐松小屋へ滯在されたし，大阪醫大の人々も唐松へ一回登つて居る．今から見れば唐松岳を登山の對象として書く事は如何とも思はれるが唯，記錄的意味に於てのみ參考として揭げたわけである．

B. 五龍岳，

（イ） 唐松小屋よりする五龍登路の問題，
五龍岳トライアル，（途中引返し），

神戸商大　田中伸三，宮村堅一．

3月31日，晴後吹雪，西南風强し，

唐松より牛首，大黒岳を經て五龍岳へのリッヂ沿ひのコースは雪庇と，尾根筋がアンサウンドロックよりなるため春期に於ては危險である．其が爲我々は澤筋コースを採つた．

小屋出發午前8時30分，唐松岳西南の澤を下る．大黒より西方に派生して居る尾根の下部へ着いたのが11時．晝食を採り，ルートの研究をやる．五龍へのルートは三つ考へ得る第一のものは此の尾根を登つて大黒より五龍へ行くもの．第二のものは五龍へ直接取付くもの，（最短距離であるが時間も相當かゝるし，ザイルも使用せねばならぬ）．第三のものは，我々の下つた澤を舊大黒鑛山跡位迄下り，それより五龍岳への比較的緩い登りである．第三のものは一寸雪崩の危險を冒さねばならない．第一のコースはライフエンを持たぬ我々にとつて雪質軟柔となつたため疲勞度が劇しく結局第二のコースを採る事に決定．其の尾根の直下に來た時丁度吹雪き出したので急いで退却，午後三時小屋へ歸着．

〔註〕 早朝澤筋コースを下る事も普通の場合許容さるべき事ではあるが直線距離100米で600米の下りである此の唐松西南の澤では一寸困難である．早朝雪面クラストせる場合にアイゼンのツアックはたゝず一々カットステップするわけにも行かない．又歸途疲勞した身體で根據地迄600米の上りも一寸苦痛である．

唐松小屋よりの五龍岳行きは昭和4年12月17日，立教大學の人々が竹澤長衛をつれて大黒を經由してリッヂ沿ひに往復されたさうである．

（ロ） 細野村よりの五龍岳，（平川入りより大黒經由，歸途遠見を下る），

神戸商大　田中伸三，富川清太郎，藤井臨藏，外に丸山靜雄を同伴す．

3月26日，快晴，西微風，3.30　細野村出發，平川入りを遡行す—5.00　ヒッタク倉庫跡—7.00　二本松尾根上—9.30　大黒澤雪庇下—10.20　雪庇上（第一回晝食）—10.50　同所出發—12.00　遠見尾根出合—1.00—1.05　五龍岳頂上—1.35—1.55　遠見尾根出合（國境）（第二回晝食）—6.20　遠見尾根下（矢筈山）—7.45　細野村歸着．

大黒澤の登りが可成り急でうるさいらしいのでスキーは持つて行かぬ事にした．平川入りも前日の偵察でよく調べてあつたので行程は案外はかどつた．二本松尾根で林間にも不關，大きな表層雪崩の出て居たのには驚かされた．南斜面で山毛欅の林，巾70米，長さ30米位のものであつた．又大黒澤は殆んど表層雪崩のデブリが連續して居る．大黒澤の

上部に於て雪庇の自然崩壊によるデブリ一個を認めた．大黒より遠見尾根出合迄のリッヂ沿ひは夏期よりもむしろ樂であらう．五龍岳は三つのピークから成立つて居る．此を北から第一，第二，第三と假稱すると第三ピークが頂上になるわけである．コルから第一ピーク迄は雪庇の連續，大體リッヂ沿ひに行く．第二ピーク，第三ピーク共に信州側は物凄い崖である．我々は第二ピーク頂上を傳つて第二ピークと第三ピークとのコルに出た．第三ピークは越中側を捲む．雪面はウインドクラスト及ウインドボードでリップルマークを形成して居る．雪斜面は小規模の schneebrett を起すため出來る限り岩を選んで登る．斜面はかなり急でカットステップも一寸つかれる．オーダー田中，富川，藤井で頂上へ．頂上の雪庇は問題でない．北側に卷く．歸途第三峰は大體登りのステップをキックし乍ら下る．第二峰は越中側を走つて下りる．遠見尾根の上方後立メインリッヂとのコル所謂白岳附近の雪庇は細野から見ると可成りうるささうだが行つて見ると案外樂だ．遠見の下りは大變長い今更の樣にスキーが戀しくなる．此の尾根は尾根筋も可成り廣く樹木もあまり繁茂して居ないのでスキーの滑降には理想的である．最初我々のプランは遠見尾根よりの五龍岳往復と言ふにあつたが，あの長い尾根を一日で往復する事は困難と思はれる．尾根の途中でビワークでもすれば——そしてスキーをトラーゲンして行けば可成り面白い登行をなし得るであらう．平川入りより大黒岳への夏道は今は全く廢道になつて居るさうだ．平川入りより大黒澤へかけての雪崩も新雪直後でなければ大概大丈夫である．

〔註〕 昭和3年4月21日に京大，今西錦司，四手井綱彦兩氏が竹澤長衛を連れて鹿島營林署小屋を根據として五龍岳への積雪期第一回登攀に成功した．（三高部報第六號參照）

其時のタイムは出發（5.00）—（8.30）西天狗三角點—（12.35）白岳コルー（1.40）國境—五龍頂上（4.00）—（5.00）白岳—（9.00）天狗の三角點—（1.00）歸着．

G. 根據地，

細野村，

民家で宿泊の世話をしてくれる．附近には可成りスキーゲレンデもある．缺點としては目的地迄可成り遠い事である．

八方中繼小屋，

八方中繼の小屋は日電が建設したものであり，八方山三角點より上方約500米の地點，標高2,200米位の所にある八方池よりは少しく東寄りで尾根上に立てられて居る．入口は北側で，周圍は岩で圍み，すつきりしたヒュッテである．米，味噌，薪炭は白馬館で上げて居る．此の小屋は昨年3月唐松行きの時使用するつもりで出掛けた所，前述した樣に小屋

が露出して居たに不拘，雪で完全に埋つて居て使用する事が出來なかつた．本年冬期，我聯盟の人達が此の小屋に籠つて附近でスキーの練習をやつた．然るに3月行つて見ると又小屋の中に雪が侵入して居て使用する事が出來なかつた．故に此方面に行くには餘り此の小屋は當にはならないと思ふ．

唐松小屋，

アルプスに於ける冬小屋として最上の部類に屬するものと言ひ得やう．小屋の外部は岩で疊み立派な頑丈な小屋である．小屋は尾根より西側にあり，西向きである．正面に丁度劍，立山連峰が見えて素適だ．昨年3月使用の際は夏山の終りに相當嚴重に密閉してあつたに不拘，南側半分は全然使用が出來ぬ程に雪がつまつて居た．此の小屋から唐松岳頂上迄は30分あればよい．だから此小屋は唐松岳行きの根據地としてより不歸，五龍行きの根據地としての重要性を多分に持つて居る．

第三グループ，

A．鹿島槍ケ岳，爺ケ岳，

神戸商大　田中伸三，富川清太郎，藤井睦藏，

4月3日，4.05　鹿島村出發（スキーは携行せず）—5.05　小冷澤出合（アイゼンを穿つ）—6.20　西股出合—6.45　笹釘—8.55　雪庇下（アンザイレンす）—9.55　雪庇上—10.35　鹿島槍頂上—1.25　爺岳頂上（尾根筋より谷へ下る）—3.05　小冷澤下—4.50　大川出合—5.25　鹿島村歸着．

30日の偵察により大冷澤北股の笹釘附近迄の地形がはつきりわかつて居るため，時間を可成りセーブする事が出來た．笹釘より上方は殆んどデブリが帶狀に連續して居る．我々は長岩を通らずに鎌尾根を上つた．雪庇は可成り大きなもので，アンザイレンして叩き壞した．身體を入れるスペースを切りバッキングアップで登る．オーダー田中，藤井，富川．リッヂに出れば鹿島槍迄は問題ではない．信州側は殆ど雪庇の連續である．冷池より爺へかけてのリッヂは雪庇や雪堤の爲夏期より歩き易い．爺尾根は地圖で見たよりも惡い．梢を渡る樣な所が二ケ所もあつて一寸いやな思ひをさせられた．積雪量も少いので尾根傳ひに下るのをやめて小冷澤へ下る．雪面は日蔭のため．クラストして居てアイゼンのまゝでも比較的もぐらない．澤へ下つたのが三時過ぎ，雪崩の心配は少しもなかつた．此澤で一番大きなデブリは爺ケ岳より直接此澤の本澤へ出て居るもので，數日前の降雨のため出たものらしかつた．西股（夏の所謂長ザク）には大きなデブリが出て居る．しかし此とても

早朝にさへ通過すれば北股同様問題ではないと思はれる・

B. 根據地，

鹿島村及營林署小屋，

旅館はない，農家に泊めて貰ふ・此村より約3粁で大川と冷澤が分れる・大川が大剛澤と分れて，すぐ大川の左岸に營林署の造林小屋がある・此は使用前大町營林署へことわつておかねばならない・

鹿島村を中心としてスキーゲレンデはない・丸山で少し滑れる程度のものである・大川は冷澤より谷筋が狹い・大正三年に創設した林道が川の右岸に沿つてタル澤の附近迄ついて居るが・何分春期デブリのため道は全部傾斜をなして歩み難い・又川原は水量が多くて徒渉は出來ない・若し天狗尾根より遠見に取付くならば矢張オーゴ澤を遡行して扇平から西天狗に取付くとよい樣である・問題の鹿島東尾根を採るためには，犬の窪より上方雪釘の對岸邊りのリンネを上るのが最もよいと思ふ・

第四グループ，

A. 赤澤，鳴澤，岩小屋澤，

京都大學 （先驅） 今西錦司，高橋健治，

3月31日，曇後晴，

以下今西氏の記述による・

小屋の直ぐ後から赤澤の尾根に取付き赤澤岳へ登る・餘勢をかつて鳴澤岳，岩小屋澤岳と縱走し，先日スキーで登つた岩小屋澤の尾根を下る・終日クランポン・少しもぶからず足ならしに大いになつた・

B. スバリ，針ノ木岳，

京都大學 （先驅） 今西錦司，高橋健治，

4月3日，(快晴)

スキーはチーエンしてマヤクボ迄登り此處をデポとす・針ノ木岳北面所々に氷化せる所あり・クランポンの練習によし，スバリ岳は極平凡・天氣がいゝので景色を見て餘り悠々としたものだからマヤクボ2時半出發で既にブレーカブルクラストになやまされ（但日射は尙あり）連續滑降の快を得られなかつたのは遺憾千萬・針木谷下半はデブリでスキー滑降の効果は甚しく減殺された・

感想——大澤はトレイニングに實にいゝ所だ．しかし10日も居たら飽きて了ふだらう．それは地形の然らしむる所であつて其段笹ケ峰なんかはいゝ所だ．possibleroute は何回かの早稲田の合宿及び其の他のパーティによつて籠川側は殆ど殘す所なく歩かれて居る scale が小さいから big climb は出來ないが谷，尾根，スキー，クランポン等變化に富んだプランを樹てる事が出來，又天候，雪質に應じて適當な登攀をなし得る點，部の合宿練習なんかには甚よい．雪崩は第二次の危い奴が終了した後であつたので安心出來たが3月中旬迄は餘程警戒を要する．今年は鳴澤から一本，赤澤から一本二次の大きい奴が出て居た．早稲田の記錄によるとあの年（1929）は大澤から大きな二次が出た樣だが今年は出て居ない．又もう出る樣子もなかつた．高次の雪崩は屢々觀察したが其原因は今の所不明である．此處は冬入る所でなくクランポンのきく樣になつた春の所であらう．若し春此處へ入つたなら大澤の小屋附近でグズグズして居ないで毎朝，早く起きてサツサと高い所へ登る事である．毎朝登りの二時間位はウオーミングアップとして必要である．それからマヤクボなり針木峠なり好きな所へ行つてビギナーはザイルテクニックをやるのもよし或はあの廣いマヤクボカールから continuous に針木谷迄滑り下すのもいゝ．（以上今西氏）

以上大體に於て最近に於ける記錄を中心とする春期後立山連峰を御紹介した．

目次

三月の横尾谷ビワーク・奥穂高・北穂高・西穂高

甲南高校　田口一郎
湯川孝夫

横尾谷ビワーク

雪の特に少なかつた今年もまだ梓川の谷には雪が厚くあの美しい灰色の砂利と青色の流れとをかくして居た3月，その3月も終り近く梓の河原にすくすくと立つて居る木もやがて若い芽を出すかの様に思はれる頃，僕達は大きくふくれあがつた七貫近い荷に鍋やざるや雪靴をぶらさげながら，やはらかいザラメ雪の上を奥へ奥へと平地行進をつゞけた．そして雪に輝く前穂がふりむかなければ見られなくなる頃僕達は横尾の靄なほ暗いタンネの森に入つて行つた．再び河原に出るともう眞白な南岳が，黒い屏風岩のかげにそゝり立つ横尾河原だ．かねて定めてあつた場所にルックを下すや否や雪掘り作用が始まる．ショヴェルを振るもの，スキーで雪のブロックを切るもの，木に赤旗を結びつけるもの，着々と僕達の家は出來て行く．横尾谷の奥に光る南岳が雪にかくれやがて空から冷たい雪片がひらひらと落ちて來ても僕達は今始まらんとする樂しい山生活を思つてたゞよろこびにむせぶのみであつた．かやうにして七人の横尾谷の根據地は作られて行つた．

僕達が横尾谷にビワークして穂高へスキー登山を行ひたいと云ふ希望と計畫は隨分前からあつたものだつたが遂にそれが具體化して七人と云ふ比較的多數により甲南山岳部にとつて積雪季における第四回の穂高生活が實現した．今までの甲南山岳部の穂高生活において涸澤より穂高の峰頭に登攀するのに常に一ノ俣の小屋が根據地として選ばれて居た．それに僕達は何故附近の山小舍生活を避けてわざわざ登攀のためにはかへつて能率を悪くする様なビワークを選んだか？　それは一ノ俣小舍を使用する事が餘り愉快な事ではない事，少しでも峰頭への距離を近からしめる事及びビワークに關して甲南シューレに行なはれて居た理論を實踐的に把握したかつた事等が重な理由であつた．殆んどすべての舊來の日本の山小舍に共通するものであるが一ノ俣小屋は夏のあの瀟洒たる姿に比べて殆んどお話にならない程冬季使用には不愉快な小屋である．即ちあの小舍程煙たい小舍はない．一寸大きい火でも起さうものなら神經のデリケイト？な僕達には目も開けて居られぬ位なら

まだしも一度あけるともう閉ぢられなくなる程辛い事になる．こもつた煙が仲々出て行かない小舎だ．屋根に雪がのつて居る爲のみならば何處の山小舎でも同じ事だが確にあれは換氣が充分に出來ないからに相違ない．尤もこの小舎で火をたくのは夏に食堂にあてゝある土間だから餘り無理も云へないがこの位積雪季の登山に數多く使用される小舎は少ないのだからせめてストーヴなりともおいて貰へないだらうか．そしてこの小屋は餘り大きな小舎ではないので僕達のみで七人も行き他の人々と一緒にあの小屋で生活するのは可成不自由な目に會はなければならない．其の上今年の１月は蒲團も少なく矢張シュラーフサックの必要があるらしかつたのでむしろこれらの點に於いてもビワークしたいと云ふ動機が生れて來たのである．次に穗高の峰頭への距離や行路の狀況等を考へて見ると一ノ俣と横尾の間は夏は丸木橋こそ多けれ良い道だけれども１月や３月特に今年の樣に雪の少ない年には非常に惡くなり特に１月の粉雪の時等二時間近くも費してしまふ所なのである．それがナハットマルシュの時となると更に苦勞は增許りでこの短かい場所に，然も疲勞の多いナハットマルシュに於いて多くの時間をとられるのは登攀のタクテイック上不利な事なので可能的に根據を横尾谷と梓川との出合より上に置きたいと思つた．そして又この附近にある横尾の岩小屋も七人の多數で行けば殆んど一杯になるから自然物を獨占する事になるので使用したくはなかつた．之も又横尾谷ビワークの動機の一ツである．第三の動機としてはビワークそのものゝ實踐的の研究がしたかつた事である．山小舎の數は多くとも合理的にそれが分布されて居ない上，且それが皆夏季の登山者を對象とした營利的建築物か，たとへ營利的のものでなくとも建造目的が夏季の使用に限られるか或るひはそれを主眼とされて居る日本登山界の現今情勢において僕達は白馬岳や其の他極く小箇所を除く他（勿論それも完全とは云へないけれど）スキー登山に際していつも山小舎に關して大きな不滿と不便とを感じるのである．僕達は冬の山を愛しウィンターアルピニズムを把握したい熱情にかられて居る限り僕達自身でこの大きな不滿と不便とを除く努力を少しでも日本の登山界に提供しなければならない．それには如何にすべきか．進路は大方二ツに分れてゆくだらう．一ツは積雪季登山のアンゲネームな根據地たるべき山小舎を眞に妥當なる地位に設置する事，そしてこの實現手段として學生山岳聯盟の主張として努力する事であり他は雪中露營の理論及實踐の研究により安易なベイスキヤンプを張る能力を獲得する事である．之も勿論聯盟の仕事に加へらるべきだらうけれども前者程聯盟の仕事としての必然性を帶びて居ない．更に今僕達の要求する山小舎が實現した時にビワークはもう不必要となるのであらうか．例へば横尾谷にスキーヒユッテが建設された時には僕達の行つたビワークは最早無用

のものとなるのであらうか．否横尾谷ビワークと云ふ固有名詞的のものは最早山小舎に變つてしまうかもしれないけれども，かつて爲されたビワークにおいて獲得せられた經驗や認識は決して無駄なものになりはしないと僕は思ふ．僕達は山を自己の山とするまでには常に山そのものと自分との對象において登山を觀るべきだ．そしてその爲には自己が內的外的に發展して行くと共に自己の山をも常に發展させて行かなければならない．山小舍が完成した曉，登山は今までよりもずつと容易に且愉快になるであらう．けれども僕達はそれで止つてしまつてはならない．更にその山小舍より上に出て今までは路傍の影に過ぎなかつた或ひは遠來の爲登る時間やエネルギーをもつ事が不可能だつたアレートやギッフェルに自己のシュボルトリッヒな力を味ふべく僕達の登山は發展して行かねばならない．そしてその具體的なる方法として僅な用意で完全なビワークを隨所に行なふ事を可能ならしめるべく努力する價値はいつまでもいつまでも滅ずるものではないと思ふ．そして之が又僕達をしてビワークを行なはしめた大きな理由であつたのである．

天幕を張る位置に關しては色々考へられ討論された．可成奥に張りたいと云ふ事から本谷と澗澤との出合より少し下の附近即ち夏道が屏風の裾を卷くために渡る丸木橋より少し下の岳樺の林の中にしやうと1月は決めてあつたのだけれども 劒澤の雪崩などで皆が刺戟されて居たので萬一の事を考へて雪崩に對して絕對安全な横尾河原に決めたのである．場所は横尾の岩小屋から 300 米位出合に近い所で森林と河原との境目の所でそこだけ幸に水が流れて居た．其處の積雪量は今年3尺5寸から4尺位のものであつたので僕達は雪を地表まで掘り下げる事が出來たがノルマルな積雪量では之は不可能であらう．けれども地表まで掘り下げなくとも雪面に厚く樅の葉を引けば居住性において變りないと思ふ．たゞ注意すべきはストーブを置く場所のみは大きな杭でも打つて堅固な土臺を作らねばならない事だ．樅の葉の上に更に防水布を引いたが之はあつてもなくても變らないだらう．下の雪からの濕氣を防ぐ事は少し位は出來るだらうけれども主な役割はたゞ樅葉の散亂するのを防ぐ位のものだらう．

使用した天幕は今まで甲南山岳部が夏季六甲で使用してゐた大天幕の capacity を約$\frac{2}{3}$にしたもので其他の部分にも若干の改良を加へた．大きさは15尺に9尺位の長方形で豫めビワーク用として作つたものではないのでその目的にはどうしても合はない所があつた．例へば屋根も片方が高く片方が低い形でその傾斜がゆるかつたのである．出口は二箇所同一面につけて一つは出入口一つは薪を外から取る出口にあてた．もう一つ側面に徑2尺程の圓窓を下から3尺の所に開け，それに長さ3尺の圓筒をつけてその口をルックサックの如

く紐でしばる様にして煙ぬき兼天幕外の寒暖計を簡單に觀測出來る様にしておいた．結果として一番の缺點は天幕の防水性に關する事だつた．元來よく漏る天幕なのだがいくら完全なものにしろ屋根は必ず二重にすべきであらう．これは雨のみならず一度に多くの雪の積る時などには必ず必要な事である．今年は二度小量の降雪があつた許りでその方は別に困難を感じなかつたが激しい雨漏には閉口したその爲寒い夜を寢ずに過し登攀のエネルギーにどれだけ損失を與へたか判らない．森林の中に張る時にには横から降りつける事はないから屋根を先づ完全にすべきである．保溫裝置としては先づストーブを使用した．勿論之は炊事用を兼ねるのだが實際は炊事は天幕外で完全に出來たので茶を沸かした位の事であつた．

これは R．C．C．が笹ケ峰で使用したのをモデルとしたもので組立用の薄鐵板製のものである．煙突を使用して薪をたくものでサナをつけた．煙突があるのだけども組立用なのでどうしてもたきつける時は少し煙る事があつたが非常によく燃燒し30分間で天幕內の溫度を 20 度も上げた位だつた．けれどもその代りさめるのも早く一晩中天幕內を暖める事は一寸困難であつた．併しその缺點は煙突の入口に ヴアルヴを附けて火加減を調節したら取り除く事が出來るものである．重量は 2 貫程（煙突とも）だつたがもつと輕いものを造る事が出來るだらう．今年は氣溫が特別高かつたのでストーブを使用する必要がない時もあつた位なのだつたが通常はストーブは必要品であらう．防寒具としては各自通常のもの丶他に羽毛入りのシュラフサックを用意した．防水布でつゝんだものであつたが下の樅の葉が非常に有効だつたので防水の點では少しも困難はなかつた．こんな計畫的のビワークは敢て毛皮のシュラフサックを使用しないでも良いと思ふ，又高度 1，500 米程度のビワークで完全なストーブがある時は羽毛製のものがなくとも其の他の防寒具が相當あれば毛布のものでも差支えないであらう．今年は溫度も高かつたので僕等が感じた疲勞は寒さからのものではないらしかつた．防寒の點に於いても毛皮のシュラフサックの如き高價なものを無暗に使へない僕等には僅か四圓位で出來るストーブを完全にしてその方で寒さと戰つた方が良い．

食料，各自の防寒具，ストーブ，登山具等に變態的に重い（十貫近い）天幕を加へると人夫を三人使用したけれども松本から横尾に入るまでは各自の荷はスキーと共に七貫を越へてしまつた．けれども横尾に天幕を張つてからは直ぐ二人を歸して一人を炊事の爲に殘した．炊事も經濟上から見ても各自の氣持から見ても成る可く自分たちのみでやりとげたかつたのであるけれども始めてのビワークなので矢張一人置かざるを得なかつた．けれ

ども次からは出來るだけこの精神に向つて進んで行きたい．我々の様に殆んど何時でもトレイニングにこう云ふ訓練が出來る情勢をもつ所はこう云ふ場合のためにその訓練を有効に使用したいものだ．全體的の結果としてビワークそのものは故障なくなし得たが登攀能率はこのために矢張可成り下げられたと云はなければならない．一週間のビワークの生活に於いて動き得たのは2日であつた．そして實際登攀が行なはれたのは1日のみであつたこの能率の惡い事は氣温よりはむしろ天幕の居住性と大なる關聯をもつて居るらしい．何故ならば今年は左記の如く非常に氣温が高かつたのでその點では少しの困難をも感じなかつたから．

3月21日，晴，松本—上高地，

		日蔭	日向	氣壓mm.	場所
a. m.	4.00	1°		712	松本
	6.25	−0.5°		670	奈川渡
	10.30	0°	8°	675	澤渡
p. m.	1.25	4.5°	13°	660	中ノ湯水電
	3.00	5°	13°	650	中ノ湯
	8.30	−5°			大正池

3月22日，晴，上高地滯在，岳川1900 mへ．

a. m.	6.00	−5°			
	10.00	6°	19°	638	上高地
p. m.	2.00			635	上高地
	4.30	0°		604	岳川1900 m
	9.00	3°		637	上高地

3月23日，晴後雪，上高地—横尾露營地，

a. m.	7.00	1°		638	上高地
	8.00	3°		638	上高地
	10.00	4.5°		636	白澤渡
p. m.	2.00	0°		628	横尾 Camp
	6.30	−1°(天幕外)	1°(天幕内)	628	Camp
	9.00	−2°		628	Camp

3月24日，晴，澗澤へ，一部ハ上高地へ食糧取リニ，

a. m.	6.00	−2°(天幕外)	3°(天幕内)	628	Camp

	8.00	0° (天幕外)	5° (天幕内)	629	camp
	9.00	1°	4°	628	〃
p. m.	3.00	5°	8°	628	〃
	6.00	0°	2°	628	〃
	9.00	1°		628	〃

3月25日，晴，奥穂高，北穂高登攀，

3月26日，晴，滞在，スキー練習，(min. −4°　max. 10°)，

p. m.	0.00	6°		625	〃
	5.00	1°		624	〃
	9.00	0°	10°(ストーブ)	624	〃

3月27日，晴後雨，滞在，(min，−4°　max. 12°)，

a. m.	7.00	−4°	2°	624	〃
	9.00	0°	1°	627	〃
	10.30	2°	11°	625	〃
p. m.	0.00	10°	10°	624	〃
	3.00	2°	5°	624	〃
	6.00	2°	3°	625	〃
	9.00	2°	3°	627	〃

3月28日，雨，滞在，(min. 1°　max. 3°)，

a. m.	8.00	2°	5°	624	〃
p. m.	0.00	1°	10°	622	〃
	3.00	1°	7°	621	〃
	6.00	2°	8°	620	〃
	8.00	1°	10°	620	〃

3月29日，雨後晴，滞在，(min. 0°　max. 11°)，

a. m.	6.00	3°	6°	619	〃
	9.30	3°	6°	619	〃
	11.30	4°	7°	618	〃
p. m.	3.00	3°	8°	618	〃
	6.00	2°		617	〃
	8.40	0°		619	〃

3月30日，晴，上高地へ．3月31日，西穂高登攀．4月1日，横尾へ．

4月2日，上高地へ．(西穂高登攀)．4月3日，松本へ．

この如く氣温も非常に高い．そして一度は雨が降つてゐる．故に我々は天幕の居住性について判然たる知識を得なければならない．

僕達は數日の横尾谷生活においてなし得た事は少かつた．そして僕等が色々の方面で未熟であつてビワークと實際登攀とを可能的にコンビネートする事が出來ず，たゞ小さい登攀にすんでしまつたのは非常に殘念な事であるけれども無爲らしく過した數日のビワークに於いては何か獲得したものが適當な指導と訓練とを得て未だ未完成の域にあるウィンターアルピニズムに何かを貢献する事が出來る様になればと其の日を待ちもうけてゐる．

（田口記）

奥　穂　高　岳

3月25日

パーティ　湯川孝夫，村上正一郎，喜多又太郎，秋馬晴雄．

キャムプ（3.30）—涸谷本谷出合（5.00—6.00）—圏谷底（7.40）—スキーデポー（9.10—9.35）—奥穂ザッテル（2.40—3.05）—奥穂三角點より一つ手前の峰（4.00—4.05）—奥穂ザッテル（5.05）—スキーデポー（6.40）—キャムプ（1.25）．

山に向ふ前夜の淺い眠りからさめたのは2時少し前だつた．寒暖計はマイナス1度を示してゐる．氣温が少し高過ぎるので天候の崩れるのを心配したが，最近の氣象狀態より雪崩に對しては，或程度の確信が持てたので出發する事にする．色々と準備に時間を取られて出發したのは3時半だつた．懐中電燈の光は青白く凍つた雪の大地を照らす．疲れやすいナハトマルシュには，懐中電燈は出來るだけ强力なのが望ましい．出合で輪樏にはきかへスキーをトラーゲンして行く．涸谷の朝が訪れた．微風が快く頬をなでゝ行く．谷底から北穂高へ向ふパルティーがスキーデポーにする瀧の所を目指して一直線に進む．急傾斜とはきなれない輪樏に相當苦しむ．瀧の下で第一回の食事を取る，氣づかつた天候もいよいよ大丈夫らしい．北穂高へ向ふパルティーと別れて奥穂高へ向ふ．瀧の上をまいて涸澤岳の下をトラバースして進む．私達の奥穂高岳登攀のルーテは先づ涸澤岳の最も奥穂高寄りのザイテングラート（即ち奥穂小屋直下の雪渓の右側にある）に取付き，それを登りつめ奥穂ザッテルを經て奥穂高に向ふものでザイテングラートの最下端のザッテル（その下方に雪のつかない岩の部分があつて，此のグラートは終つてゐる）をスキーデポーとした．スキーデポーにて少し休み，アイゼンをつけアンザイレンする．

最初奥穂側の斜面を進み，漸次グラートに出る．時刻は9時を過ぎ，最もよく太陽の當る所なので膝の半までもぐる．グラートに出るに隨ひ，足を沒する事なく，雪質は表面10—15糎は濕雪でその下は凍結しピッケルのシャフトは僅かしかさゝらぬ程度である．登るに隨ひ，上層の濕雪は濕潤度と粘着力を減じて，下層の雪の硬さは增して來た．傾斜の增加と雪質の變化は遂に私達にコンテュニヤスで進む事を許さなくなつて來た．岩は殆んど出てゐないし，又出てゐてもビレーイングビンになる程の大きさはない．だから必然的にピッケルに依るビレーが要求された．シャフトを使ふ事は前述の如く雪質上許されないし，急傾斜なので終始ピックを使つた．コンテュニヤスで進めないために私達の進行の速度は著しく減少せしめられた．徒らに時間のみ過ぎて行くのが氣になる．

アイゼンのツアッケにたまる雪は不快で危險だ．2800米附近になると上層の雪は著しく濕潤度を減じ稍濕つた粉雪狀となり，下層の雪も硬さを增し殆んどピッケルのシャフトはさゝらない位となつたのでシュトゥーフェンシュラーゲンが必要となつて來た．2800—3000米のゲビートに於いては3月に於いても尙冬の狀態の雪質を有する場合がある．高峻山岳に於ける春の雪の狀態は非常に大なる範圍にわたつて變化し得るものであつて，時には所謂春から冬へとこうした逆轉をくりかへしつゝ必ずしも平地に於ける如く順調に冬から春へと變つては行かないのである．連續的なシュトゥーフェンシュラーゲンアルバイトは氷に慣れない私達にとつては大きな重荷であつた．12時にはザッテルに着くと豫想した私達は，此の氷のグラートに僅かにピッケルに身を託しながら食事を取らなければならなかつた．そうして私達の前には尙幾百の未知のシュトゥーフェが橫つてゐるのだ．所々澗澤岳側にごく小さな雪庇が出てゐる．澗澤岳のハウプトグラートより約50米下方に來ると，雪質は變りシュネーブレットを形成してゐる．

最も緩傾斜の所をハウプトグラートに直角に進む．ピッケルのシャフトをさしこむと不氣味な音を立てる．結局奥穂の小舍より7—80米の所に出た．ハウプトグラートをザッテル目掛けてかけ下る．小舍はほんの屋根の一部出てゐるのみで飛驒側から白出しを吹上げる風は强い．ザッテルには澗澤側に小さな雪庇が出來てゐる．氣溫はマイナス6度を示してゐる．食事を取りアイゼンの紐を締め直しザイルを結び直す．オーダーY.A.M.K.いよいよ岩壁に取付く．先づ夏道通り少し行つて三つならんだクラックの中央のを登る，（夏道は右端のについてゐる）此所には殆んど雪は吹込んでゐない．割に樂だ．そこを登るとすつと飛驒側をまいて行く．岩が澤山出てゐるのでビレーイングビンは豐富だ．岩の間の氷は餘り硬くなく粉雪も殆んど吹込んでゐない．此の岩壁を通りぬけ夏のガラガラの所に出る

雪は硬く表面は氷の様に平滑でアイゼンのツアッケがやつと半分近くさゝる程度である．岩は殆ど出てゐない．奥穂三角點より一つの手前のピークに至る．時計は四時を示してゐる出發以來12時間半を要した譯である．太陽光線の減退に伴ふ雪面の硬化によるハックアルバイトの困難及びそれに伴ふ時間を考慮すると前進する事は危險と思つたので此處より引返す事にする．夕陽に輝く西穂高への雪の山稜，鋭いスカイラインを示す前穂の北尾根これこそ眞の雪の山の美しさである．

長くとゞまつてゐられないので下り始める．雪は30分前より大分固くなつてゐる．奥穂ザッテルよりの降路はザッテル直下のリンネに取る．雪庇は小さいので樂に下れた．二人ビレーして二人動く様にしてスキーデポーへ下る．スキーデポーに着いた時はあたりはうす暗くザイルを解きスキーをトラーゲンして下る．暗黒と固いクルステのためにスキーで滑降する事は出來ない．圏谷底に着いた頃に全く暗くなつてしまひ長いアルバイトの疲勞が漸く私達を襲ひ始めた．雪に足がもぐる許りで一向進まない．出合の少し下で餘り遲いので迎へに來た近藤と一緒になつて歸る．

〃附記〃 今私達の奥穂高岳登攀の經驗からしてそのローテについて少し述べてみやうと思ふ．大體奥穂高登攀のローテは三つに分れる．

即ち一つは涸澤岳の下の斜面を登り奥穂ザッテルに達するもの，次は私達の登つたものでザイテングラートを登りザッテルに達するもの，最後はザッテル直下のリンネを行くものである．尙最後のものゝ途中より分れ奥穂三角點直下のルンゼを行くものもある．第一のものはスキー使用の可能性を有してゐるが第二のものはスキーの使用は絶體に不可能である．第三のものは急斜面と日照時間の關係上雪崩の起る可能性多く，餘程雪のコンディションの良い時でないと登る事は出來ないのである．これより分れ三角點直下のルンゼを行くものも此の點に於いて同樣である．雪崩の危險性と云ふ點から見れば第二のローテは最も安全である．私達が撰んだのも此の理由からであるが雪崩以外の點から見れば簡單に良いローテだとは云へない．私達の登つた當時の如き雪質なればシュトゥーフェンシュラーゲンのアルバイトが大であり，長時間を要するのである．同時にその反對に深い濕雪の場合に於いても何分傾斜が急だからラツセル辛く小人數で行く事は不可能でないにしても非常に困難であらう．要するに此のローテは雪崩に對して安全であるが他には幾多の困難を有しゐるのである．だから奥穂高登攀のローテとしては雪質その他の客觀的狀勢の許す限り第一のローテを取るのが能率的な行き方だらう．そして他のローテが雪崩の危險狀態にある時

第二のローテを取るのが至當だと思ふ．（湯川記）

北　穗　高　岳　（北穗高澤より）

人員　田口兄，田口弟，足立，

キャムプ（3.30）—出合（5.00—6.00）—池ノ平スキーデポー（8.05）—北穗頂上（12.15）—コル（12.25—2.20）—スキーデポー（3.20）—キャムプ（5.30）．

3月25日奥穗パルティーと共に出發する．横尾の岩小舍の前で流れを渡つて屏風岩の下の平の森林の中を行く事にする．昨日澁澤へ行つた時に通つた所で今年の樣に雪の少ない年には此所を通る方が早い．空には土からかぶさる樣に大きな屏風岩がそびへて居る．淡い照明の一ツ目小僧が七人の胸に光りながら巨壁の下のタンネの森を進んで行くのは確に幻想的だ．2—3日前の新雪が森林の中なのでまだとけやらず軟かく殘つて居る．スキーは快ろよい音を立てながら進んで行く．

出合附近からクルステが固くスキーのカンテが利かないので出合で輪樏にはきかへてスキーはトラーゲンする氣溫は零下5度．出發の時一寸曇つて居たのもいつの間にやら晴れてしまつた．雪に埋れた澁澤を登つて廣い池の平に出る．一寸へばつた．北尾根が凄くそびへて居る．瀧の北穗寄りの横手（2300米）をスキーデポーとする．零下3度，太陽は連嶺の頭の上に顚き出した．登路は北穗高澤より，さあ行こう．あの3000米のアレートへ，そこで若い吾々の生命はあの太陽の顚きの如く燃燒するだらう．

8時5分奥穗への友とシーハイルを交して登行を開始する．雪質はアイゼンのツアッケのみ喰いこむ好狀態だ．この澤はデポーから300米程上で二つの巨岩にはさまれて深い溝をなして居る．それを避けて右手の廣い急斜面を（夏は這松の密生する所）登つて上のカールに出る（9時）．氣持の好いカールだ．カール底の標高は2600米位だらう．デブリも小さな表層雪崩のものの他はない．紺青の空に見上げる仰角で，雪と岩との黒白の對象に力强いアレートが並んで居る．

此所からアレートに達する三つのローテを考へる．A．左手の急斜面を登つて岩壁に取付き，澁澤岩小舍の後まで北穗より流出されたるザイテングラートに出て主稜に達するもの．B．北穗より派出されて澁澤と本谷とを分けるザイテングラートに於て北穗頂上より大きくグツと下つたコル（夏北穗を頂上に登らずトラバースする時通るコル）に達しグラートを頂に達するもの．C．正面の北穗の頂上の一寸下からカールに斜めに出て居るリン

ネを登り，途中で北穂頂上のカールに面するワントとこのリンネを境する右手の極く小さい雪尾根に取付いて斜めに頂上下コルに達し，容易な雪稜を頂上に向ふもの．この三つのローテを考察するにAとBとは谷を通る時間がCより短かい．故に雪崩に對してはCより安全性をより多く保持して居る．併しまだ3000米の領域は底雪崩の時期でなくそして數日前の極少量の新雪も完全に地雪と結合して居る，其上朝のクルステも固たかつたし今日一日の雪質の循環は順調に行く様に思はれる．各々のローテについて見ればAにおいてはこのザイテングラートに達するまでが殆んど直立に近い岩壁が多く，且その岩壁に陽がこれから直射せんとする所なので附着して居る氷が剝奪される恐れがあつたのでこの點より見ればとるべきローテではなかつた．元来このザイテングラートより北穂へ登る時にはむしろもつと下から取付くか又は岩小舍側から取付くべきである．Bのローテにおけるザイテングラートは夏はガラガラした所が多い所だけれども非常に鋭どく雪稜をなして居る．アレートの鋭さは別としてもカールワントを登る時には雪も相當とける事であらうしその上を攀き亂すのはあの急傾面では安當性を缺いで居る事としか考へられない．そして又折角のアレートのアルバイトもこの強い太陽に雪がくさつては面白くなからう．Cのローテにおけるリンネは頂上の一寸南から出てカールに斜めに下るもので長い代りに傾斜をゆるく幅も相當ある．南側の岩壁は相當早く陰になりあのリンネにも陰をおとすのも他より早いだらう．これを登れば雪が相當にとけて危險性を帶びる時が來る前に右手の雪尾根に到着する事が出來るであらうと云ふ確信がついた．故に僕は二者のローテを棄ててCのローテを執る事にした．

カール底で少し休んで出發する．此頃よりクルステが少しづゝとけ始める．段々足がもぐり出す様になる少さな表層雪崩のデブリを踏んで徐々と登つて行く．

このリンネは2800米附近で三角形をした大きな岩によつて（前述の雪尾根はこの岩より上に續く岩稜に終つて居る．夏は一寸したスラブのある所）くびれて居る．此所は傾斜が恐しく急だ．ピッケルでゾンディーレンして見る．雪質も頗る複雜してゐる．最も上層には7センチ程の濕潤雪，その下に4センチ程の氷，その下には15センチ程の濕潤雪，その下は又5センチ程の氷，その下は徐々と固くなつてフィルン化して行く雪で，その時足は25センチ程もぐつた．濕潤雪が徐々に氷となつて居て風成のクルステの如くでないので危險はないと思つたけれどもリンネをしばらく登つて右手の雪尾根に取付く．10時55分2900米附近でエッスバウゼをとる．Bのローテで登るべき所であつたカールワントに少さな雪崩が起つて居る．雪球を原因とする表層濕潤雪崩だが通常の雪崩の様に全面的には流動し

ない．その雪崩を見て居ると頭の上の方でかすかな音がする．見ると今登つて來たリンネの最上端の岩壁から落ちた雪が雪球を形成して小さな雪崩になつて來る．この支山稜もリンネより餘り高くないので餘波を受けるかも判らないのでピッケルのシャフトを雪につきさして自己確保をする．大した事もなささうなので．ソーセイジをかじりながら見て居ると小さな雪球が二三個そばにころがつて來て背中に當つた位だ．この位のものならリンネの眞中に居てもさう危險はないだらう．その時の太陽の直射溫度は14度であつた原因は上部の岩壁について居る雪が太陽熱によつて融解して岩との接觸面に水が流れて滑劑の作用をなしたので岩から落下してリンネの最上端の急斜面にある濕潤雪を誘つて無數の雪球となつて崩落して來たのである．

こゝから上は雪が益々軟かくなつたが約1時間の後ハウプトグラートの頂上下のザッテルに達した．氣溫は零下4度で飛驒側から吹きあげる風は微かながらも身をさす樣であつた．コルの窓から瀧澤の岩峰がものすごく氷をつけてつつたつて居る．氷と岩．そして雪！　それこそ山が100％にその本領を表すべき外形だ．その灰色の蒼白色の氷と雪の下には夏のあらゆる見苦しい泡沫的存在はかくされて居る．冬，雪，氷，これこそアルピニスムスの最高對象ではないだらうか．頂上までは僅かな雪稜だけれども念のためにアンザイレンする．15分程で頂上につく．雪におほはれた美しいドーム！　頂には大きなスカヴラが著しい．あの強い太陽が示す樣な春は未だ侵略して來ないで3000米の岩稜には未だ冬が屯して居るのだ．今日は眺望がよく利く．美しい笠から劍の八峰までが蒼い空の下に聳く白くならんで居る．天候にめぐまれた僕達は1月の苦しかつた登行を思ひ出して過去のなつかしき追想と現在の樂しきいこひの對象のエクスタシィに耽つて居た．其上フューラーローゼだつた．僕達には自分たちのみの力でやりとげたと云ふさゝやかな歡喜と誇りがあつた．僕達は何もそれを形式的にのみ好んで居るのではないけれども，たゞアルピニスムスオーネフューラーのこの氣持こそ戀しく忘れがたいのだ．オーネフューラーの登山は或はミットフューラーの登山よりも能率があがらないと云ふ人があるかも知れない．それが事實であつたとしてもフューラーをともなはないで自分達だけの力でぶつかつて行かうとする努力こそシュポルトリッヒアルピニスムスの眞髓であり，アカデミカーの守るべき信條ではないだらうか．

コルに戻つて痛快に伸びる．零下6度だがまだクルステしないので少し待つ．1時50分になると1ミリ程ごく薄いのが出來た．色々伸びた餘勢がついて2時20分になつてようやく下り出す．上部は急なのでアンザイレンして下る．二人が確保して一人が下るのも時

間がかゝるから少し下りてから一人が確保して二人が動く．カールに出てからははしつて下つた．スキーデポーの赤旗が主待ち顔にはたはたとひらめいて居る．廣い涸澤のカールに涸澤岳の支山稜の下の奥穂パーティーのデポーと僕達のデポーとのみが眞白い世界の紅二點を示して居る．なつかしのデポーに歸りザイルをときしばらく友を待つたが來る樣子もないので先に下る事にして滑りだした．三人のE—HO—HOは周圍のカールワントにこだまして下へ下へと小さくなつて行く三つの黒點を追かけて來る．クルステし始じめたのでよくころぶけれども速力は早い．またゝく間に出合に來た．冷たい本谷の水に喉をうるほしながら涸澤の奥から友等が滑つて來ないかと思つて待つ．頂を獲ち得たよろこびも朝同じ時くらやみを辿つた友と歸へれない淋しさに消されさうだ．ふりむけば北穂の頂は夕空に青く，そして少し赤く輝きながら天をかぎつて居る．アーベントグリューエン！ 幾度か幾度かふりかへりつゝ六本の愛するスキーは今日も又平和に暮れて行く横尾の森林へと消へて行く．横尾の岩小舍に寄る．Fさん達に今日も又御馳走になる．晩の天幕への來訪を約して河原を歸つて行く．赤旗が見へる．そしてなつかしい天幕が雪の中から屋根を出して居る．

〃附記〃　北穂高澤は風當りがない上午後からも早く日光が直射しなくなる方向を有し且陰るのも早いから北穂への登路としては相當好いものと思ふ．併し雪崩の可能性のある場合には涸澤岳と北穂の鞍部まで登つて縱走路を辿るのが正統な登路だと考へられる．1月に於ても通れない樣な雪質の場合が多くありはしないかと思はれる．5月頃にはきつと愉快な澤になるに違ひない．夏も感じの好い澤で白い雪渓と穂高には珍しい固い一枚岩などをもつて居る．

この登攀は雪が軟かくなりもぐつたので困難だつた．出來得るならばスキーをこの澤のカールまで運び雪が軟かくなる時にはいて2800米附近にある三角形の巨岩の所をデポーにすれば時間において愉快さにおいて大いに異なるであらう．又この登攀において下りの時間をもう30分又は40分早く執つたならば涸澤におけるスキーをもつと享樂し得たと思ふ．實際コルにおいては完全に陰とならなくても直射が止めば忽ち薄いクルステを生ずる．（勿論3000米の高所でなくとも通常は3月の雪は午後四時頃になれば陰らなくともクルステするものであるがこの高度になるとそれが特に早く確實になつて來る．）故に北穂高澤の2800米位より上の部分は1時40分乃至1時50分までには完全にクルステした．そして北穂高澤のローテにおいて下りに雪面を攪亂して雪崩を誘發する危險のある傾斜や條件を具備

した所は2800米の巨岩より上のリンネであつてそれから下においては，僕達が通る所そのものはスキーの滑降を安全に許す場所である．故に僕達は2800米より上にクルステを生じしかもまだ下はスキーの滑降に適當する雪が存在する時をねらつて下れば好いのである．この事は奥穂の場合にも云へる．即ちあの穂高小舍の澤を下る場合，涸澤岳の支山稜の下をコル（夏涸澤の岩小舍に行く所）まで穂高小舍の乗越から下る間の場所がクルステしてそれから下のスキーを使用する所はまだ春のザラメ雪や粉雪である時をえらんで下降の時間を決定すれば好いのである．

いづれにしろ北穂高澤や又は岩小舍の後ろの澤より北穂を目指す事は涸澤岳とのコルからあの長い尾根を辿るよりずつとすつきりしたアルバイトだ．そして雪崩の心配のない時には此等のルーテによつて涸澤より北穂へ向ふ事は時間も比較的多く要しないで充分たのしめる登攀の一つである．（田口記）

西　穂　高　岳

3月31日

湯川孝夫，村上正一郎，喜多又太郎，足立正夫，秋馬晴雄，

上高地温泉（4.50）—アイゼンをつける（6.06）—西穂第一ピーク下食事を取る（8.25—8.50）—西穂三角點より三つ目のピーク（10.30—10.50）—温泉（1.40）．

4時に起きて見ると案じてゐた風も凪いでゐた．早速出發する事にする．今日は急斜面の森林帶を通るのでスキーは使用せず，輪樏を持つて行く．昨夜來の低溫のためクルステ固く，スキー靴のまゝで殆んどもぐらない．

上高地より森林帶を通つて西穂高登攀を行ふ場合の如き，雪崩の危險の餘りない時に於いてもクルステの形成狀態はシュトゥーフェントレーテンの難易に密接な關係を有し，登攀時間及び疲勞の多少に重大なる影響を與へるものである．私達は今回の登攀に於いて此の點に於いては，可成り良好なコンディションにあつたと思ふ．森林へは赤十字の建物の横から入り，善六澤の左の尾根に取付く．約100米許り登つてアイゼンをつける．雪はアイゼンのツアッケのみ浸する程度だから，非常に歩きやすい．正月粉雪に苦しみながらラッセルを續けてゐた事を思ひ出すと，全く雲泥の差だ．空は少し朝燒してゐるらしく，天氣は怪しくなつて來た．でも降りさへしなければかへつて雪がくさらず具合が良いのだが．森林帶を抜けると岳川岳の手前に出る．雪質は森林帶と同樣である．雪の山稜を西穂高へと進

む．雪量は1月に比し此の附近は大分減つて，飛驒側に殆んど雪なく，善六澤の上の廣い斜面には所々偃松が出てゐる．一番手前の岩の出てゐるドーム形のピークの下で休んで食事を取る．此のピークの登りよりアンザイレンする．六人なので30米のザイルを二本使つて二パルティーに分ける．オーダー Y．A．M，A．K．近藤（ポーター）最初のピークは岩も多く出てゐるので樂だ．直ちに向ふ側に下り始める．傾斜が相當急で，岩がもろく，所々粉雪がたまつてゐるので，少しうるさい．これを下つた鞍部から山稜は鋭くなり始める．岳川側には大きな雪庇があり，その下はヴァーティカルに近い様な雪の斜面が續いてゐる．岩と雪との間を縫ふ様にして進む．甚しい所では片足を雪の上に，片足を岩の上に置いて進む．各ピークは飛驒側は雪が少いので，雪庇を避けて飛驒側をまいて行く．三角點より三つ目のピークは雪で包れ傾斜が急なので，ピッケルでシュトゥーフェーをきざみつゝ登る．岳川側には例によつて大きな雪庇が出てゐる．空模様はいよいよ險惡になつて來た．槍の邊はもう雪が降つてゐるらしい．多人數とポーターの技術の不足等で，敏速に行動する事は不可能だと思ふたので，殘念ながら此所より引返す事にする．又元來た所を引返す．雪は曇つてゐるのと溫度の低いため未だ固い．森林帶もアイゼンをつけたまゝ走り下る，可成り下つてからは少しもぐる所もあつたが，穿きなれない輪樏よりは樂なのでそのまゝ下る．大體登つた通り下り，途中で分れて發電所の横を通つて營林署の小舍の所に出る．

途中小さな澤で數日前出たらしい濕潤舊雪雪崩のデブリを見た．小舍のそばでアイゼンを脫いで溫泉に歸る．（湯川記）

早　月　尾　根

同志社大學　兒　島　勘　次

ひとむきに劍の頭へと志した若い者の貧しい記錄である．源次郎尾根と早月尾根とは共にこれを登攀すれば眞直に劍の頭顱（ブッコ）に達し得らるゝ點で我等の興味を一層深くする．東面源次郎尾根は大きいワイルドな感じを有し，西面早月尾根は堂々として王者の感銘を私の心に彫りつけた．

1929年5月に立山劍岳方面の偵察登行を行ひ，7月13日より3日間にてこの尾根の登攀を終つた．これを企圖するや京大高橋氏の助言を得，又宗作のガイドは此行をよりジッヘルにした．

夏季に於いてこの尾根の問題はブッシュが重なものであり次に劍岳直下に約200米のアンサウンドな岩場であろう．藪くぐりの困難さはもとより覺悟してゐたが一二ケ處を除けば期待してゐた程の事はなかつた．今では藪くぐりの習練の一つとしてなつかしい思ひ出ともなつてゐる．尾根は池の谷側は傾斜緩く，ブッシュの間に處々殘雪多く，雪の消へた跡は枯草が乾いて柔かな氣分を添へてゐる．

「わが足音に木がバチンと音して起きあがるのを見た．4月の融雪の日に」

と故大島さんが言はれた，その深い觀照の態度に共鳴する程靜かに落ち付いた登攀であつた．

これは專ら惠まれた好晴に依るものである．

上市よりバンバジマの取入口の小屋迄は終日曇で時々小雨が降つた．平らかな六里近い道を歩くには冷しくてよかつた．ただ殘念なのは特徴ある窓を持つた劍の西面が雨雲に覆はれて望見出來なかつた事である．

登攀第1日は朝から快晴で一片の雲なく雨の日のあとによく見る澄み渡つた天候であつた．キワダワラ谷を登りつめた午後1時半頃より晴しらすの卷雲が二つ三つ浮かんだ．夕暮テントを張り終つて暫くの間を憩ふてゐる時おだやかな層雲が海，平野からひたひたとよせて來て翌日の晴を約束した．猫又山はこの雲の海の上に浮き上がつた．夜は暖かく熟睡した．

第2日午前は晴であつたが昨日の冷氣は感ぜられなかつた．午後1時頃より遠雷ひびき雄山の方向に立ち雲の早手雲起こり北に流る．雷雨の中を最後の岩場にかゝる事は中止してキャンプの用意を急いだ．幸ひ雨は劒澤を北東にぬけ，夕に又晴れた．斜陽が赤光に岩壁に映へた，雪の上にハヒ松を敷き，その上に寢た高度2600米位寒氣はきびしかつたが羽のシュラフザックは安眠を守つて呉れた．

第3日，早朝目醒めてテントを出れば荒々しい崩壞の相の岩壁が目の前に突立ち登攀勇猛の心を燃へ上がらせる．一つの岩塊（平藏の頭より見へる）を越へれば幅廣いギャリーがある．その間を風化にくずれた岩屑の上を注意して登れば劒頂上の直ぐ横の平藏側に出る午前10時劒の頂上に立つた．晴れた日のもとにのびやかに半時間程休んだ．源次郎尾根を降りたいと思つたが一つの安息が心を占めてファイチング，スピリットが缺けた事が感ぜられたので長次郎谷の窓に降りた．窓にて同志伊吹，寺崎等に會ひ喜びを告げ眞砂澤の根據地へグリセードした．

登攀時間は總計17時間，內譯すれば取入口よりキハダワラ谷迄1時間半，キワダワラ谷が5時間，藪くぐりが9時間，岩場が1時間半，（晝食時間及び休憩時間加算）以上の如くで天候さへよければ確かに2日の行程であろう．

キャンプサイトは廣い尾根であるから至る所に發見し得られる．飲料水は勿論殘雪である．今この殘雪が何日頃迄あるかははつきり言ひ得ないが8月中旬以後は餘程少くなつてゐるであろう．（今年は殘雪量は例年より1ケ月以上すくない．今年6月上旬の劒澤の殘雪量は平藏谷出谷に於いて昨年の7月中旬より少なかつた．もつとも此處はデブリの關係上尾根よりはその差が大きい．）

今夏の劒岳は雪少く岩場が廣ろく東面のロッククライミングは心引かれる，併し西面は不適の感がないでもない．又雪溪は油斷が出來ないと思ふ．

最後に私はこの早月尾根に依つて一つの望を遂げやうと決心してゐる．

目次

越百山南方のコルのトラヴァース

三高　遠山富太郎

1. 目的と豫想

北アルプスや南アルプスよりも手近な山の一つとして，去年の印象深い經驗が木曾駒山系に引きつけたのではあるが，此の行を思ひ立つた時には決してあんな立派な山行になぞらへると云ふ様な大した野心を持つてなかつた．然し此の計畫に當つては絶えず去年の行を比較ばかりして居た，とにかく未知と云ふ事が非常に僕の心をひきつけ又嚇かしたのである．いはゞこの邊りのピークなるものはどれも大した希望を抱かせなかつた．只越百川をさかのぼつて，向ふ側の谷を見たい，そしてそこを歩きたいと云ふのが唯一の目的なのであつた．

木曾殿越は略2580米，はひまつと歪曲せられたるタンネとを持つ．邊りははひまつでないならば草地，砂地，だけかんばで比較的歩き易い．然るにこのコルは位置はそれよりも南で略2060米，ヴァルドグレンツェは北アルプスで2400—2500米である．如何に尾根とは云へこの尾根の縱走は道なき限り覺つかない．しかも此山脈は略一重で南北に走つて居る．完全に西と東に分れて，獵師と云つてもこの尾根をうろうろするとは考へられぬ．果して田光邊りのもので，越百川を中心として歩いてゐる者も中南澤より奥については知らないし又，伊那の方の獵師も松川へははいつても越百川への鞍部についてさへ知る所がない．唯，偶然何のか原因で，尾根が通り易い場合ならば，安平路なり念丈なりへ行つて見ようと云ふ志はもつて居た．

2. 經　過

最初の日は雨があまりひどいので今度の行はもう駄目になるかしらんとすつかり悲觀した取入口の長谷川氏の家で，しかたがないのでトランプをしたり，山雀の宙返りを見たりして，午後を費した．越百の南澤に取入口を設けて發電所を作ると云ふ發電の人々からは，

南澤までのトラヴァース道を聞いたが，奥の方については大して好い事も聞かれなかつたが，翌日の朝獵師に聞いたのはかなり役に立つた．

27日．とにかく青空なので出發（8.50）．發電の測量道を傳ふ．ぶなの大木の林の間に炭燒にあふ．親子三人，越中からこゝまで炭を燒きに來る，いくら考へても滿足な答は得られない．あの子供，大きくなつたらどんなになるだろうかと思はずその場で考へた．南澤の出合（0.20—1.35）．この出合は少し廣い河原だ，谷も平行になつて合流して居る．こゝから間もなく，谷は惡くなる．谷が狹つて暗くなる．左岸の岩壁がすむと兩岸とも壁となつて瀧が現はれる．が朝聞いた事により左岸に道を見出す（2.20）．大して高いからみでもないが瀧を越しても流の兩岸は廊下狀をなすので道は左岸の壁の上の段の樣な所を薄暗い針葉樹のしげつた，低い笹の間を歩いてゐる．右岸に瀧となつて落込むかなりの澤あり．やがて道は谷に下るらしく跡をたつ（2.50）．又瀧が出る，右岸に渡れば獵師の言による梯子のこわれたのがある所あり．よつて高まはりす．丁度これ昨年の木曾駒に於ける伊那川本流の高まはりに似てゐる．しばらく行つて露營（3.30）．こゝから少し上つて上流を見ると，日に照された谷の大きな出合の尾根が見える．中南澤の出合にちがひないと道のはかどつたのを喜ぶ．

28日．明くれば殘念ながら天氣が惡い，霧がかゝつて動かない．天候惡化と又悲觀．〃越百の奥は場所が好い〃と云つた獵師の言葉を思ひ出し，もう惡場はすんだものと元氣を出して出發（8.15）．がらがらした谷だが大した事もなく豫定の如く中南澤に入る（9.00—9.15）．大きな分れを左へとつてコルへと目ざす（9.35—9.45）．水も少い．谷自身は傾斜をもつが兩岸はゆるい．去年の木曾殿越の取付きを思ひ出し，今日の晝すぎにはコルへつけると，少々氣をゆるめて，動き出す．突然瀧が現れる．しかも兩岸には急なガレがトラヴァースを妨げる．いさゝかたじたじとした．そこらを見渡したが好い考を思ひ當らぬ．やむなく水筒に水をつめて比較的ゆるく短い左岸のガレに取付く．笹原にはいり，眞一文字，尾根へ，尾根へ．取り付いたのは10時，それから午後の5時半コルにつくまで丈を沒する笹の中で大奮闘，天氣は惡く，時々，越百山が大きなガレを前に擴げて樹間に見える．腐つた大木の水づいた上に腰を下して，キヤラメルなどで元氣をつける．コルへついたのは薄暗かつた．皆つかれてヘトヘトだつた．意地惡くも雨なぞ降り出した．併しとにかくこのコルへついた事は安心を與へた．併し深い笹と，霧とは前途について何の展望も與へない．充分横にはなれない苦しい一夜．

29日．まだ小雨だ．でも早く下りる事だ．出發（8.05）．いつのまにか笹をはなれて小

流の上を歩く．雨もやんだ．あたりは針葉樹の深い森．樅が多い．瀧五つ，併し皆元氣で輕々と，右へ左へとからんでおりる．やがてなだらかな森の中となる．コルよりの小谷を下りきつたらしい（10.10）．いつのまにか流れとははなれてしまつて，落葉で充分鋪裝された小徑を歩く．音はしないが風はあるのか，梢はゆれるらしい．粉雪のように何かゞ降つて居る．手に取つて見ればよく乾いた落葉松の葉だ．見あげてもその樹は見えない．それでも粉雪の樣にふつて居る．〃君は落葉をふんで歩く音を知つてゐますか〃と町にのみ住む友に教へてやりたい．こゝで私の心はばらばらにふりほどかれた．欲望だとか不滿だとかあこがれとか苦痛とかの色んなまとひついたものがとれてしまつた．

河原に出る，太陽は照つて南には青空があつた．谷は白くて暗い森から出て來た僕達には目まひがする位まぶしかつた．おいしかつた晝食よ（10.45—1.10）．

ハカマゴシと云ふ松川と，與田切川とのコル．即ち木曾駒の主な山脈と念丈との鞍部から南流する松川が東に轉ずる所，そこは特に廣い河原だ（2.00）．古い筏採の跡が尙殘つてゐる．そこから谷は狹り惡場の連續だが道がありケルンが徒渉點を示すので何の迷ふ事もない．所々に小屋の破れたのがある．使はなくなつてからかなりになるらしい．輪カンヂキのこはれたのがすてゝあつたが，積雪期にもこんな谷へはいつて居たのか．川が再び南流する所あたりで好い小屋があつたので泊る（3.30）．

30日．馬鹿に冷い朝だつた．だから又好い天氣だつた．（9.10）出發．歩き出して間もなく，ハカマゴシへカスミを見に行く獵師にあふ．立つたまゝしばらく話す．峠の取付きを教る．案外早く行けそうだ．谷は地圖の示す如く少しは惡いが，やはり右に左に川をざぶざぶ渡つて，何の苦もなく進める．まもなく谷は開ける．おぼろげな道は谷を離れて傍の林の中にはいる．ぶなや樺や，その他色んな平つたい葉の黃ばんだ林の中を歩く．羊齒がしげつてゐる．木の葉がゆれて落ちる．木の間越しの日光がそれにちらちらする．流れの音は程遠い．

おつさんの教へてくれた峠の頂の大木が見える．あれだな，川を渡つてゆるい登り，立派な道だ．併し，ジックザック一つ切る事なしに，樂に登つたその峠，白い肌のけやきの大木が身振りよろしく．下なる松川の廣い川原に呼びかけて居る．そこは黑い針葉樹と薄綠の落葉松が少くなつて，紅葉黃葉の照りあつた中を白い川原が横る．三日前に越した方は遙かに山並みに隱されて居る．さらばー，エーホーは唱へられた．

晝食（11.35—0.55）．よくある事だが長いいやな道は僕等をすつかり疲らした．併しこれらの樂しい思ひ出を抹殺してしまふ事は出來ない．その夕方（4.25）．飯田についた．

目次

二股のスキー合宿

三高　本野亨一

我々三高山岳部が昭和四年度のスキー講習會として行つた信州二股に於ける合宿に就いて簡單に述べて見ようと思ふ．もとより單なる講習會に過ぎないのであるから，冬山なぞを對象に置いて考へるなら，極めて貧しいものではある．唯それが僕等にとつてどんな企圖の下に行はれ，どんな意味を持つたかに就いて主として語りたい．

1.

どうして此合宿が行はるゝに至つたか？

昭和3年12月，高橋，四手井，兩先輩は信州四ッ谷の細野村を中心として白馬登山を試みた．此際の收穫として高橋先輩は，

（1）　同地方の雪質の稀に見る程良好なこと．

（2）　スロープの豐富なこと．

（3）　同地方に勢力を有する白馬館がスキーに依る白馬岳の開發に關して極めて熱心であること．

（4）　二股に小屋がありスキー合宿のための使用にも耐えること．

等の條件を僕等に呈示され行き詰りつゝある關溫泉講習に對する打開策の一つとして，同地方に於ける昭和4年度のビギナア講習のためのスキー合宿を暗示せられたのであつた．こうして二股合宿の動機が與へられた，確にそれは心からの僕等自身の發意であつたとは云へないかも知れない，從つて最初の間は僕等の態度も漠然たる受身的なもので，そんな良い所なら行つても良い，とか，今年は先づ關溫泉に從來の通りしておいた方が穩當ではないか，なぞの意見も出る有樣だつた．だから僕等は，先輩團の意向として改めて，僕等がかゝる事を劃てる經驗實力に乏しいから中止するようにとの報知に接し，且つその解決策は當然僕等のなすべき仕事となつた時，僕等は今更の如くその立場をハッキリ吟味して見る必要に迫られた．僕等はこう考へた．

（1）　此合宿に從來の樣に專任コーチャーとして經驗あり且つ我々とも氣持の上で連絡あるリーダーを持つことは都先輩の都合上至難であつた．

（2） とすれば講習は多山の經驗にも乏しくスキー技術もつたない幹部連九名の手で當然行はれなくてはならない，兎に角この技術と云ふ點では皆恐ろしく自信がなかつた．

（3） 併し唯一の自信があつたのは僕等が一致團結して一つの目的に突進し得る力に就いてゞあつた．仕方がない，技術のまづいのははじめから判つてゐるんだから，教へると云ふのでなく皆一緒になつて研究すると云ふ氣持でやれば良い．

（4） こうした講習の組織を怠惰な温泉氣分の横溢した關温泉へその儘引き移して効果を擧げると云ふことは，是迄の經驗上，不可能だ．ビギナーをして信頼の念を失はしめるかも知れないまづい技術の所有者である僕等の合宿は，當然對外的なファクターのない土地で行はれなくてはならない．

（5） 二股の合宿は高橋先輩の示教に依る限り，この組織に對して正に好適である．しかし此地以外に今更新らしいゲレンデを探し求めることなぞ僕等には到底爲し得るものではないのだ．

（6） だから今冬の合宿は二股に於て行はれない限り，實現不可能である．

これは10月中旬の事だつたが，こうした結論は萬難を排してゞも，二股の合宿が爲されなければならないことを暗示するかの如く見えた．かくて僕等は此の結論と合宿に關する具體案とを持つて各先輩を歴訪，その同意を得た後，直ちに實際的行動に移つた．

2.

此合宿で僕等はどんな任務を持つたか？

報告第七號第四冊の記事を左に抜萃して見よう．

（1） 我々は各自の自重に依つて，飽くまで嚴格に日程を守らなくてはならない．單に〃教へてあげるからお出で下さい〃と云つて一般の人々を迎へるのではなく，我々の合宿の協力者としての意識を抱かしめなければならない．

（2） 又從來より屢々非難の聲ある部員と一般，殊に二・三年級の申込者との狹量な區別は努めて之を排さなくてはならない．この合宿は他に如何なる目的を持つにしろ少くも三高嶽水會の一部として山岳部の爲す公的事業の一つであること，從つて將來部員となる見込みがない故に二・三年級諸君を氣持の上で區別するが如きは言語同斷であることに就いて充分な理解を持ちたい．

（3） 單なるスキー享樂ではない我々の合宿に於ては，温泉や上等の旅館ではない小屋の，苦痛不便は敢て甘受しなくてはならぬ．

（4） 技術の點に於てまづいながらも各リーダー班は協力研究飽くまでひきしまつて出來る丈の事はやれるといふ自信をつけよう．これは又一人の經驗あるリーダー統率のもとに行はるゝ講習に對しての一つの試み，已むを得ざる試みなのだから．

すべては我々の一致團結の精神的な力に依る．この二股合宿の一擧は我々のその力が何の程度のものであるか，一時的な熱に過ぎないか否かに就いての試みである．否之が我が山岳部は與へられた一番大きな課題だ．我々はそれを試みに行くのだ．

つまり僕等幹部九名の團結に依つてスキー術の拙なさを補ひ一般の氣持をリードして規則正しい合宿をやりたいと云ふのが僕等の第一の目的であつた．

3.

僕等はどんな準備をし行動をしたか？

先づ小屋及びゲレンデの實地調査が必要だつた．漠然たる未知の土地に對する不安が，之に依つて取り去られ確實な希望を抱くようにならなければならぬ．この目的で10月9日部員二名は二股へ向けて出發した．之に依つて冬小屋としての合宿所の種々なる改善，食事その他に關する白馬館との交渉を果たすことが出來た．

次に僕等は11月中旬から12月上旬に亘つて一週に約2回の割で，コールフイールドの〃スキイング．ターンス〃の輪讀を行つた，根本的なスキーの原理なぞに關して何らか一般的な知識を得て講習に役立ちたいと云ふ目的からであつた．個人々々が讀むのでは兎角怠りがちなものだが，こうした方法に依つて議論なぞも戰はす樣になり相當の効果を擧げ得たと思ふ．

もう一つ問題となつたのは僕等の練習方針である．全くのビギナアに對しては基礎的な直滑降の練習に終始すると云ふ事に一致したが，2シーズン，若しくは3シーズンの者は何を爲すべきか，此處の合宿に於ては別に確たる方針もなく以前からの傳統に從つてオープン．クリスチヤニヤ若しくはステム系統のものを練習して來たのであるが，かゝる漠然たるヤリ方の爲めか此合宿に於てリーダー級の者すらクリスチヤニアを充分滿足に爲し得ないと云ふ有樣で，僕等は頗る困却した．之に對して種々異論も出たが，結局今西先輩の示敎にかゝる，インナー體重に依るターンの基礎的な練習を行ふ事に決めたのである．之に關しては別に專門的な一稿を要するものと思ふ故筆者は敢て評述を避けるが，兎に角理論を聞いただけで僕等の一度も試みた事すらない練習法なのであるから，もとより敎へるなぞと云ふ事は出來ない，皆で協力し批判し合つてそのフィーリングを得る事に努力しようと決心した．

かくして合宿は12月24日（京都發）から31日まで約一週間，參加者二十四名を以て行はれた．練習班の編成は，三年級部員三名が各一班を編成して一般申込者十五名をその下に配分し，二年級部員六名は二名宛，助手班を組織して交互に各練習班を補佐することゝしたそして僕等は，

6時起床—7時—12時　講習．

12時—1時　晝食（必ず練習場で採る事とした）．

1時—3時　自由練習，3時—3時半　休憩．

3時半—日沒　講習，9時—消燈．

の豫定でその日その日を過した，これが可成嚴格に行はれて遲滯のなかつたことは僕等の最も喜びとする所であつた．

そして合宿の終了と共に，更に冬山の訓練を受けるべく三年級部員二名，二年級六名は二班に別れ，一つは落倉を中心とする今西先輩のパーティへ，一つは唐松冬營小屋に於ける高橋先輩のパーティへ，夫々參加した．

4.

僕等の死んだ友達が三名をも加はつて活躍してくれた此合宿，僕等が全員擧つて（實際何時も何か故障があつて全部員の參加を見る事は珍らしいのだ）奮鬪した合宿も，今ではもう遠い想ひ出になつたような氣がする．此合宿に依つて明らかに僕等は一つの標石を積んだ．技術の缺を補ふ氣分の統一と正しき規律，少くもそれが初步的な講習に對して重大な要素である事を體驗した，併し此合宿はもともと高級な科學的な冬期登山を目標とした譯ではないのだから僕等はそれ丈で充分滿足する．準備の際の色んな杞憂に比してむしろ飽氣なかつたように思ふくらゐだ．唯〃內傾に依るターン〃に關しては僕等もいさゝか誤解をしてゐた點があり，充分なフィーリングを得たとは云ひ得ない，之は第二期として落倉へ行つた連中に依つて確かめられた事だ．

僕等は恐らく今年度も二股で合宿する事になるかも知れない，が，だんだん開發されて行くにつれ，うるさい對人的交涉も出來て來る事だらう，そうしたら又，無人の境を求めて退散する迄のことだ．

目次

新雪期に於ける集團登高の經驗

細野及び猿倉合宿の總括

大阪醫大　水野祥太郎

1929年12月末より1930年初頭に亘る數日を北條村に於ける二つの合宿に暮した記錄を報告する．その中，細野に於けるものは大阪醫大內部のみの合宿であり，猿倉に於けるそれは聯盟阪神セクシ。ンの企てた集團登高の最初の試みである．

1. 細野の合宿．

〔人員〕 28名．丸山政治方を合宿所に充つ．

〔目的〕 スキーの講習と冬山の Einleitung

〔組織〕 練習のためスキー技術の巧拙により，

A．Fortgeschrittene ——C組の指導に當らず．B組の中より人材を拔擢してゲレンデ行を俱にし，天候險惡の日は練習場に於てBを小人數宛分擔指導．此のグルッペに屬するものは2名．

B．Mittlere ——每日當番を定めて交代にC組の指導に當り，他の者は練習又はゲレンデ行を共にす．此組の人員は8名．

C．Anfänger ——B組の者より每日一定の課程により講習を受ける．但し，勝手に遊びたいものは仕方がないから別に遊ばせる．

此の組織は合宿を通じて嚴格に守られた．

合宿生活のための組織としては，

交涉，會計，修理，器具，觀測，醫務，

の係を置き，夫々一兩名が責任を以て事に當つた．

〔成績〕

A組——新雪期の登山の正路は勞力に於ける多大の犧牲を忍んでも尾根筋を辿るべきを思ひ，その籠手調べとして唐松主稜往復を目指した．28，29兩日B組の一部を伴つて登高

して天候のために撃退され，30日簡單に之に成功した．時間記錄は下の如し．

12月28日，濃霧，少雪，8.30a.m. 細野發，八方尾根登り口捜索，1.10—1.30p.m. 黒菱，4.00登り口，4.50合宿．（水野，南，小林，新谷）

12月29日，霧，雪，後曇，8.00發，0.25黒菱頂，天幕を張りスキー練習，三名は八方山直下の尾根迄霧中を偵察す．1.30下山開始，3.55登り口，4.20丸山方，（水野，南，堀見，小林，鹿島，蒲生，竹永，吉井，）

12月30日，曇，霧，晴，吹雪，曇，5.00發，8.50黒菱平，9.50中繼小屋，0.00スキー．デポ（搜尾根手前の野陣場）0.50—1.30唐松小屋，京大組と會ふ，2.40中繼小舍4.10黒菱下，4.57登り口，3.50合宿，（水野，南，）

B組——動き方圓滑ならず．既にリーダーを持つ學校は後輩にフォロワー氣質の惡風抜けず，却つて良き山男を生じ難いのでなからうか．

1月1日，曇，吹雪，强風，晴，9.00發，茅場尾根，ブッシュ稍々デマムサイ．上はいゝゲレンデ．1.47—2.00黒菱頭，澤通り4.10茅場，4.50合宿，（黒菱下にて板雪崩に會ふ．後項參照）

C組——乏雪のため練習場に苦しむ．29日茅場を發見し，其後はクルス順調．

尙解散後3名は八方中繼小屋に2日—6日を暮した．

2. 猿倉の合宿．

その全記錄を時間記錄の詳細に至つて迄は知らないので，單に私のノートに殘つた所から私的なスケッチを試みやうと思ふ．

〔目的〕

A．猿倉組全體としては，初心者に對する冬山の Einleitung. 殊に組織的な集團登高への訓練，新雪期登攀の對象としての白馬岳の研究．

B．我々の組は白馬尾根の登高．

〔準備及組織〕 先發の關係上，田中（神高大）を總務とし，各パーティーとそのリーダー及目標を決定し，各班の用具類の準備は各々に於て研究の上準備された．

〔結果及批判〕 當初の目的は何れも幾分の成果を得ることは出來たが，期待よりは遙かに小さなスケイルに於てに過ぎない．

猿倉組全體として，冬山の豫備智識の上に立つ識見が貧弱であつたことは否まれない．冬，新雪の降るのを恐れて他人に頼らんとのみする登山者に何を求め得やう．最初所期し

た組織は徒らな他力主義のために全く破壊され，組織的な山行計畫の全ての豫定は殆んど達成されなかつた．第二線以下の各班に何等の自主的の活動を見なかつたのは實に不思議な程である．全體としての猿倉組は從つて新雪期の白馬に就て力强い斷案の何ものをも下し得ない．

業績として擧げるべきは次の如くである．

1. 大雪渓二回（頂上往復）1月2日，田中（神商）秋山（關學）
   （葱平往復，降雪のため退却）1月4日，田中，辻谷（RCC），小林（大醫），
2. 杓子尾根（途中退却）1月2日，神商及關學，
3. 白馬尾根（途中退却）1月4日，水野，
4. 小蓮華尾根，二回（途中退却）12月30日，神商及關學多勢，
   1月10日，水野，

右の中，2及3は兩者とも天候のため極く下方にて中止したので比較すべきは1及び4であるが，大雪渓のコースは幸ひにして乏雪期中に成功を得ることは出來たものの，眞の冬季の氣象の支配下に在つては登攀路としての可能性極めて薄く，4のコースを以て新雪期の白馬の正路と見做すの最も穩當なるに如かないであらう．

我々の組（田中，辻谷，小林，水野）としては，登り口の組織的調査が他の組によつて行はれなかつたため，全然戰線を後退縮小せしめなければならなかつた．而かも組の大部分が僅かの降雪に氣を腐らせて早々に下山したのは意外であつた．

此組の解散と共に水野は一人小屋に籠り，新雪雪崩の調査と田中の失敗した小蓮華尾根登り口の發見に專心意を注いで得る所があつた．

1月10日，晴，曇少雪，深雪，4.20發，5.25馬尻手前の雪崩跡，6.20白馬澤上のテラス，6.53小蓮華主稜，7.32—7.58青木尾根，10.00引返し，11.12馬尻上，0.23御殿場，1.10　2.50猿倉，4.15—5.00細野，5.30四谷．

小蓮華尾根の取付は，白馬澤出合下手より登り，向つて左の小尾根を傳へばブッシュも少く所々に大きなテラースもあり，樂々と登ることが出來る．金山澤側も此邊は緩く，純白でブッシュを見ず，一層登り易いので無いかと思はれる．金山澤出合は雪崩には安全で．登攀前日に架橋するを便とする．青木の出る邊りは內部が空洞のため，非常に通過難澁である．或時など，六尺八寸のスキーの儘首迄落ち込んだ．

3. 雪崩の記載

〔當時の天候〕 12月30日略々晴，31日曇少雪，1月1日略々晴，烈風，2日午前晴，午後曇少雪，3日霧，4日曇少雪，晴，深雪，5日深雪，6日深雪，7日深雪，8日深雪，9日深雪，後晴，10日晴，曇少雪，深雪，

〔板狀雪崩の一例〕

1月1日，午後2時過，黒菱北面の緩斜面，

（性質）——基底はクルステに非ずして，輕く叩かれた粉雪（落ちし雪よりは時期を異にせる如し．シュプールの沈下約10糎）なり．滑落せる部分の厚さ最厚部約1米，幅員約25米．表面は僅かにスキーの角を許す程度に風叩され，內部は非常に輕き粉雪層よりなる．

（原因及條件）——氣溫攝氏零下5—6度以下．傾斜約20度の烈風に露出せる斜面．上部輕く konkav 下部輕く konvex なる純白の大斜面の略々移行部を不識の間に先頭が横斷したことにより惹起さる．

（狀況）——先頭の横斷線より約30米上方部に龜裂を生じ，緩やかに滑落す．先頭が周圍の斜面の異常な上昇感によりそれと氣附きたる時は横斷線の下方約10米部附近に板狀片が頻りに盛り上りつゝ破碎轉落しつゝあり．二番は滑落せる雪盤の端に乘りて轉倒せしも速力なきため流されず，雪崩の起きたるさへ氣附かず，先頭は直ちにその儘圈外に滑り去る．前後を通じて特に異樣の音響を聞かず．殘部の隊員は落下後の斜面を難なく通過せり．デブリーは，破片が小さくなりしと內部の粉雪の流動のために面積，形狀分明ならず．唯餘りの緩斜面に於て遭遇せしこととて暫し一同唖然たりき．

〔白馬大雪溪に於ける新雪雪崩〕

A．1月4日，9.30 a.m. 大雪溪，2000 m 邊に入る白馬側のリンネより．

（實見狀況）——大雪溪中頃の大クレヴァス上部（稍急になつた邊）を杓子側寄りに登行中すぐ右手のリンネ上部より濛々たる雪煙を上げて落下す．下部に至るに從ひ速力は幾分緩まりたるも尙相當の速力を以て大雪溪に出で，その際左に括弧を描いて殆んど流動を停止したるも一部は再びクレヴァス上緣にかゝつて流下を再開せり．

（性質，條件及原因）——落下の狀況より乾燥新雪表層雪崩にして幾分塵雪崩に近きものと推され，原因として田中は溫度の變化を擧げしも，後，リンネ上部の懸崖部積雪の風力による攪拌を主因とするに同意せり．當時大雪溪部は風少かりしも，白馬澤及尾根は猛烈

なる强風の荒ぶ所なりき．降雪量は未だ多からず．

（デブリー）——長さ約200—300 m. ブロックを認めず．歸途（約3時間後）既に新雪を被りて不分明にして，僅かに硬度の相違よりして推さる．此種のデブリー様のものは大雪渓滑降中五六回遭遇せり．何れも2日以後のものの如し．（辻谷に依る）

（コースとの關係）——杓子側をとる時は重要ならず．

B．1月7日，11，25 a. m. 馬尻手前にてデブリーを發見す．

（デブリーの狀況）——既にデブリーの所々に4—5糎餘の新雪を破りデブリーの形狀は定かならず．雪球を混ぜるも，氷の如く堅からず，且，極めて小さく（20 cm.—30 cm. の直徑）少數なり．デブリーの擴がりは當時霧の中を見歩きしのみにて20—30 m×500 m 以上に及ぶ．後，10日，白馬澤出合附近の河床より對岸の夏道及び馬尻迄追隨し得る雪球の分布を見，尙，其の部基底がデブリー様に硬固なるを知り，想像に絶する大新雪雪崩の白馬大雪渓正面より襲來せしを知る．推定するに3日午後以後の深雪により，6日頃に惹起されたるものならんか．

（コースとの關係）——御殿塲馬尻間の夏道は殆んど半ば此の雪崩の正面に刮め去らる．如何なる程度の積雪が此の雪崩を惹起すべきやは今後の白馬を志す者に與へられし恰好のテーマならんか．とまれ，白馬大雪渓を新雪期登行の正路と認めんとする如何なる要求も此の問題の解決なき間その正當性を主張する何等の權利をも有せず．

〔長走澤附近の新雪雪崩〕

猿倉背面の林空は既に杓子正面よりする新雪雪崩に恐るべきものあるを教ふ．

1月8日，吹雪の中に猿倉小屋にて異様の地響を聞く．時に午後3．50，約40秒にして風の中に消え去る．霧深く（3度），暗澹，降雪頻りにして新雪量約30糎，氣壓636．2，風は東，1—2．

A．1月9日，11．00 a. m. 頃デブリーを發見す．風强く新雪を被ること深きも，7日迄深く迂餘屈曲せし河流全く消失し，一帶は平滑となり，河床頗る淺し．樹木の折れたるもの2，雪球塊の形を存したるもの3—4．谷を横斷して一尺置きに sondieren せしに，最深25糎餘にて氷面に衝突せり．

（性質推定）——白馬大雪渓のものと同じく降雪中に起りし巨大なマスと驚くべき速度とを有する乾燥新雪雪崩ならんか．（多分8日の音響は此雪崩によるものならん）上部の谷の

形態よりしてか主として右岸を廣く侵せし如し.

B. 同日，Aの振動による雪庇の破壊によるものと覺しく，長走澤手前の斜面に幅10 m 長さ100 m 餘の小デブリーを見る．斜面の傾斜はごく緩く，上部約35°，デブリーの部は5° 以下，雪庇の上を綿密に調査せしも，Aの分流なるが如き形跡を發見する能はず．中山を越さずして夏道通りに馬尻に趣く際は幾分の注意を要す．性質は勿論乾燥新雪雪崩ならんも，雪球狀に凝固せる氷塊の布置密なるはその速度の恐るゝに足らざることを示す．

二　月　の　大　山

大阪醫大　小　林　義　郎

位置の僻在からか今迄冬季の大山に就ては殆んど知られる所は無かつた．低いとは云へ中國では第一の山であり，獨立した火山として雄大な裾野の廣がりと，峨々たる懸崖と，涯しない樹海とを持つた，變つた山行を樂しめる山では無からうかと想像されてゐた．此冬は珍らしく多くのパーティが此所に目を付けて，期せずして二月の紀元節を中心に此山を包圍攻撃の貌となつた．天候が吹雪續きだつたため頂上近くで總て撃退されるの已む無きに至つたが，豫想してゐた期待は天候が險惡だつたためか一層大きく酬ゐられ，どのパーティも充分の滿足を以て山歩きを享樂した．

甲南パーティ，南方の下河原部落より．

藤木九三氏，田口一郎，村上正一郎，喜多又太郎，秋馬晴雄．

六高パーティ　南西方，888米の獨立標高點に在る小屋より．此小屋は前日先發隊が糧食を運び上げた由である．

RCCパーティ
住友パーティ　} 西方，金屋谷部落より．

大阪醫大パーティ　北方，大山寺より．水野祥太郎，南勇吉，小林義郎，

上の中，六高パーティは甲南パーティと10日の行を共にし，後，烏ケ山に趣き，RCC及び住友パーティは桝水小舍より眞直ぐに登つて主稜直下迄達したと聞く．

目次

1. 下大河原よりの試登，

此所よりする大山東南稜は，ナイフ・エッヂがあり一寸アルプスの様な感じのする所ださうである．

甲南パーティ　5年2月10日，8．30 下大河原，10，00文珠堂，10.40峠，12.00萱塲晝食，2.30 森林帶終，スキーデポー，4.00，100米附近引返す，4.40スキーデポー，6.00峠，9.00下大河原

寢坊して出發がおくれた．降つてゐるが出掛ける．廣い河原を上つて文珠堂の手前で右に曲り小さい峠を登る．反對側を高度を失はない様にすつとトラバースして廣い原野に出る．萱塲らしい．掘立小舍で晝食にする．六高の人達が來た．炭燒小舍に泊つてゐるのだ．

森林帶に入る．大きなブナの疎林，笹ケ峰のグルワの様なかんじ．森林帶の中は完全なブルフアー，尾根に出る所でデポーとする．少し昇るとすごいナイフエッヂだ．西穗の様な所がある．1600米で4時になつたので，後100米を恨しく引返す，アンザイレンする．コンティニアスで下つて，デポーにかへる．素晴しい滑降，粉雪の林間滑走森林がすめば廣い原野を直滑降瞬く中に峠の下に來る．シールをつけて上る．峠の下りで秋馬がトーアイアンを折る．六高の人に輪鐵を借りる．でも針金で靴の上からしばつたら不完全乍らスキーで滑れさうだ．降りしきる雪の中をラテルネと懷中電燈の明りを頼りに村についたのは9時すぎだつた．（田口君の報告による）

2月9日，9.00 江尾，11．00 下大河原野田方，1.00 發，2.30 文珠堂，3.00 同發，4.00 下大河原，2月11日，9.00 下大河 原發，11.40 文珠堂，12．10 發，2.30—本松上部，4.30 金屋谷，5.30 溝口歸

2. 大山村よりの試登，

高度から云つても南方の文珠堂，西方の拂水の一本松と殆ど等しいし，その上北方に寄つてゐるだけ雪はうんと多い．僕等の泊つた蓮淨院は村から川の向ひにあつて，山の中の寺だと云ふ感じが深い．村までの滑降は出發の時の目覺しとなつてくれる．スキーロウテも最も豐富に取れやう．

大阪醫大パーティ，5年2月10日，7.50出發，8．12 大神山神社，9.27 尾根，0.22，1320米峰引返し，1.30 阿彌陀濕，4.20 蒙圓山，

朝飯の遲いのをかこち乍ら出發したのが8時前だつた．雪は昨晚より降りつゞけたらしい．神社の左の谷を入る．新雪は霰の様で一寸積ればすぐ滑りおちてゐる．急な所では角

がきかず閉口する．左の尾根に取り付く．左側は斷崖になつて雪庇が出てゐる．しばらく進むと，急に尾根がなくなつてゐる．あたりは霧の爲何も見えない．しばし呆然とする．霧はうすらいだ，尾根ははるか下につゞいてゐる．急角度におちて，きれてゐるのだ，仕方なく凍りかゝつた斜面を一々角付して下る．一旦左の谷に入り，すぐまた左の尾根の上に出ると1320米峰はすぐ其處に岩を鎧つて立つてゐる．頂は岩の上に雪がかぶさつてゐる．吹雪は益々猛烈になつて來るし，雪庇の高低がすつかり見えないため遂に斷念して引返す．谷（劍谷上流）は此邊無性に氣持がいゝので眞直ぐ川床の部落まで下る事になり，晝食をとる．しかし谷は下るに從つて狹まり，遂に底知れぬ瀧（後阿彌陀瀧と知る）にぶつかつて，來た道を引返す．先の急斜面はスキーをリレー式にトラーゲンして上つた．それからは輕く一息に神社まで下つた．まだ早かつたしするのでそのまゝ豪圓山まで遊びに出かける．豪圓山は雪もよく好練習場だ．

2月11日，8.13 出發，10，15 デポー，10.30 引返し，11.16 歸着，

寺の西に沿ふて，後少しばかり木の間を通ると廣い河原に出る．少し西によつて前方の森林に入つた．雪は昨日と變りなく，すりやすく先頭はつらい．谷に沿ふてすゝむ，霧氷が美しく風に鳴つてゐる．林を拔けると，傾斜も風當りもうんとましだ．霧も濃くなつて10間先が見えない．すりおちそうでスキーで進み得ず，さしこんでおいて垂直にもぐり乍ら50米餘りも登ると主稜に取り付いたらしくパツと雪庇の上に出た．吹雪は猛烈だし，それに足下から雪崩がおきたりして，どうしても此雪庇の屋根を傳ふことが出來ず，遂に進行を斷念した．風がつよく，顏を眞面に上げる事は出來ないし，スキーデポは暫くはさつぱり見當がつかない．逃げる樣に森林內にすべりこむ．ターン毎にあたりの雪がさつさつとなだれおちる．そして正午前には，もうお寺に歸つてゐた．

2月9日，9.10 講口 11.05 金屋谷晝食，2.00 拂水，4.00 蓮淨院

記錄に現れた成績は以上頗る簡單である．吹雪，流れ落ちる新雪の中の苦鬪，吹雪，雪庇の痩尾根，吹雪，而して退却．

雪崩としては．三鈷峰と1320米の間の澤に三鈷峰寄りの支谷から出て劍谷の中迄押し出した新雪雪崩の痕跡が記錄されるべき唯一の物であらう．他は自身の惹起したもの許りであつた．1320米峰正面の小さな澤では降雪に連れて新雪面がザツザツと音を發し乍ら流れて行つた．劍谷の兩岸の崖から瀧のやうに雪が流下してゐた所は無數にある．

三鈷峰の尾根と東南稜は機會を得て再び登りたいと思つてゐる．

目次

雪中露營に於ける温度

（アルペンクリマ研究の一斷片として試みんとする覺書）

京都帝大　伊　藤　　愿

§. 1. 氣温と Bivouac
§. 2. 氣温と地熱
§. 3. 氣温と雪温
§. 4. 氣温と内部温度 (Innertemperature in der Unterknnft.)
§. 5. 末尾

§. 1. 氣温と Bivouac

Bivouac が Alpinism に於て如何なる地位を占めるかと云ふ事に就いては今更此處に改めて喋々するを要しない．それ程に Bivouac は Alpinism に於て重大なる役割を演じて居る．

現今に於ては登山の發達に伴つて多くの Unterkunft が設けられ夏は勿論，事實冬期に於てすらアンゲネームな Huettenleben が出來る様になつた．歐洲アルプスに於ては1．800米の高所の小舍に於てすらスチームの設備あるものが出來てゐるとか．

それに何故 Bivouac が必要であるか？

Expedition にはどうしても Bivouac を neglect する事は出來ない．例へば Mt. Everest を目指した Himalayan Expedition にしろ，今度企てられた Kangchenjunga の Expedition にしろ Bivouac を考へないわけにはゆかない．假令コンフオタブルな Bace Camp があつたにしろ，いよいよの final attack の際には最早や此等の恩惠を蒙ふる事は出來ない．その場合には可及的に輕裝して Bivouac しなければならないのだ．J. N. Collie 及び E. F. Norton も Mt. Everest 登攀の最も大なる困難は斯かる高い場所に Camp を設けると云ふ事であらうと述べてゐる．此れに就いては1924年に企てられた Mt. Everest 登攀の Himalayan Expedition に就いての Alpine Club の討論會に於て Dr. T. G. Lon-

gstaff がその豊富なるの彼経験よりして次の様な事[3]を云つてゐる．:—"Mt. Everest" の頂上に立つ事は今年得られた様な優秀なる，酸素補給無しで行ける人には可能であると信ずる．(この事は1924年6月4日，第二次登攀の際 E. F. Norton と Dr. T. H. Somervell が酸素吸入なしで試み，Norton が 28,126 ft. 即ち Mt. Everest の Summit から僅かに 876 ft. 下の地點まで到達した事を云つてゐる．) 最も大なる困難は高所に Camp を建設する事である．若しも Climbers にして彼等自身の Camp を3日間——彼等の tents, sleeping-bags, プリマのストーブ，雪を融かす燃料，食料，及び豫備の clothing を充分都合良く，運び上げる事が出來れば Mt. Everest の頂上に立つ事は可能である" と．

又こんな Expedition と云ふ様な大袈裟な事を例にとらなくとも，吾々が吾々の alpinism に於て Pioneer work を目指す時に於てすら最早や吾々はアンゲネームな Huette の恩惠を期待する事は出來ないのだ．又 Forced-bivouac の場合，——吾々は屢々種々なる原因からして Forced-bivouac を餘儀なくされる場合が多い．而して Pioneer work を求めて氷雪の領域に眞劍な努力を捧げる者にして Forced-bivouac を批難し得る者，果して何人あらう．吾々は殊更に Bivouac を好む者では無い．Bivouac の齎す危險に就いては知らぬわけではない，然し文字の示す通りの Forced-bivouac や又避難小舍の無い地域に於ける Bivouac は吾々に必然的に伴ふ fatal である．——吾々自らが斯かる場合その Unterkunft の問題を解決しなければならないのだ．此の點から云つても Bivouac の研究は吾々に取つておろそかに出來ないものである．

Bivouac の研究と云つてもその範圍は仲々廣汎である．食料，寢具，天幕，其他の Ausrustung，或は又 Bivouac の時期，方法，溫度，e. t. c. 種々なる見地からの研究がある．此處に掲げるものは溫度と云ふ點から見たる一つの斷片である．

吾々人間はどの位迄の高所に於て Camp をなし Bivouac を爲し得るであらうか？ ほんの寡い範圍から著しい例[1]を擧げるならば:——

1860—1865年，かの熱心なる登山家で，當時印度政府の測量技師であつた W. H. Johnson は Karakoram 山脈を歩いてゐた時 22,000 ft. の高所で寢てゐる．

1907年，Himalaya に二つの Expedition が爲されその一つは C. W. Rubenson と Monrad Aas に依つて Kangchenjunga 登攀が企てられた．然し不幸にして Kangchenjunga は失敗に終り，その代りに Kabru (24,015 ft.) を試みた．その際彼等は 20,000 ft. の高

所に於て約12日間を暮し，彼等の設けた最高の Camp は 22,600 ft. であつた．寒さは又酷しくテントの内に於てすら −34° C. であつた．

1905 年，Dr. Longstaff が Alexis 及び Henri Brocherel を伴つて Gurla Mandhata (25,350 ft.) を試みた際第三夜を 23,000 ft. の高所に於て雪の中に穴を掘つて過してゐる．

1913 年，C. F. Meade が數年間苦心の末に漸くクリーを傭ふ事を得て Kamet を試みた際には 23,500 ft. に Camp を張つて此處に一夜留つたがその際テント内の溫度は −20° C. であつた．

1920 年，Dr. Kella が同じく Kamet に Expedition を企てた際 9 月 11 日には 21,000 ft. に Camp Ⅲ を，9 月 19 日には 22,000 ft. の積雪上に Camp Ⅴ を設けたが前者に於ては氣溫 −18° の經驗をしてゐる．

此の點に於て吾々に最も初めに考へられるのは斯の Mt. Everest 登攀を目的とする大 Expedition である．第一回の1921年より第三回の1924年に至る迄の試みに於て最も高き Camp は CⅥ 26,800 ft. 即ち 1924年 6 月 3 日に Mt. Everest の North-Eeast Shoulder に設けられたものであつて，6 月 8 日 Mt. Everest の尊い犧牲となつた H. L. Mallory と A. C. Irvine がその前夜を過した，此の世の最後の，然かも世界で今迄人類が爲した最高所の Bivouac である．寒さは1922年の場合には 5 月19日夜 CampⅢ に於ける −34.5° C. が最も低く，1924年の第三回の Expediton に於ては 5 月22日の North col に設けた Camp Ⅲ の −31° C. が觀測された範圍では最も低かつた．

1925 年の 4，5，6，7 月に亘つて企てられた Mount Logan (19,850 ft.) 登攀に於て，その Expedition[6] は 6 月とは云へその或る夜には Windy Camp (16,760 ft.) にて氣溫 −36° C. と云ふ經驗をしてゐる．尙ほこの Expedition はその内 44 日間は全く文字通りの氷上に生活した．Allen Carpe[7] の "Observations During the Monmt Logan Expedition" に依つて彼等が經驗したる Camp Site での Record of Temperaturs 中攝氏零度以下の Data を抜萃すれば：——

第一表，Mount Logan Expedition が經驗したる氣溫中攝氏零度以下のもの，

May	17	Minimum overnight	Camp, above Short River	− 2
	20	Minimum overnignt	Camp, foot of Chitina Mt.	− 3

May	21	Minimum overnight	Fraser-Baldwin Cache	- 2
	22	"	"	- 0.5
		"	Cache, centre Chitina Gracier	- 0.5
	23	"	Camp, foot of Eaton Gracier	- 6
		4.30 a. m.	"	- 3
		8.00 p. m.	Turn Camp, foot Ogilve Gracier	- 3
	24	Minimum overnight	"	- 10
	25	Minimum 1 a. m.	"	- 3.5
	26	Minimum to 12.30 a. m.	Camp, foot Mussell Graicer	- 8
		1.30 a. m.	"	- 6.5
	27	Minimum to 12 p. m.	"	- 11
		Minimum to 2 a. m.	"	- 13
		2.00 a. m.	"	- 9
		5.00 a. m.	Cascade Camp	- 6
	28	Minimum overnight	Foof of Mussell Glacier	- 5.5
		"	Cascade Camp	- 8
		7.00 a. m.	"	- 3.5
		5.00 p. m.	"	0
	29	Minimum to 12 p. m.	"	- 4.5
		1.00 a. m.	"	- 2
		9.00 a. m.	"	- 2
	30	Minimum to 2 a. m.	Foot of Mussell Glacier	- 14
		Minimum overnight	Cascade Camp	- 13
		5.00 a. m.	"	- 9.5
		3.00 p. m.	"	- 2
	31	Minimum overnight	"	- 8
June	1	Minimum overnight	Cascade Camp	- 7
		5.30 a. m.	"	- 4
		6.50 a. m.	"	- 3
		8.10 a. m.	Rock Ridge, above Cascade	- 4
		7.00 p. m.	Cascade Camp	0
	2	Minimum overnight	"	- 4
		5.00 a. m.	"	- 3
		6.15 a. m.	"	- 1
	3	Minimum overnight	"	- 7
		4.30 a. m.	"	- 6

June	3	6.00 p. m.	Observation Camp	- 1
	4	Minimum overnight	〃	-16
		5.00 a. m.	〃	- 9.5
		3.30 p. m.	〃	- 2
		5.00 p. m.	〃	- 7
	5	Minimum overnight	〃	-15.5
		7.00 a. m.	〃	- 7
		9.30 a. m.	〃	- 3
		3.15 p. m.	Below king col	- 7--4
		5.00 p. m.	Observation Camp	- 7
	6	Minimum overnight	〃	-20
		7.00 a. m.	〃	-13
		4.10 p. m.	Below king col	- 1
		9.10 p. m.	Observation Camp	-12
	7	Minimum overnight	〃	-15.5
	8	Minimum overnight	〃	-18
		6.00 a. m.	〃	-15
		8.40 a. m.	Seld Dump (about 11,600 ft.)	- 2
		4.45 p. m.	Observation Camp	- 1
		6.00 p. m.	〃	- 4.5
	9	Minimum overnight	〃	-15
		4.00 a. m.	〃	-13
		5.30 p. m.	King col Camp	- 5
		8.00 p. m.	〃	-13
	10	Minimum overnight	〃	-15.5
		8.00 a. m.	〃	- 7.5
		6.00 p. m.	〃	- 7
	11	Minimum overnight	〃	-16.5
	14	Minimum overnight	〃	-23
		4.30 a. m.	〃	-20
		7.10 p. m.	Camp, above col	- 8
	15	Minimnm overnight	〃	-14
		12.00 noon	〃	- 4
	16	Minimum overnight	〃	-22
		6.00 a. m.	〃	-19.5
		8.00 a. m.	Windy Camp	-34

June	17	Minimum overnight	Windy Camp	−35.5
		8.00 a. m.	〃	−20.5
	18	Minimum overnight	〃	−31.6
	19	〃	〃	−36
		〃	King col Camp	−20.5
		8.45 a. m.	〃	− 6.5
		10.00 a. m.	〃	− 4−−1
		4.30 p. m.	Site of Camp above col	− 3.5
	20	8.00 a. m.	Windy Camp	−12
		7.00 p. m.	〃	− 4
	21	Minimum overnight	〃	−20.5
		6.30 p. m.	〃	− 9.5
		11.00 p. m.	18,500 ft. Camp	−23
	22	Minimum overnight	18,500 ft. Camp	−27
	23	Minimum overnight (thermonether snowed np)	Plateau Camp	−24.5
		8.00 p. m.	Summit	−15.5
	24	Minimum to about 1 a. m.	Bivouac, below Summit	−24.5
	25	Minimum overnight	Plateau Camp	−29.5
	26	〃	〃	−36
	28	〃	King col Camp	−15
	29	〃	Cascade Camp	− 6.5
July	1	Minimum overnight	Cascade Camp	− 5
	2	〃	Turn Camp, foot of Ogilvie Glacier	− 2

(6月11日から13日迄は King col で Camp してゐたが吹雪に襲はれて記錄が欠けてゐる.)

尙ほこの外に同年2月先發隊としてリーダーの MacCarthy が Expedition に要する食料其他の物資を Chitina Valley に運んだ時4日から13日の間の或る日には最低溫度−46.7° C. と云ふ寒さを經驗してゐる.

1927年6月11日より9月23日迄 Gurbert von Salis 他九名に依つて科學的研究の根據地として4,100 Meter の高度を有する Moench の頂上に氷室と一張の Polarzelt を Unterkunft として4ケ月間に亘る Bivouac が數人で交替し乍ら續けられた事は Bivouac を研究する上に大なる參考資料を供するものである.

此の時の溫度の觀測の Data を手に入れる事が出來ない爲めに詳細を知り得ないのは甚だ遺憾である．Gurbert von Salis[10] の手記に依れば：——Moench の頂上附近に於て氷室を作り，ゴム製のシーツ様のものと，毛氈或は軍隊用の Zelt を使用し，ノールエー產の Renntier 製の Schlafsack 三ケを用ひて雪——と云ふよりも寧ろ氷の上に生活した．

この Bivouac に於ては Ausruestung が相當完全であつたから比較的睡眠は取れたらしい事が想像される．Zelt の下に藁を敷く試みをして相當効果があつたらしい．

この Bivouac の時の內部の溫度と外部の氣溫其他詳細な Data を知る事が出來れば可なり興味深い點があるのだが遺憾な事には今，此れを詳らかにし得ない．

以上の如き實例から推して吾々は氣溫は相當寒冷であつても Bivouac は可能である事を知る．Mount Logan Expedition 或は Moench の Observation 等に依つて吾々は吾々が想像してゐた以上に寒冷な Condition に於て相當長期の Bivouac を爲し得る確信を得る．Mount Logan Expedition に於て，それの殆んど大部分は比較的 Confortable な Base Camp が Unterkunft になつたにせよ 18,500 feet (5,640 meter) の度に於て (Mount Logan は Mount Everest より 9300 ft. 低いが緯度に於て 1500 miles 北極に近い事を顧慮する時兩者は同じ Condition にあると考へて差支へない．) −36° C. の寒冷に耐へた事は偉大なる業績である．又此の Expedition に於ては Mount Logan の頂上附近に於て Bivouac を經驗してゐる．此等の實例は如何なる高處にまで，或は又如何なる寒冷にまで，Bivouac が可能であるかと云ふ事に就いて深き hints を吾々に與へるものである．

吾々が今後研究すべき問題は如何にして可及的に負擔少き Ausruestung に依つてよりアンゲネームな Bivouac を爲すかと云ふ點にあるのではないかと思ふ．

§. 2. 氣溫と地熱[12], [13], [14],

Bivouac を研究する上に於て地熱即ち氣溫と relativ の關係にある地熱に就いての考察は雪溫の研究に對して重要なる hints を提供するものである．

地熱は平地よりも山の方が比較的高い，——即ち地熱は山の方が溫たかい．地面が日中は空氣よりも溫まつてゐると云ふ事は良く知られてゐる事である．

Kerner が Tirol に於て氣溫と地熱との差は第二表の如く，土地の方が空氣よりも溫たかい事を測定した．(年平均)

第 三 表,

高　　度	地熱と氣溫との差
1,000 Meter	1.5° C.
1,300 Meter	1.7° C.
1,600 Meter	2.4° C.
1,900 Meter	3.0° C.
2,200 Meter	3.6° C.

Martins は 1864 年 9 月 8 日 Pyrenae 山麓の Bagneres (551 Meter) と Pic du Midi (2877 Meter) との二ケ所に於ける同時の觀測の結果を第三表にして地熱と氣溫の差異を發表してゐる.

第 三 表,

場所 / 溫度	Pic du Midi (2877 M.)	Bagneres (551 M.)
平均氣溫	10.1°	22.3°
地表溫度	33.8°	36.1°
5 cm 地下ノ溫度	17.1°	25.5°

夏期は當然にこの Differenz が大きい. Engadin の Silis Maria (1181 Meter) に於て 1894 年から 1899 年までの K. Diem の觀測に依れば第四表の如くなつてゐる.

第 四 表, (午後 1 時—1 時半) (年平均溫度)

氣溫	1.79° C.
5 糎の深さの地熱	5.12° C.
30 糎の深さの地熱	4.53° C.
60 糎の深さの地熱	4.52° C.
120 糎の深さの地熱	4.72° C.

次に地熱は高度に依つて變化する如く又その場處の北向きであるか南向きであるかに依り又, 1 年中の季節に依つても變化するわけである. 次に揭げる第五表は前者の年平均溫度及び夏期に於ける變化を 1000 Meter について見たものであり, 第六表は季節に依る日毎の Schwankungen である.

第 五 表，(溫度は C.)

	annual average	rising in summer to
South-west face	12.7°	18.3°
South-east face	12.6°	19.7°
South face	12.6°	19.3°
West face	12.2°	18.5°
North-east face	11.3°	18.6°
North-west face	10.6°	17.0°
North face	10.2°	16.0°
East face	9.5°	15.3°

第 六 表，

Zeit \ ort	123 Meter	167 Meter	302 Meter
Winetr	3.0°	2.5°	2.0°
Fruehling	5.8°	5.0°	4.6°
Summer	6.1°	5.2°	5.2°
Herbst	4.7°	3.6°	2.9°
Jahr	4.9°	4.9°	3.7°

吾々は以上に考察した地熱の研究が次の §. 3. の雪溫の考察に多大の hints を與へるであらう事を推測する.

§. 3. 氣溫と雪溫

雪溫と氣溫との關係に就いては §. 2. に於て地熱に就いて述べた事と略ぼ同樣の事が當嵌まる.

然し乍ら吾々の Bivouac の見地からすれば地熱よりも雪溫によりその重大性を見出すのである. 何となれば Bivouac 研究の實益は吾々が土の上に Bivouac した時よりも雪上に Unterkunft を求めなければならなかつた時に著しいからである.

雪はその熱傳導率は甚だ僅少なもので，エボナイトに次ぐとまで云はれてゐる. その常數は 0,00677 d^2 (d は雪の密度. 1891 年アベレスの測定) である.[16]

雪が熱の不良導體であると云ふ事は地面が深く積雪で蔽はれてゐる場合には氣溫及び積雪表面の溫度が零度以下の寒冷にあつても雪中深部及び地面は寒冷に對して保護され或は

零度内外の溫度を保ちつゝ農作物の保溫をなし，又高山植物に於ては alpenflor と重大な關係を有してゐる．

Woeikoff が Petersburg で測定した處に依れば氣溫と雪層の溫度は第七表[12]の通である．

第 七 表，(溫度は C. 日蔭)

氣 溫	積雪表面の溫 度	5糎の深さの溫 度	12糎の深さの溫 度	23糎の深さの溫 度	42糎の深さの溫 度	52糎の深さの溫 度
−17°	−15°	−11.3°	−9.2°	−8.4°	−3.0°	−1.6°

斯く雪層の溫度は積雪深く底に入る程溫かい，それで植物は雪の下にあつて嚴冬の寒氣や霜から保護されて春の芽生えの準備をしてゐる．又春の雪融けは積雪の底部より起る事は "Unterschmelzung" と云ふ言葉を首肯させるものであらう．

次に掲げる第八表は相當長い日數に亘つて測定された雪溫表である．

第 八 表，大澤小舍 (約1700米) に於ける觀測[15]．

1928，3，14—4，5． 早大，有田，宇野澤兩氏觀測．

月 日	時 刻	氣 溫			雪 の 溫 度 (深さ cm)			
		現 在	最 高	最 低	0	5	10	20
3，14	6 a.m.	− 6	− 5	− 6	−11	− 7	− 7	− 7
	9 a. m.	− 2	− 2	− 6	− 9	− 7	− 6	− 5
	12 a. m.	− 1	4	− 1	− 6	− 6	− 6	− 6
	3 p. m.	− 3	2	− 3	− 9	− 7	− 7	− 6
	6 p. m.	− 6	− 3	− 6	− 9	− 8	− 7	− 6
	9 p. m.	− 6	− 6	− 6	− 8	− 6	− 6	− 6
15	6 a. m.	− 5	− 4	− 6	−11.5	− 8.5	− 8	− 6
	9 a. m.	− 1	0	− 4	− 8	− 8	− 7	− 5
	12 a. m.	4	6	− 1	− 2	− 4	− 5	− 5
	3 p. m.	0	5	0	− 9	− 5	− 7	− 5
	6 p. m.	− 4	0	− 5	−11	− 8	− 7	− 6
	9 p. m.	− 6	− 3	− 6	−12	− 7	− 6	− 5
16	6 a. m.	− 4	− 4	− 8	−16	− 9	− 9	− 6.5
	9 a. m.	2	2	− 6	− 8	− 8	− 7	− 6
	12 a. m.	5	8	2	0	− 7	− 6	− 4
	3 p. m.	5	9	4	− 2	− 4	− 4	− 4
	6 p. m.	− 3	− 6	− 3	−13	− 8	− 8	− 5
	9 p. m.	− 3	− 3	− 4	−13	− 9	− 6	− 5

月 日	時 刻	氣 温			雪 の 温 度 (深さ cm)			
		現 在	最 高	最 低	0	5	10	20
17	6 a. m.	− 1	2	− 4	−13	−10	− 8	− 6
	9 a. m.	8	8	− 2	− 8	− 9	− 7	− 5
	12 a. m.	11	12	6	0	− 6	− 6	− 5
	3 p. m.	8	13	7	− 1	− 4	− 6	− 5
	6 p. m.	4	8	4	− 5	− 5	− 6	− 7
	9 p. m.	3	4	2	− 3	− 6	− 5	− 5
18	6 a. m.	0	4	− 1	− 6	− 8	− 7	− 5
	9 a. m.	6	7	− 1	− 2	− 7	− 6	− 4
	12 a. m.	12	13	6	0	− 4	− 5	− 4
	3 p. m.	7	12	7	− 1	− 3	− 5	− 5
	6 p. m.	7	9	3	− 8	− 3	− 5	− 5
	9 p. m.	2	5	2	−11	− 5	− 6	− 5
19	6 a. m.	6	5	1	− 5	− 5	− 5	− 5
	9 a. m.	10	11	6	0	− 5	− 4	− 4
	12 a. m.	10	11	9	1	− 2	− 4	− 4
	3 p. m.	10	13	9,5	0	− 2	− 4	− 2
	6 p. m.	7	12	7	− 2	− 4	− 3	− 3
	9 p. m.	5	7	5	− 9	− 3	− 5	− 6
20	6 a. m.	4	8	4	− 4	− 4	− 5	− 5
	9 a. m.	12	13	7	0	− 4	− 4	− 4
	12 a. m.	12	13	10	0	− 2	− 4	− 4
	3 p. m.	10	13	10	0	− 2	− 3.5	− 4
	6 p. m.	10	11	9	0	− 1	− 3	− 4
	9 p. m.	9	9	9	− 4	− 3	− 3	− 3
21	6 a. m.	10	10	8	− 2	− 3	− 3	− 4
	9 a. m.	9	10	9	0	− 2	− 3	− 3
	12 a. m.	8	9	8	− 1	− 2	− 3	− 3
	3 p. m.	6	8	5	− 2	− 2	− 3	− 3
	6 p. m.	?	?	?	− 4.5	− 3	− 3	− 2
	9 p. m.	0	4	0	− 7	− 6	− 4	− 4
22	6 a. m.	− 4	2	− 4	−15	−13	−12	−11
	9 a. m.	4	4	− 5	−10	−10	− 9	− 5

月 日	時 刻	氣 溫			雪 の 溫 度 (深さ cm)			
		現 在	最 高	最 低	0	5	10	20
22	12 a. m.	5	9	2	− 3	− 4	− 6	− 5
	3 p. m.	5	9	4	− 4	− 3	− 3	− 3
	6 p. m.	0	6	0	−11	− 8	− 7	− 6
	9 p. m.	− 3	0	− 3	−12	−11	− 9	− 7
23	6 a. m.	− 5	− 2	− 6	−17	−16	−13	− 9
	9 a. m.	6	7	− 4	−11	−13	−12	− 8
	12 a. m.	?	?	?	?	?	?	?
	3 p. m.	5	10	0	− 0.5	− 3	− 4	− 7
	6 p. m.	− 1	5	− 1	−14	−11	− 9	− 7
	9 p. m.	− 1	0	− 3	−14	−12	−11	− 8
24	6 a. m.	4	7	− 1	−12.5	−12	−11	− 8
	9 a. m.	13	13	13	− 6	− 9	− 8.5	− 6
	12 a. m.	14	23	12	0	− 1	− 5	− 6
	3 p. m.	14	23	12	0	0	0	0
	6 p. m.	8	13	6	− 1	− 1	0	− 1
	9 p. m.	4	9	4	− 6	− 4	− 1	− 1
25	6 a. m.	3	7	2	− 8.5	− 6	− 4	− 2.5
	9 a. m.	9	9	3	1	− 1	− 2	− 1
	12 a. m.	12	16	10	0.5	1	0.5	− 1
	3 p. m.	11.9	13	10	0	0	− 0.5	− 0.5
	6 p. m.	7	13	7	0	0.5	0	− 0.5
	9 p. m.	7	8	6	7	0	0	0
26	6 a. m.	8.5	8.5	7	0	0	0	0
	9 a. m.	8	9	7	− 0.5	0	0	− 1
	12 a. m.	8	11	6	0	− 0.5	− 0.5	− 1
	3 p. m.	5	11	3	0	0	0	0
	6 p. m.	3	6	2	− 4	− 5.5	− 5.5	− 7
	9 p. m.	0	4	0	− 6	− 5	0	0
27	6 a. m.	− 3	0.5	− 5	−14	−11	− 6	− 1
	9 a. m.	6	6.3	− 6	− 3	− 4	− 5.5	− 1.5
	12 a. m.	8.5	11	5	0.5	0	0	0
	3 p. m.	9.5	12	7.5	0	− 0.5	0	0

月 日	時 刻	氣 溫			雪 の 溫 度 (深さ cm)			
		現 在	最 高	最 低	0	5	10	20
27	6 p. m.	6	10	6	− 2	− 0.5	− 0.5	0
	9 p. m.	4	7	4	− 4	− 2	− 1	− 1
28	6 a. m.	1	5	1	− 9.5	− 8	− 6	− 2
	9 a. m.	11	11	1	0	− 1	− 4	− 1
	12 a. m.	8	12	6	0	− 0.5	− 0.5	− 1
	3 p. m.	8	12	7.5	0	− 0.5	0	0
	6 p. m.	7	8	4	− 1	− 0.5	− 0.5	0
	9 p. m.	1	4	1	− 4	− 2	− 1	0
29	6 a. m.	− 2	5	− 3	− 13	− 11	− 9	− 4
	9 a. m.	9	9	− 9	− 0.5	− 3	− 4.5	− 1
	12 a. m.	12	12	6	1	0	0	0
	3 p. m.	10	13	9	0	0	0	0
	6 p. m.	5	10.5	5	− 1	− 1	− 0.5	− 0.5
	9 p. m.	4	6	4	− 3	− 1	− 1	− 1
30	6 a. m.	2	4.5	0	− 8	− 6	− 4	− 1
	9 a. m.	9	9	2	0	− 1	− 3	− 1
	12 a. m.	8	11	7.5	0	0	0	0
	3 p. m.	5.5	10.5	5	− 1.5	− 0.5	0	0
	6 p. m.	5.5	7	5	− 1.5	0	0	0
	9 p. m.	5	6	5	− 3	0	0	0
31	6 a. m.	3.5	6.5	3	− 4.5	− 3	− 2	− 1
	9 a. m.	4	4	3	− 4	− 4.3	− 4	− 1
	12 a. m.	6	7	− 4	0	− 1	− 1	0
	3 p. m.	10	12	5	− 0.5	0	0	0
	6 p. m.	4	10.5	4	− 3.5	− 2	− 1	− 0.8
	9 p. m.	3	5	3	− 3	− 3	− 3	− 3
4. 1	6 a. m.	4	4	2	− 4.5	− 4	− 3	− 1.5
	9 a. m.	8	8	2.5	− 0.5	− 1	− 1.5	− 1
	12 a. m.	10.3	12.5	6.5	0.5	0.5	0.2	0
	3 p. m.	9.3	13	7	0.5	0	0.5	0.5
	6 p. m.	7	10	6	0	0	0	0
	9 p. m.	5	7	5	− 1	− 0.5	− 0.5	− 0.5

月　日	時　刻	氣　温			雪の温度（深さ cm）			
		現在	最高	最低	0	5	10	20
4. 2	6 a. m.	2	6	1	−13	−11	− 6.5	− 1
	9 a. m.	14	14	2	1	− 1.5	− 2	− 1
	12 a. m.	16	17	10	1	1	1	0
	3 p. m.	15	18	11	0.3	0.2	0.2	0
	6 p. m.	8	15	8	0.4	0.2	0	0.5
	9 p. m.	6	8	6	− 1	− 1	0	0
3	6 a. m.	6	7	5	− 1	− 1	− 0.3	0
	9 a. m.	7	11	6	0	0	0	0
	12 a. m.	11	11	7	0.5	0.5	0.5	0
	3 p. m.	9	11	6	0.5	0	0	0
	6 p .m.	6	9	6	− 1	− 1	0	− 0.5
	9 p. m.	1	1	1	0	0	0	− 0.5
4	6 a. m.	7	9	6	− 1.2	− 1.2	− 1	− 0.8
	9 a. m.	7	7	7	0	0	0.5	0.5
	12 a. m.	4.5	11	3	0.8	0.2	0.2	0.2
	3 p. m.	9.5	12	8	0.4	0.4	0.2	0.2
	6 p. m.	4	9	4	− 3.2	0.2	0.2	0
	9 p. m.	5	6	4	− 7	− 1	0	− 1
5	6 a. m.	4	7	2	− 9.4	− 7	− 4.5	− 1.2
	9 a. m.	8	9.5	4	0.2	− 1.5	− 1.4	0.2
	12 a. m.	8	9.5	7	1	1	0	− 0.3
	3 p. m.	11	13.5	9	0.3	− 0.1	0.2	0.7
	6 p. m.	4	13.5	3.5	− 4	− 0.2	− 0.2	0
	9 p. m.	2	4	− 2	− 8	− 4	− 1	− 1

この Data を見て吾々は次の如き事を知る事が出來る．即ちこの雪温は陽春であるのにかかわらず依然として表面よりも深い所程やはりその雪温が高い．（第九表）

第　九　表．第八表の平均雪温（温度は C.）

深　さ	雪　温
0 cm	− 3.9°
5 cm	− 3.6°
10 cm	− 3.4°
20 cm	− 2.2°

又第八表全體に就いてその氣溫と雪溫に就いて夫々の溫度の Schwankung——最高溫度と最低溫度との差——を見ると氣溫が最も變化著しく，積雪表面が之に次ぎ，最も深い所即ち 20 センチメートルの雪溫のそれが最も變化が少い事を知る事が出來る．（第十表）

第 十 表，第八表に於ける溫度の Schwankungen（溫度は C.）

	最 高	最 低	Schwank.
氣 溫	+ 23°	− 9°	32°
雪溫 表 面	+ 7°	− 17°	24°
雪溫 5 糎の深さ	+ 1°	− 13°	14°
雪溫 10 糎の深さ	+ 0.5°	− 13°	13.5°
雪溫 20 糎の深さ	+ 0.7°	− 11°	11.7°

この事，即ち溫度の Schwankungen が大體に於て氣溫が最も著しく，最も深い所の雪溫が最も變化が少いと云ふ事は日毎のそれを見ても明瞭である．（第十一表）

第十一表，第八表に於ける日毎の Schwankungen（溫度は C.）

月 日	氣 溫	雪溫（深さ cm）			
		0	5	10	20
3. 14	10°	5°	2°	1°	2°
15	12°	10°	4.5°	3°	1°
16	17°	16°	5°	5°	2.5°
17	17°	13°	6°	3°	2°
18	14°	11°	5°	2°	1°
19	8°	10°	3°	2°	2°
20	6°	4°	3°	2°	1°
21	5°	7°	4°	1°	2°
22	14°	12°	10°	9°	8°
23	16°	16.5°	13°	9°	2°
24	24°	12.5°	12°	11°	8°
25	14°	15.5°	7°	4.5°	2.5°
26	11°	6°	5.5°	5.5°	7°
27	18°	14.5°	11°	5.5°	1.5°
28	11°	9.5°	7.5°	6°	2°
29	22°	13°	11°	9°	4°
30	11°	8°	6°	4°	1°
31	16°	4.5°	4.3°	4°	2°

月日	氣溫	雪溫（深さ cm）			
		0	5	10	20
4. 1	11°	5°	4.5°	3.5°	2°
2	12°	14°	12°	7.5°	1.5°
3	10°	1.5°	1.5°	3.5°	0.5°
4	9°	7.8°	1.6°	1.5°	1.5°
5	15.5°	10.4°	8°	4.7°	1.9°
平均	13.2°	9.9°	6.4°	4.7°	2.6°

即ち Schwankungen は氣溫の 13.2° C. が最も變化著しく積雪の20センチメートルの深さの雪溫の 2.6° C. が最も變化が少ない. 然かも積雪表面よりも 5 糎の深さの所, 次いで10糎の所, 最後に20糎の所と深さが增すに伴つて Schwankungen が少くなつてゐる.

これは 1 日24時間に於ける各時間毎の異なつた深所の雪溫[16]がやはり同樣な現象を呈する事に依つても亦裏書きせられるのである.

第七表等の現象から吾々は或る深さに於てはその溫度の Schwankunge が零である——即ち溫度が Constant であると云ふ推論を爲す事が許されるであらう. 然し溫度が Constant な狀態と成り得るが爲めにはその積雪は相當な深さ——少くとも氣溫の影響の達し得ない深度にまで積雪がある事を要する. (積雪が若し Unterschmelzen してゐる時には溫度が 0° を保つて Constant である事は別の理由に依る現象だ.)

第七表より第十一表までの Data に依つて吾々は雪層はその表面が平均して最も溫度の低い事を知る. (氣溫があまり溫い時は暫く措く.) それ故に吾々が雪上に餘儀なく Unterkunft を求めて Bivouac しなければならぬ場合には相當雪を深く掘り下げる方が有利である事を此等の表は敎へてゐる. 即ち雪層は或る深さに於てはその雪溫は寒冷な吹き曝された大氣或は積雪の表面よりもずつと溫度が高く溫かい.

然し乍ら雪自體は冷いものではある. 熱の不良導體ではあるが雪の爲め寒冷が齎らされる事があるのは當然である.

又, 雪は日光に對して强い反射度を有してゐる[12]. 積雪のは太陽光線の$\frac{3}{4}$を反射させて終ふ. 此れに對して土地の表面は$\frac{1}{5}$より反射させない. これは雪の表面の溫度があまり高まらない原因の一つである. これに就いて Jucklin が Upsala に於て觀測した所に依ると土地の上 6.8 米處に於て氣溫 −14.4° C. である時積雪の表面は −22° C. であつた事を

報告してゐる．

又雪の溫度は季節に依つて異なる事も當然な事である．

第十二表，[16] 雪溫の季節的變化（1895—96 冬．タルノボルに於けるサトケの觀測）

深度＼月別	11月	12月	1月	2月	3月	平均
0 cm	− 4.7°	− 4.8°	− 7.1°	− 5.9°	− 1.8°	− 4.9°
5 cm	− 0.6°	− 5.5°	− 5.4°	− 1.4°	?	− 3.2°

雪溫の季節的變化に於て最も注意しなければならぬ事は 4 月の雪融期の雪溫である．4 月の雪融期にはあらゆるものゝ溫度に寒冷作用を及ぼすものである．4 月の雪溫は必ず 10 月のそれよりも低い事は此の點の大なる證據であらう．

第十三表，4 月と 10 月の雪溫の比較，

場所＼月別	4 月	10 月
Berninahospiz	− 1.9°	− 0.4°
Saentis	− 4.7°	+ 4.7°

此の外に雪溫決定の重要なる Faktor として Sonnenstrahlung や雪自身の Einstrahlung 或は又 Naechtliche Ausstrahlung がある．[12]

§. 4. 氣溫と內部溫度，(Innertemperatur in der Unterkunft)

私は上記に於て氣溫，地熱及び雪溫に就いての瞥見をなした．此等は如何なる意圖の下に引用されたかと云へば總べてこの Innertemperatur in der Unterkunft に就いての資料たらしめんが爲めであると云つて過言ではない．然し乍ら甚だ遺憾なる事には此れに就いての參考資料は甚だ貧弱である．而かも未だ充分精査してない材料である．こんな材料を使用する事は羊頭狗肉の謗を免れ得ない事を覺悟してゐる．然し斯かるものを厚顏にも此處に發表する理由に就いては附記の所を見て頂き度い．

私の以上に於て瞥見したものは雪溫を除いた外は吾々の Bivouac に第二次的に重要性を有してゐるものである．Innertemperatur こそ吾々の Bivouac を爲すに當つて最も直接的に作用する處のものである．何となれば吾々が Unterkunft を携行してゐる Zelt に依つて，或は又岩隙に於て，或は又餘儀なく積雪中に穴を掘つたまゝで Bivouac せなけれ

ばならぬ時，雪の上には木の葉を敷いて雪からの直接の寒冷を防ぎ，或は穴の上方には茂つた木の枝を蔽ふて吹き曝しの嵐に對して防禦を爲す事が出來る．然るに如何とも出來ないのは Innertemperatur in der Unterkunft である．

Innertemperature さへ低くなかつたらたとへ外部の氣温が相當寒冷であつても Bivouac はそう苦痛ではない．又反對に Innertemperature が低ければ假令，身體に相當なものを着込んでゐても，時には毛皮の服を着けてゐても Bivouac は苦痛である．Bivouac を研究する上に於て最も肝要なのは此の Innertemperature である．

從來 Alpinist が經驗した Innertemperature はどの位のものであつたであらうか？

1907年に Rubenson が Himalaya で經驗したものは寒さ甚だ酷しくテント内に於てすら −34° C. であつた．又1913年に Meade が Kamet 登攀を企てた時はテント内で −20° C. であつた．（共に前揭參照）

Meade の述べる處に依ると 20,000 ft. の處[2]に於て或る夜小さい密閉された Whymper Tent 内で夜明け前に −20° C. と云ふ寒さを——その夜はこの小さいテントで炊事するのに火も焚き，又三人もの人間がこの中で寢て居たので相當餘温はあつたであらうのに——經驗してゐる．

Z. I. の Mt. Everest 登攀には驚くべき寒氣と悲壯なる鬪爭を續けてゐる．

上揭の Moench の Bivouac に於ては氷室を掘つてそれを根據としてゐたのだが氷室内の温度は平均に於て夏期 −3° C. 秋には −6° C. 位で炊事の爲め火を用ひる時には氷室内の温度は +1° C. に昇り氷室の天井から水滴が落ちて來た事を報告してゐる[10]．

加納氏はその著書[16]に次の事を報告して居られる：〃或る年の紀元節に北海道の山中で殆んど着のみ着のまゝで，2米餘の積雪を掘つて穴をつくり，その中に露營を試みた事がある．その時の夜中の氣温は −12° C. であつたが，穴の中の温度は焚火しないでせいぜい −2° C. か −3° C. 位にしかならなかつた〃と．

1930年1月唐松（2640 Meter）で京大旅行部が合宿した時に高橋君が Schlafsack を試驗する爲め Zdarski Zeltsack を使つた時，8. a. m.—12. a. m. の4時間の平均氣温は −10° C. であつたが Innertemperature は −7° C. から −6° C. 程度であつた．

次に揭ぐる第十四表は1930年3月，甲南高等學校山岳部員七名によつて Bivouac の研究の目的を兼て穗高を試みた際，横尾岩小舍附近に於て雪中に Tent を張つた時の氣温及 Innertemperature の Data である．

第十四表，氣溫及びテント内の温度，

（1930年3月，横尾小舍附近に於て村上，田口，觀測）

月　日	時　　刻	氣　　温	テント内の温度
3.23	6.30 p. m.	− 1°	1°
	9.00 p. m.	− 2°	
24	6.00 a. m.	− 2°	3°
	8.00 a. m.	− 2°	5°
	9.00 a. m.	1°	4°
	3.00 p. m.	5°	8°
	6.00 p. m.	0°	2°
25	6.00 p. m.	1°	5°
26	12.00 a. m.	6°	
	5.00 p. m.	1°	
	9.00 p. m.		※ 10°
27	7.00 a. m.	− 4°	− 2°
	9.00 a. m.	0°	1°
	10.30 a. m.	2°	※ 11°
	12.00 a. m.		10°
	3.00 p. m.	2°	5°
	6.00 p. m.	2°	3°
	9.00 p. m.	2°	※ 13°
28	8.00 a. m.	2°	5°
	12.00 a. m.	1°	※ 10°
	3.00 p. m.	1°	7°
	6.00 p. m.	2°	8°
	8.00 p. m.	1°	※ 10°
29	6.00 a. m.	3°	6°
	9.30 a. m.		6°
	10.40 a. m.		※ 10°
	11.30 a. m.	4°	7°
	3.00 p. m.	3°	8°

（温度は C.）　※印はストーブを焚いてゐる時，

横尾の Tent を張つた場處は森林の中で吹き荒ぶ風からは保護されてゐる，高度は約1700 Meter から 1750 Meter 位の場處である．約1米位の積雪を地面まで掘り土の上には木の葉や枝を約1尺位敷き Tent はカンバス地で十人位は優に入れる廣さである．比較的暖たかい時であつたので日中は炊事の時以外はストーブを焚かない．ストーブは鋳力製の組立式で生木を焚いて使用するものストーブを焚いたのは夕方7—8時頃からであつてそれ以後は餘溫が殘つてゐたわけである．

3．5．末　尾

Bivouac に就て吾々が研究すべき問題は如何にして寒冷から保護されるかと云ふ事であらう．即ち寒冷な氣溫の時如何にして Uuterkunft内 の溫度を暖かに保つべきか．即ち如何にして吾々が Unterkunft であるテントなり雪に掘つた穴の溫度を相當の暖かさを保たすかと云ふ事である．內部の溫度を暖かにする最小限度は吾々が相當充分な睡眠を攝り得或は寒冷から來る疲勞，エネルギーの消耗を最少限度に止める——即ちそれが爲め翌日のアルバイトに支障を來さない様にすると云ふ程度である．疲勞を充分に醫さないまでも寒冷の爲めに奪ひ去られる無駄なエネルギーの消耗を防げる様に Bivouac に於ける Unterkunft 內の溫度の最少限度を保てる様に如何にしてその對策を講ずるかと云ふ事である．勿論，疲勞を醫すと云ふ點からはヒマラヤエキスペディションの場合に於けるが如きテント內で酸素を使ふと云ふ様な事もあるが，此處では寒冷な溫度の爲めの疲勞を如何にして防ぎ，又出來れば疲勞してゐる體を Unterkunft に於て恢復さす事が出來る程度に內部溫度を高く保つ爲めには如何にすべきかと云ふ問題である．

此の見地に於ては雪溫が甚だ重要性を有してゐる．即ち雪の深さとその雪溫の關係である．この雪の深さとその雪溫とが吾々に教へる處は氣溫が非常に寒冷で吾々が堪へ難い程のものであるにも拘らず，或る深さに於てはその雪溫はさほど寒冷でない——從つて積雪上の Bivouac は必ず深く雪を掘り下げるべきであると云ふ事である．勿論その雪溫にも或る限界はある．而してそれ以上の溫度を保つ爲には最早やストーブを焚くか或は雪に掘り下げた穴の底に木の葉を敷くか或は又防寒具を使用するかより方法はない．防寒具の內特に夜間——一般に1日中で最も寒さの强い時——の睡眠を容易にする Schlafsack に就いては一つの論文程の記載を必要とするが最も一般的に冬期登山に使用される毛皮及び羽蒲團に就いては次に高橋君の實驗を掲げよう．

"1929年12月末から1930年1月初にかけて京大が日電の唐松小舍 (2640 Meter) に於て

横尾の Tent を張つた場處は森林の中で吹き荒ぶ風からは保護されてゐる，高度は約1700 Meter から 1750 Meter 位の場處である．約1米位の積雪を地面まで掘り土の上には木の葉や枝を約1尺位敷き Tent はカンバス地で十人位は優に入れる廣さである．比較的暖たかい時であつたので日中は炊事の時以外はストーブを焚かない．ストーブは鋳力製の組立式で生木を焚いて使用するものストーブを焚いたのは夕方7—8時頃からであつてそれ以後は餘溫が殘つてゐたわけである．

§．5．末　尾

Bivouac に就て吾々が研究すべき問題は如何にして寒冷から保護されるかと云ふ事であらう．即ち寒冷な氣溫の時如何にして Uuterkunft内 の溫度を暖かに保つべきか．即ち如何にして吾々が Unterkunft であるテントなり雪に掘つた穴の溫度を相當の暖かさを保たすかと云ふ事である．內部の溫度を暖かにする最小限度は吾々が相當充分な睡眠を攝り得或は寒冷から來る疲勞，エネルギーの消耗を最少限度に止める——即ちそれが爲め翌日のアルバイトに支障を來さない様にすると云ふ程度である．疲勞を充分に醫さないまでも寒冷の爲めに奪ひ去られる無駄なエネルギーの消耗を防げる様に Bivouac に於ける Unterkunft 內の溫度の最少限度を保てる様に如何にしてその對策を講ずるかと云ふ事である．勿論，疲勞を醫すと云ふ點からはヒマラヤエキスペディションの場合に於けるが如きテント內で酸素を使ふと云ふ様な事もあるが，此處では寒冷な溫度の爲めの疲勞を如何にして防ぎ，又出來れば疲勞してゐる體を Unterkunft に於て恢復さす事が出來る程度に內部溫度を高く保つ爲めには如何にすべきかと云ふ問題である．

此の見地に於ては雪溫が甚だ重要性を有してゐる．即ち雪の深さとその雪溫の關係である．この雪の深さとその雪溫とが吾々に教へる處は氣溫が非常に寒冷で吾々が堪へ難い程のものであるにも拘らず，或る深さに於てはその雪溫はさほど寒冷でない——從つて積雪上の Bivouac は必ず深く雪を掘り下げるべきであると云ふ事である．勿論その雪溫にも或る限界はある．而してそれ以上の溫度を保つ爲には最早やストーブを焚くか或は雪に掘り下げた穴の底に木の葉を敷くか或は又防寒具を使用するかより方法はない．防寒具の內特に夜間——一般に1日中で最も寒さの强い時——の睡眠を容易にする Schlafsack に就いては一つの論文程の記載を必要とするが最も一般的に冬期登山に使用される毛皮及び羽蒲團に就いては次に高橋君の實驗を揭げよう．

"1929年12月末から1930年1月初にかけて京大が日電の唐松小舍（2640 Meter）に於て

合宿を行つた際 Eiderdown quilts と Reindeer coverlets を使用して次の如き經驗を得た.

1930. Jan. 1. a. m. 8—12 a. m. の4時間, 平均氣溫 −10° C. 風も相當强かつた時, Eiderdown quilts を使用し雪上にカツパ一枚を敷いて寢たのに背中には直接寒冷が感ぜられた. 然し a. m. 8—9 a. m. 迄は confortable で a. m. 10 頃から漸く冷めたくなり, a. m. 12 には (雪溫 −6° C.) 少し堪へ難くなつて來た. (Zdarski Zeltsack 內の溫度は −7° C. or 6° C.)"

又小舍で Eiderdown を使用して直接板の上に寢たが每夜中 a. m. 4 より背中が冷くなつた. 然し12月28日夜は板上に毛皮を敷いた. すると非常に comfortable であつた.

Reindeer coverlets を 1930. Jan. 1. p. m. 12—p. m. 4 迄直接に雪上に敷いて寢たのに些の冷氣も感じなかつた. (氣溫 −12° C.)

少々重くともやはり毛皮の Schlafsack が一番良い樣に思ふ. それから毛皮を直接着込むのも良いがそれよりもやはり Sack を作つた方が良い樣だ. Schlafsack は何で作つてもたとへ布で作つても非常に暖い. 時に依ると布の Schlafsack で寢た方が毛皮を直接着けて寢たよりもより良好な睡眠が取れる場合さへある.

睡眠と云ふ事は最も吾々に取つて必要な事である. Bivouac で體がヘバルのはその最も重な原因は睡眠が充分攝れない爲である. 睡眠さへ充分なら案外頑張れるものである.

insomnia が如何に翌日の活動に支障を來すかは吾々の良く知る處である. Bivouac で睡眠が攝れないのは此の溫度の低下が重大な原因となつてゐる. 夜中睡眠を妨げられて目を醒した時の溫度に就いて研究しても相當興味深い有益なものであらう.

この溫度の低下に依る insomnia は training に依つて或る程度まで除けるものであらう. これも馴化に依つて苦痛ではなくなるであらうが, 成るだけ充分な睡眠を攝つて, 翌日頑張る爲にはどうしても Unterkunft の內部溫度を暖たかくしなければならない. この見地からして Innertemperature in der Unterkunft の研究はおろそかに出來ないものであると考へる.

この斷片に就いて參照したり, 又 Data を引用したのは次の文獻からです.

(1) J.N. collie: "A short summary of Mountaineering in the Himalaya, with a note on the approches to Everest."

Alpine Journal (1921) No. 222

(2) C. F. Meade: "Himalayan hints for Mountaineer." Ditto
(3) E. F. Norton: "The problem of Mt. Everest." Ditto (1925) No. 230
(4) R. W. G. Hingston: "Physiological difficulties in the asscent of Mt. Everest." Alpine Journal (1925) No. 230
(5) Dr. Kella: "Dr. Kella's Expedition to kamet in 1920." Ditto (1921) No. 222
(6) "The Mount Logan Expedition." Ditto (1925) No. 230, (1925) No. 231
(7) Allen Carpe: "Observations during the Mount Logan Expedition." Alpine Journal (1926) No. 232
(8) A. H. MacCarthy: "The Asscent of Mt. Logan." Ditto (1927) No. 234
(9) H. S. Hall: "Mt.Logan Expedition. Note on Equipment." Do. (1926) No. 233
(10) Gurbert von Salis: "Der Moenchgipfel—ein Standort fuer wissenschaftliche Forschung." Die Alpen (1928) ■—No. 2
(11) "The Moench as a point for scientific observation." The Alpine Journal (1928) No. 237
(12) C. Schroeter: "Das Pflanzenleben der Alpen" (1926) Alpenklima.
(13) N. Zuntz: "Hohenklima und Bergwanderungen in ihrer Wirkung auf den Menschen." (1906)
(14) Roget: "Altitude and health." (1919)
(15) 早大 "リュックサック" No. 6 (1928)
(16) 加納一郎氏: "氷と雪" (1929)

"附記"

この一文は甚だまとまりのない未整理の覚書です．それにもかかわらずこんな大膽な題をつけて此處に載せさせてもらつた理由は，斯かる研究に着手せんとするに當つて專門家の御指教を仰ぎ度いのと，も一つはこの研究の基礎を爲すものと考へる處の氣溫と雪溫（各深度の雪溫）及び內部溫度との三つのものが relativ に觀測された Data をなるべく多く得たい爲である．斯かるものに就いて研究されてゐる方の御教示を乞ふ．

目次

登高記録抄 72 ページ欠

量，早月尾根には全然未だ新雪がない．平蔵を登つたが頂上から長次郎谷のコル迄は全部新雪に蔽はれ，夏道をトレースする事は甚だ困難で，爲めに岩に寄り，又新雪に足場を切つたりして約2時間を費してコルに達した．谷には所々クレバスあり．頂上からの長次郎谷の下りは相當に困難だつたが一寸愉快なアルバイトだつた．

同志社大　大窓越え池ノ平．小黒部　1日—6日

11月

富山高校　彌陀ケ原スキー　22日—25日
弘法を根據にして彌陀ケ原の今年の初めての新雪でスキーを享樂した．然し新雪で往路のラッセルは相當苦痛だつた．

同志社大　劍岳　1日—7日　天候があまり良くなく時々吹雪かれる．三田平を根據にして劍に登る．

1930．1 月

同志社大　立山　1月上旬

3 月

富山高校　栗巢野スキー合宿　7日—12日

＊　＊　　＊　＊

此の方面に於て我々を惹きつけるのは劍を中心とした岩登りである．

八峰は最も早くから開拓されただけに劍を訪れるクライマーに依つて一番多く登られてゐる．もうリッヂ通りはザイルを要せぬ位になつてゐるが然しアンザイレンしてコンテイニュアスクライミングを練習するゲレンデとしては將來も相當利用されるだらう．尾根よりも八峰のピークピークのフエースクライミングに興味を持つ傾向は益々目立つて來た．これは多く長次郎谷より登られた．三ノ窓からは少い．

三ノ窓ゲビートには良い處がある．然しチンネは今年どのパーティも出掛けなかつたは殘念だ．先年初登攀されてより未だ誰も行かぬ樣だし，ヴアリエーションルートも開かれぬ．尾根は依然として未だリッヂ時代だ．平蔵向きのフエースがどんどん行かれる時代に早くなれないものか．劍は穗高と共に良き岩場である．然しその西面が未だあまり開拓されないのはどうしたわけだらう．劍に於ける各パーティの根據地は眞砂澤の出合が一番賑ふ．前揭の記錄の大部分はその根據地を眞砂に置いてゐる．三ノ窓ゲビートの爲の二俣の根據地はもつと利用さるべきだ．

此年は劍へ入るのに小黒部を利用するパーティがめつきり增えた．早月川や白萩からするコースもあり黒部川からは內藏ノ助平の道もある．早月尾根もパーティが登つてゐる（本文參照）．毛勝猿又はパーティが夏行つてゐるが此の地域は冬期或は春期に出掛けて良い處だ．黒部の上廊下には二三のパーティが出掛けてゐるが春期にも良いスキーゲレンデである筈．今年は一月に劍で遭難があつた爲か積雪期の登山が少なかつたのは遺憾だ．

後立方面

1929．7 月

八　　高　白馬．鑓　12日—16日
五龍　12日—16日

北アルプス南部方面

1929．7 月

八　　高　鳥帽子．槍　11日—15日
　　錫杖．笠．穂高　11日—17日
　　燕．常念．槍　12日—15日

京都醫大　穂高生活及槍北鎌　12日—28日

同志社大　高瀬川入リ槍　12日—16日
　　槍．燕　16日—20日
大阪高校　燕．槍　16日—18日

大阪工大　穂高　19日—22日

大阪商大　燕．槍．穂高　19日—22日

大阪藥專　槍．穂高　11日—14日

浪速高校　穂高．槍．燕　26日—29日

關西學院　燕．槍　12日—15日
　　穂高濶澤生活　26日—8月5日

甲南高校　穂高濶澤生活　16日—23日
　　槍　26日—28日
　　錫杖．笠　13日—19日
　　錫杖　21日—24日
　　上高地生活　11日—8月2日
　　乘鞍．上高地．槍　25日—8月2日

神戸商大　鳥帽子．槍．乘鞍　25日—8月2日
　　笠．錫杖．藥師．穂高　11日—8月8日

8 月

三　　高　横尾アニュアルキヤンプ參加　15日—26日

京　　大　横尾アニュアルキヤンプ參加　14日—26日

大阪醫大　穂高．槍　6日—8日
　　横尾アニュアルキヤンプ參加　9日—23日
　　鳥帽子．槍　7月31日—8月4日

大阪工大　笠．双六．鳥帽子　22日—26日

關西大學　上高地生活　2日—11日

浪速高校　横尾アニュアルキヤンプ參加　9日—19日

9 月

同志社大　槍北鎌．穂高　3日—10日
　　穂高　4日—11日

10月

京都醫大　西穂高　2日—4日　或る事情で西穂キレット附近でビヴアクしたが夜中より雨に遭ふ．

關西大學　燕．槍　17日—21日　槍ではもう雪が降つてゐた．

11月

甲南高校　槍　10日—14日　もう槍は冬の裝だ．槍澤小舍からスキーを使用した．槍の穂は雪をかぶつてゐる．アイゼンを穿いて時々足場を切つた．

1930．1 月

甲南高校　上高地　13月30日—1月5日　殆んど毎日降雪．西穂を2540米までと，一の俣小舎に滞在して涸澤を偵察に出掛けた．

3 月

岐阜高農　乗鞍　15—21日

八　高　北穂　25日—4月1日　一ノ俣小舎を根據にして北穂を東向きのクロアールから登つた．

甲南高校　穂高　21日—4月4日　横尾の岩小舎附近で雪中にテントを張り，北穂，奥穂に登つた．上高地に歸つてから西穂を試む．（本文參照）

＊　＊　　＊　＊

穂高は劍と共に岩登りの良きゲレンデの多くを持ち比較的纏つた地域にそれが存在するので加盟校の多くのパーティを惹きつけてゐるのは當然だらう．此の方面に足を入れた組は必ず穂高を訪れてゐると云つても過言ではない．

北穂高　穂高の内でも岩登りのゲレンデとして優れたものゝ一つだ．その西面飛彈側はチムニーもあり大きた岩壁もある．變化の多いクライムが出來る．東側にも所謂東尾根のゲレンデがある．涸澤生活をしてゐるパーティの多くは北穂へクレッテライに出掛ける場合には北穂と涸澤岳とのコルよりするよりもむしろ東面の澤を利用してゐるこの澤の上部頂上近くには殘雪もあるので面白い登攀だ．東尾根をやつたパーティは勿論この澤を登つた．（3 月の二パーティも此の澤より登攀して成功した）．北穂への本谷側よりのコースとして頂上からデイレクトに本谷に向つて出た尾根が利用された．

奥穂．ジヤンダルム　ジヤンダルムへの登攀は岳川よりするより涸澤がその根據地となつてゐるせいか奥穂より爲された方が多い．尾根通しで行くのは『ビギナー向きだ』と云はれる程に樂になつた．ジヤンダルムの頂上から西に岩ばかりの尾根が出てゐるが此年も未登で殘つた．奥穂にデイレクトにのルートは岳川側からは一組が試みた．涸澤側からの雪渓上ばかりで頂上直下まで達するリンネは傾斜は相當あるがそう困難ではない．ジヤンダルムとこれをコンネクトすれば涸澤からの一日に面白いアルバイトだ．穂高小舎を經て行くより時間は短縮されよう．

前穂高．北尾根　北尾根は最も多くパーティが登つてゐる．尾根は此處も樂になつて『縱走の如き，全くビギナーのゲレンデなり』と云はれるのも無理はない．然しそのフエース特に頂上からの第三峯（實は第二峯の肩になる）の涸澤側なんて凄い．又その東面，奥又白側には未登攀のバットレスがある．

明神岳　これも面白いクライムが出來る．又白のゲビートと共に良きゲレンデが豐富だ．

其他　西穂高本谷に入つたパーティもある．

槍北鎌．小槍　小槍は非常に多くのパーティが行つてゐる．然しヴアリエーションルートの利用されぬのは何故か？

錫杖　も岩場としては優れた處で面白いクライムが出來る．此處には聯盟としてもつと多くのパーティを送るべき處と思ふ．穂高がもう開けすぎて『涸澤は何處を見ても岩のルートが短くて問題とならない．穂高グルッペの中で前穂のバットレスとジヤンダルムの飛彈側のリッヂの二つのクライムを殘すのみで夏のクライムは終りを告げるべきであらう』と云ふ樣な言が爲されるに徵しても吾々は次の段階にまで進むべき時期となつた事を痛感する．

この方面は積雪期にも各パーティの活動地であ

る．11月及び12月から1月にかけての槍ケ岳行，穂高行，3月に入つては乘鞍行，北穂高行，及び槍平生活，横尾谷雪中露營生活がある，槍平ではスキーの合宿を兼ねて附近の登高が企てられ横尾谷では積雪中にテントを張つてビワークの研究を兼ねて尚ほ奥穂，北穂等の登攀が爲された．斯かる試みは冬期登山に於て我國の如き小舍の冬期使用設備のあまり考へられない現狀では意義あるものたるを失はぬ．

南及中央アルプス方面

1929．7 月

岐阜高農　鋸岳　24日—27日

京　　大　仙丈．北岳　12日—22日
北岳のバットレスクライミングを試みんとしてその初登攀に成功した．雨池の尾根から良く見えるフエースで未だ多くのヴアリエーションルートが殘されてゐる．大樺小舍から近くに岩小舍を發見して來てゐるので今後このバットレスを試みる者の爲に良き根據地とならう．(本文參照)

三　　高　白根三山より三峰川　15日—24日

大阪工大　甲斐駒　14日—15日

甲南高校　地藏．北岳．農鳥岳　13日—19日

10月

同志社大　木曾駒　12日—13日

三　　高　越百川より松川へ　26日—30日　越百川を溯つて越百山の南方のコルを越して松川へ出た．このコースは未だ知られてゐないものだ．(本文參照)

11月

八　　高　木曾駒　23日—24日　新雪が降つたばかりで相當困難だつたが九合目まで登る．

同志社大　仙丈．甲斐駒　5日—9日

神戸商大　駒．仙丈．北．農鳥　3日—14日

1930．3 月

八　　高　木曾駒　13日—19日

*　*　　*　*

南アルプスは北と比べて開發が遲れてゐた爲に多くの不便が伴ふので種々な制限を受ける學生のこの方面に入るものも自然少い．北岳のバットレは初登攀である．あまり氣付かれなかつたものであるが興味あるクライミングの出來るバットレスだ．この方面でも搜して行けば他にも相當岩場がある事であらう．越百川から松川へのトラバースも初めてのコースである．南方面は冬期登山の對象として何物かを有してゐよう．段々と冬期にも出掛けられるようになるであらう．

木曾駒は比較的簡便に登れるので良く出掛られた．積雪期の11月，3月にも試みられてゐる．

頸城及上州方面

1929．8 月

京　　大　笹ケ峯生活　28日－9月11日

大阪醫大　笹ケ峯　23日—25日

11月

富山高校　鮎道スキー一行　28日—12月2日
冬のスキー練習地としての可否を調べる目的で來たが，12月の休みの合宿には適當でない事を知つた．

12月

富山高校　上林スキー合宿　22日—28日

京都醫大　鹿澤スキー合宿　26日－1月6日

甲南高校　菅平スキー合宿　25日—1月5日
關溫泉スキー　24日－31日

神戸商大　菅平スキー合宿　22日—1月3日

1930．3 月

富山高校　野尻．池ノ平．笹ケ峰スキー行　19日—24日

三　　高　雨飾山．笹ケ峰スキー行　19日—26日

京　　大　笹ケ峰スキー　21日—26日

甲南高校　雨飾山．笹ケ峰スキー行　25日－4月4日　笹ケ峰のスキーヒユッテを根據として燒．火打．天狗原に登る．

＊　＊　　＊　＊

頸城方面は關西から手頃なスキー場として從來は良く此の方面で加盟校のパーティの合宿が行はれたのだが此の冬は大體後立を目指して四谷，細野附近でスキーを練習したので此處は例年に比してパーティが少なかつた．然し笹ケ峰にはスキーヒユッテもあり，附近に燒．火打．妙高．高妻．乙妻等の手頃な山がある爲にスキーの練習地としては良い所だ．此の3月四谷附近に根據を置いて後立を目指したパーティはその殆んどが小谷溫泉を經て雨飾山なんかを登つてゆつくりとスキー享樂の目的で笹ケ峰のスキーヒユッテに遊びに來てゐる．確かにヒユッテのあるのは良い事だ．事に依つたら聯盟に提供しようかとの話もある位で，聯盟としても適當な處に各パーティが集まれる樣なヒユッテを持ちたいものだ．何れそうなる時期が來るだらう．

美濃白山方面

1929．7 月

岐阜高農　三方崩　10日－12日
白山々脈の一支峰の三方崩山はあまり知られない中山性の山だ．平瀬を經て井谷をルートとして之を溯り1700米附近で幕營し，翌日雨中を三方崩頂上近くの個所まで到着したが惡天候の爲め遂にそのまゝオオノマを降り大白川に出て平瀬に歸着．
美濃瀧波山から川油谷　6日—12日

9 月

岐阜高農　三周岳　23日—27日

10月

三　　高　美濃赤谷　29日—11月3日

高倉より峠の南を越えて赤谷に寝ること2日，途中不動山の澤對岸より尾根について鞍迦に登り，尾根にビヴアック，北側ミチケ谷に下つて檜尾峠より越前に歸つた．秋の美濃はヤブとセンコマイ谷で『怪雜』なものだ．行くなら矢張り殘雪期．赤谷の地圖道は想像通り全然無くて行き難い谷だ．

1930．1 月

岐阜高農　御嶽　7日—11日

4 月

大阪醫大　石徹白より白山　3日—7日

*　*　　*　*

山の深さと言ふ點から言へば美濃から白山への一帶は關西の秘庫として推稱さるべきものである傾斜の少い曲りくねつた谷と，笹と石楠花のヤブ潜り，山に寢ね谷に俯す數日の間，人つ子一人に出會ふことも無い．秋の美濃は始めて試みられたもの．石徹白よりの白山群南部の登高は尙今後に殘された問題が多い．三方崩など白山群北部への通出は今後も尙繼續して行きたい．

北海道方面

オプタシケ，スマヌプリ，トムラウシ等のオプタシケ山脈縱走，大雪山行，余市岳行，幌岳行が7，8月に行はれ，3月には定山スキー行があつた．此の方面は關西から遠隔の爲め經濟上等の理由からして，夏は信飛甲州の山に出掛けて終ふし，冬は雪質の良い事を承知しつゝもやはり信越のスキー場で我慢して終ふのは致し方がない．

山陰方面

この方面の山は中山性で冬期スキーを目的に良く出掛られる扇山，氷ノ山，鉢伏などが從來から行かれてゐるが 今年はどうしたわけかパーティが少なかつた．大山には2月に二パーティがトウルを行つた．

以上の外にパーティが出掛ける所として大和及び四國がある．比良，鈴鹿は京都セクションパーティが良く出掛ける．此の外に日曜登山として出掛けられる所に京都セクションには北山があり，阪神セクションには六甲がある．其の他宵屋ロックガーデン，仁川，道場，小金岳はロッククライミングの練習に良きゲレンデである．

（以上聯盟記錄カードより抄錄す．）

目次

聯盟ノート

1929年度

創立經過——披露會

聯盟結成の機運は全く內に芽ざしたものである．

關西の學生登山界も，遲ればせ乍らに茲數年來目醒ましい發展を遂げ急テンポの飛躍を重ね，第一線に屬する見るべき業績も決して少からざるに至つた．然し，此等の業績は總て他地方の學生登山界に於て然る如く，その殆んど全部が各自の狹い城廓——一個の學校山岳部——に閉ぢ籠つて完成され，他の敢て之を怪しまざると同時に，自らも之を以て『主觀に基く登高精神の必然的形式』なりとして寧ろ得々たるが如くであつた．

一段の飛躍を試むべき黎明は總て來つた．視角の擴大するに從ひ，一層深く各自の山を反省するに從ひ，斯かる孤立的，獨尊的，或ひは屢々井蛙的でさへある狹量なる山岳人集團の內藏する矛盾と缺陷とは，必然的に最前線の學生登山者達の腦裡に去り難い惱みとして，『行き詰り』として，感ぜらるゝに至つた．斯かる狀勢が次の段階への飛躍の，高次の統一的なるものへの揚棄の一つの前驅的條件を意味するものであることは說明を要しない．斯くして『行き詰り』を打破せんとする機運は，當然孤立と獨尊を排した『聯盟への結成』の形をとつて，第一線登山家の內より芽ざした希望として現はれ來つたのである．

多數の第一戰闘士の全般的意見の代言者としての高橋は，昭和4年4月中旬，大阪醫大に水野を訪れ，茲に聯盟結成の機運は有形の運動に迄進展した．

聯盟結成の道程は，然し，必ずしも當初の豫想程に平滑では無かつた．一部の學生登山者は未だ井蛙的孤立主義の內包する矛盾に氣附かず，ために形式的ならざる眞の『行き詰り』の深い認識に根據付けられた聯盟，即ち，眞に力を以てその職分を果し得べき聯盟の結成は，諸校山岳部の內容不揃ひのために全く時機尙早であることが暴露された．

その結果五月上旬神戶に於ける，又六月中旬京都に於ける京阪神七校の會合を經て聯盟の目標を主として『親睦』に置くの已む無きに至つた．然し，斯くあればこそ一層孤立の無意義と聯盟結成の必要を感じた一部の者と，お座なりの『親睦』のために消極的に賛成した他の一部と，その中間に屬する一部とは兎に角にも外見的に一致して聯盟への結成の道に入ることが出來た．此の當初の本質的の不一致は或意味からは禍を聯盟の將來に胎すものであるとも言へやう．然し，同じ學生間に於てそれ程に玆意見の距りを釀した所のものは即ち孤立と獨尊の內包した矛盾そのものに因由するものであり，さればこそ一層廣い見地よりする時は，一層聯盟結成の必要を痛感せしむる以外の何ものでもない．

京都に於ける準備會では．次の六名を創立委員に擧げ，愈々關西諸校に廣く呼びかけることに決つた．

高橋健治，奧貞雄，山本保（以上京大）笠原遠男（神商）淺川玄夫（關學）水野靜太郎（大醫）

聯盟の發會式は斯くして昭和4年6月23日，京大樂友會館に於て行はれた．會するもの京阪神十校三十一名．

——次第——

▲成立主旨，經過　高橋健治

聯盟の議は既に數年前より一部に唱へられてゐたが，近年關西に於ける目醒ましき學校山岳部の興隆は漸く今日に此機會を齎らした．在來の關西は先づ群雄割據であり，互ひに排他的に，學校色彩にのみ立て籠つてゐるかにお互ひに誤解してゐたやうである．その原因は連絡の皆無に加へて，續出する部報等の文面による過敏な臆測などによるもので甚だ子供子供してゐた．山の見方の進歩と共に，山は各自の自覺を促して，アカデミカーのフェラインの生れることに依つて如何なる方面に將來の活躍を期すべきかと自明して來たのである．……『先づ吾關西學生としては親睦が第一義となり全力を擧げて親睦聯絡の目的に進むのが當面の問題である』……．(朗讀主旨概要)

▲各學校の代表意見開陳

〔京大〕（奥）——恐らく聯盟成敗の鍵を握るものは『年報』の發刊である．各校既に報告を刊行の向も少くないから，その向背に依つて聯盟の成否は決する．京大は全力を之に注ぐことが出來る．アニュアルキヤンプは親睦の意味で是非力を入れたい．

〔同志社〕（和田）——部の内容充實時代に在るため，それに追はれて積極的には外に力を出せないが，聯盟を指導の中心として見て行きたい，親睦をも有意義に計りたい．

〔京醫大〕（石戸）——『年報』は今後當校のものは可成個性的のものとしたい．

〔大商大〕（日野）——無條件賛成．

〔浪速高〕（平井）——聯盟に指導を受けて行きたい．キヤンプは早速參加する．

〔大醫大〕（水野）——部として各級縦斷的に纏まれぬ事情にあるため，自由に外に盡せると思ふ

〔關大〕（木村）——大學の山岳部として恥しくないだけに進むためにはどうしても聯盟の如きものゝ指導を要求してゐた．

〔三高〕（本野）——部内で力は一杯だが，出來るだけは盡さう．

〔神商大〕（笠原）——今後若し關東に聯盟が成立した際關西がその支部になるやうでは駄目だ．

〔關學〕（淺川）——聯盟には自らを顧みて餘りの貧弱さに躊躇もした．部報は今年は外部へ發表するものは刊行しないことにする．

▲聯盟の組織討議（決定事項を記す）

構成單位は學校山岳部．

先輩は，その出身校山岳部に對する關係を通じて間接に聯盟に關係する．

代表委員は各校より一名を出し，事務上の常任委員は之以外に若干名を置く．

常務委員　高橋，淺川，水野，伊藤，笠原，山本，

地方毎に部會を開き，總會は年二回春秋に行ふこと．

會計は寄附及び適宜の方法に依つて維持する．

事業——さし當り年次キヤンプ，公報發刊

▲發會式の聲明書は次の如し．

關西學生山岳聯盟成立主旨書

近時我邦に於ける登山の發展は著しく急激にして，然かも猶ほ將來益々熾んならんとする傾向を有し，就中，學生間に於けるそれは各學校登山團體の目覺ましき活躍となり，數多のエキスパートを輩出する現今の隆盛を招來し，我登山史上の重要なる數頁を堙むるに至つた．

然るに從來その間に連絡を缺き，分裂的なる行動を取り，それが爲めやゝもすれば互に排他的たらんとする傾向をさへ生じ，延いては斯界將來の正統なる發展上數多の障害不便を醸成し甚だ遺憾とする處であつた．

之の趨勢に鑑み夙より一部先覺者中には之が對策に就き種々なる企圖を劃し，腐心する處ありしも當時は未だ斯界の意識低く，機熟せざりし爲め荏苒現今に及んだのである．

然るに現今の山岳界の情勢は當時のそれと異り登山の異常なる發展進歩は全般の登山意識を著しく高揚するに至り斯界將來の發展を期す上に於て當然如上の弊を除くべき何等かの對策を講ぜざるべからざる時期となりその要望旺盛となるに至つた.

偶々京阪神の數校より山岳聯盟の提唱を見るに至り,我等此處に將來有爲のアルピニストたらんとする眞摯なる學生の結合に依り,這般の要望に對えざるべからずとなし,本年四月以降我等勝りて數回交渉を重ね,本日京都帝大樂友會館に於て"關西學生山岳聯盟"の發會式を擧ぐるに至つた.

"關西學生山岳聯盟"の目的とする處は各學校山岳團體間の連絡親睦を計り,山岳界諸先輩の後援指導を仰ぎ,統一ある自覺的行動,目的達成に必要なる事業に依り新しき方面への活躍の準備を爲し,アルピニズムの理想に邁進し,延いては日本山岳界全般の水準意識を高め些かなりとも斯界に對する貢献を爲さんとするに在り.

此處に關西學生山岳聯盟成立の主旨を聲明す.

昭和四年六月二十三日

關西學生山岳聯盟

加盟校(ABC順)

第八高等學校山岳部
第三高等學校山岳部
同志社大學山岳部
岐阜高等農林學校山岳部
關西大學山岳部
關西學院高等部山岳部
神戸商業大學山岳部
甲南高等學校山岳部
京都府立醫科大學山岳部
京都帝國大學旅行部
浪速高等學校旅行部
大阪醫科大學山岳部
大阪商科大學旅行部
富山高等學校山岳部

聯盟の披露會は發會式の決議により,基礎漸く定つた11月に至つて,大阪醫大記念會館に於て開催された(27日).學校側の參集するもの十三校四十六名.先輩及招待者にして出席ありたるものは,

——學校先輩——

〔京　大〕中原,山本,西堀,四手井,桑原,宮崎
〔三　高〕中原,西堀,四手井,桑原
〔神商大〕黒田,小槇,三好
〔關　學〕入江,森
〔甲南高〕西村
〔大工大〕直木

以下聯盟外

〔北　大〕加納,和辻
〔早　大〕四谷
〔富山藥〕森本

——一般招待者——J=J.A.C.R=R.C.C

の略影山實造(J及R)　田中喜左衛門(J)　藤木九三(J及R)　津田周二(J及R)　西岡一雄(R)辻谷栄蔵(R)　新井久之助(R.住友)　島田眞之介(R及BKV)小川正十郎(J及アルカウ會)　山崎彦麿(J及アルカウ會)　米澤牛歩(R及神戸徒歩會)

——次第——

▲披露の辭　高橋健治

聯盟設立經過,本夏以來の事業,抱負を述ぶ.(發會式のものと大同)

▲各學校先輩挨拶

〔京大〕(西堀)——會の成立時には理想にのみ走つて一歩一歩の措置の考究に不足勝ちのものだから,局に當るものはよく此點を注意されたい.今聯盟は各學校の水準向上の相互利益を目的として生れたのだが,若い者は氣が早くて即時にその利益を棚ボタ式に得やうとし,それが得られぬ時には屢々怨聲を放つことさへあり得る.斯かる聯盟が眞に各自に利益を齎らす迄には却つて多くの損失をその犠牲として要求し勝ちのものである.最終の勝利は各自の聯盟意識の覺醒により,聯盟は即ち自己のものであり,その

興敗が自己の責任に屬するものであることの徹底的な自覺に依つてのみ，しかも多くの犧牲の蓄積によつてのみ贏ち得られるのである．

〔三高〕（四手井）——聯盟の進むべき道は，それが山に於ける行爲を見つめて行く時にのみ開ける．理論と理想とのみではなく實踐による結成であるべく，同じく親睦と言ふも街路の親睦であつてならない．又，學生は學生意識を以て登れよ．そこに學生聯盟成立の意義を見る．

〔神商〕（黒田）——國際聯盟をヘソと許した人がある．山岳聯盟もヘソのやうに意味のみ持つて實際に活用されないでは駄目である．

流行語の合理化は又聯盟に適用されねばならない．山の實行爲を基礎とした精神的所産を得る爲の，即ち山岳部向上のための確たる目的を持ち，相互利用に合理化の道を進めねばならない．

（其他記錄不備）

▲來賓の挨拶

〔早大〕（四谷）——關東の聯盟は漸く最近(21日)結成された．關西のそれは，理想に走らず手近の目的を一つ一つ片附ける所に非常な特色がある．唯，關西も單なる親睦ではなく，將來日本の登山界に大きな役割を持つて貰はねばならぬ．

〔北大〕（加納）——中心が學生であることはメムバーが年々移動することを意味するが，成立當初の立派な精神を傳統的に守り續けて，種々の困難に耐へて歩一歩を築いて行かれたい．

〔RCC〕（西岡）——聯盟の理想はもつともつと高大に持つてもいゝ．唯，今の歩一歩手近な問題から片附けて行く手堅い手法は今後の傳統とされたい．

今日，聯盟が內部に於ても又學校先輩に於ても想像以上に熱を以て護らうとしてゐるのは實に心强い．唯，願はくは學生以外にも眞面目に山を考へ山を行く一團の社會人のあることを忘れずに，時々は今日のやうに席を共にして語る機會を與へられたい．

〔RCC〕（藤木）——（原稿代讀）

『山岳人よ，何處へ往く』

關西學生山岳聯盟の創立披露式に招待を受けながら，已むを得ぬ事情で出席出來ないのは誠に殘念であります．就いては本聯盟の成立にあたり，衷心からその生誕を喜んでゐた私としまして，この席上一言祝辭を陳べさして戴きたいと望んでゐた事を筆にして見ましたから，披露の機會を與へて下さらば幸甚に存じます．

それは，『現時の日本登山界の展望』——などと改つた表現を用ゐる程の事ではありませんが，日本の登山界の代表機關であり權威ある指導機關である『日本山岳會』は現に自ら更生の一轉機に惱んでゐるかに察せられます．また，本聯盟と殆んど同時に組織される機運にあつた關東學生登山聯盟も，聞く處によれば一頓挫を來たし，新たなる提案の下に計畫されねばならぬ運命に立ち至つてゐるとの事であります．またこの間，東都の學校先輩の間では，學生聯盟とは別箇の研究團體を作らうといふ意見や，また日本山岳會の改造を條件としてそれと合流しやうといふ機運などが動いてゐると傳へられます．この混沌たる形勢を傍觀するにつけ，私は思はず『山岳人よ！何處へ往く？』と叫ばざるを得ない氣になります．

併しながら，また靜かに，これらの形勢を觀察いたしますと，現時の登山界は正に『生みの惱み』に沈淪するものであり，同時にそれには近き將來において，何事か發展，飛躍しやうとする或る力——强い機運が——潛在的に蠢動してゐる事實を物語る證左であると信じます．そして，この混沌たる黎明の先驅をなし，その赴く處を指示したものが，本日茲に披露の式を擧げられた關西學生山岳聯盟であると思ひます．この意味から，私は心から本日の意義ある式日を祝福すると同時に，謂はゆる日本のモダーン．アルピニズムの最尖端を切つた諸君の立場と使命の重，且つ大なるを考へないではゐられませ

ん．……（以下聯盟との關係少きを以て省略す）
（其他は記錄不備）

▲次年度常任委員，

山本　保　（京大）　會計係擔當
伊藤　愿　（京大）　本野亨一　（三高）
兒島勘次　（同大）　笠原遠男　（神商）
木村仁吉　（關大）　泉谷貞一　（關學）

▲次年度常任委員挨拶

▲圓座討論

關東聯盟に就き四谷氏より說明ありて諒解を求められ，西堀，高橋起つて之に答へ，二三論戰あり．

▲晩餐會（階下食堂に移る）

▲聯盟總コンパ（非公式）

聯盟內部のみ再び階上に於て多の打合せ等を行ふ．

年次キヤンプ

1929年度の聯盟年次キヤンプは，6月の發會式に於て各校の都合を訊した上，8月10日より15日の間に互つて，横尾谷出合に於て，擧行すべく決定．會計，食糧，用具類は時日に暇なき故を以て今回は全く各校獨立にし，營林局との交涉，場所の準備は高橋が引受けて行ることゝなつた．

營林局との交涉が遲れたため各校へ正確な場所の通知を出したのが7月中旬になり，中には9月中旬登校の際始めてその通告を知つた學校も二三に止らなかつた．場所準備も，高橋が突然大學總長の依頼を受けて御橋のテイラー敎授夫妻の接待に當つたため．すつかり豫定を狂はせて了つた．正直に8月9，10日に横尾の河原に集つた四校（その中には京大自身も含まれてゐる）は何だか譯の判らぬ中に思ひ思ひの場所にキヤンプを張るに至つた．

當時上高地附近に在つた聯盟校の分班は決して少くなかつたに拘らず，眞に聯盟キヤンプ參加と稱せらるべきは京大，浪速高校，大阪醫大，大阪商大，三高（以上到着順）に過ぎず，他に二三校の一二の者から儀禮的の訪問を受けたに止つたことは聯盟創立尙日淺くその意味と職分の徹底を缺ける證左と云ふべきであらうか．

10日から15日の間によく動いたのは，京大細野組と，浪速古林組，大醫水野組で，其後に至つて高橋及テイラー敎授夫妻，京大先輩組（四手井，陸田等），三高組，及び三高先輩渡邊漸等相踵いで來着し，期待してゐた樣な年次キヤンプ氣分は却つて公定期間後に發揮された．聯盟に於て此年次キヤンプが實質的に最重要な集會となり，聯盟總會ともなれば，全國的乃至國際的招待會，先輩同志の交驩會，實際的技術の鍊磨，研究の發表討論等々に百パーセント其の機能を發揮し得べきの日は果して何年後に來るだらうか？

天氣の定つた日などは相互に朝の出發を誘ひ合はせた．そして，池ノ平で思ひ思ひの方向に袂を分つて一日を樂んだ後，夕方再び池ノ平に落ち合ひ美しくキヤンプに歸るなどの情景は，此夏の年次キヤンプに始めて見られた愉快な氣分で無かつたらうか．此の漠然とした友情から，やがて意識的な協同の芽がめぐみより 高次的なマッセンアルピニスムスの體系化が招來され得ないとは果して誰が能く斷言し得るものぞ．

映　畫　會

發會式の決議により，聯盟の經濟的維持は各校山岳部費の直接負擔とせざることを原則とした．各校山岳部費の不揃ひと一部の學校の內部事情にそれを許さゞるものがあつたため，此の不合理さをも敢てせざるを得なかつたのである．

基金募集映畫會は，9月早々より實際に交涉を進め同志社大學映畫聯盟の加力を得て漸く11月中旬，京阪神三都に於て之を開催する事が出來た．フイルムは，同志社映畫聯盟の肝煎になる『アルプス征服』と，藤木氏及び鐵道省河上氏，東京鐵道局茂木氏の御厚意による『山は招く』（封切）及び北海道其他の鐵道省映畫を以て之にあて，京都

日出會館（15日），神戸青年會館（16日），大阪朝日會館（17日）に於て，何れも大成功裡に會を終つた．

映畫會開催の趣旨として當時發表したものは次の如くであつた．

『關西學生山岳聯盟は本年關西に於ける學校山岳部の進歩向上のため相互協力の主旨によりて關西の大學，專門學校十餘校が主力となりて成立せるものなり．將來實現せんとする諸計畫のため，茲に山の映畫會を開催し，以てその資金に充てんとす』

當時各地に於ける學生の奮闘は實に聯盟に取つて歴史的な一頁を作るものであらう．驚歎すべき組織と，統制と，献身とによつて，或者は街頭にビラを配り，或者は百千の叱責に屈せず百貨店の内外に宣傳陣を布き，或者は連日警察に日參して半日宛を平謝りに謝り，其他ポスター張りに，入場券の配給に日夜を忘れて奮闘した．斯程に聯盟内部に結束力があり，一致した目的に向つて献身的の努力を集中し得らるゝものとは，事が成就するの日まで誰がよく豫想し得られただらう．之れだけの熱を以て，あれだけの人員が，聯盟の共同目的に向つて進んだことは，假令それがアルピニズムの本質には幾分遠ざかつた問題に對してであつたにしろ，實に聯盟の内部の大成功として敢て誇稱するに足るものがあるやうだ．之がより高い聯盟の理想實現化の可能性を示すものでなくて何であらう．聯盟は確かに何ものかを爲す．確かに何物かを爲し得る．聯盟事務の局に當るものは，前途の光明に自信を以て進めばよい．

▲基本金の使途保管方法

當時三都に於ける總收入は　1984.95
諸經費を控除した實收入は　1190.00
その保管方法は阪神セクションの提議に基き，

500.00	信託預金
500.00	特別當座預金
殘餘	別口特別當座預金

の三種に分割，住友信託及同銀行に預入を了つた．

右分類は，斯かる小額の資金を用ひて行ふべき事業無きを以て實果を他日に待ち，聯盟の事務費公報發刊費等は第二及第三より支出することを原則としたものである．

地方部會の確立

廣い地域間に散在する聯盟校の連絡を密にし，その相互利用の便宜を得るためには，聯盟内部を適當な地方部會に分割してその各々が自發的に仕事を進めて行くのが最良の方法であることは，既に聯盟結成の當初から豫想されてゐたことであつた．6月の發會式の際の決にある『可及的地方毎の小集會を開催すること』との一項は此の豫想を實現化に向へて促進する目的を多分に有するものである．

秋の映畫は三都の會計を別個のものとしたため京阪神の諸校は夫々その都市毎に數回の會合を開き親睦の實を擧げることが出來た．其後自然の趨勢に從つて阪神は一つの部會に合流し，京都と共に聯盟内に二箇の部會が生れるに至つた．此の地方部會は然し現在の所頗る漠然たるもので，時々集つてはお茶を呑み，時事問題を論じ，事務上に相談を要するものがあらば阪神及京都が個別的に意見を纒めて委員の參考に供する程度のものであり，聯盟の組織の表立つた一構成としての存在ではなく，唯，聯盟の大きな目的に向つて少しでも近接しやうとする『山の行爲』に目標を置いた會合である．行く行くかゝる部會は各地に廣く生れるだらう．

アクチユアルな方面に聯盟の一歩を進めるべく阪神部會に『冬季猿倉生活』の議が持ち上つたことは此目標に對する一飛躍である．數回の準備會の後，新雪期に於ける白馬の正當なる登路を研究すべく，神戸商大，關西學院，大阪醫大，大阪商

大，關西大學，其他數班の隊員を分ち定め，各々その目的とすべき分擔を指示し，聯盟全體として計畫された氣象狀態の研究と相俟つて年末の準備にいそしむ若人の面上には少からぬ活氣が漲つたのであつた．

猿倉生活は12月26日關西學院の先發隊の入山を以て始まつた．當時本邦一帶は珍らしい乏雪に見舞はれ，日程は入山を中止したものと早々に切り上げた者とのために少からぬ狂ひを來したが，尙1月10日大阪醫大の殿軍が下山する迄に，大雪渓よりする白馬登頂，小蓮華尾根の試登その他の登高行を交へて，山にスキーに參加者の大部分を啓發する所は決して尠くなかつた．然り，組織に於て，又，統制に於て，個人の山岳觀，登山技術に於て，猿倉の生活は瞭らかに幾多のボロと阻誤とを暴露したけれども，其の失敗に舊い狹量な學校氣質への挑戰を聞き，其の成功の一面に新らしい朗らかな協力への黎明を見た者は決して一人には止らなかつたことを確信する．何れにしろ，我が聯盟によつてアルピニズムのかゝる形式が今後尙繰り返し試みられ研究され行く時は，聯盟のより大なる理想への基礎は歩一歩に確立され行くものであらう．

阪神部會は其後1月下旬七校十四名の集會に於て，在來屢々事務に手違ひを生じたことを清算する意味で簡單な組織を作るの要を認め，下の如き規定を作成した．

一．名稱　關西學生山岳聯盟阪神部

一．構成　加盟校登山團體を以てす

一．組織

A．會計部（大阪商大）聯盟會計の下につき便宜上時には聯盟會計事務の一部を扱ふ

B．文書部（甲南高校）書類受付，處理，定期集會招集，同議題決定，集會座長等の事務

C．記錄部（浪速高校）阪神部記錄，集會記錄の報知事務

D．時報部（神戸商大）聯盟時報係の下につき，阪神間に於ける同事務を處理

E．調査部（關學，大醫大）他部の依頼又は自發による各種の調査

一．集會　定期的（1月第三金曜，5月第一金曜，9月第二金曜，11月第三金曜の四回）

不定期集會は三校以上連名にて文書部に通知すること．

議題提案は必ず豫め文書部に通告し，文書部は之を纒めて各校に通知すること．

成立は學校數の半數の參集を要す．

先輩もなるべく來會方勸誘のこと．

京都部會は當初より地理的に纒り易いため半ば研究會の色彩を帶びた小集會が開催された．中にも1月下旬のオール．メムバー．コンパは出席者四十二名，本野司會の下に開かれ，相當充實したものであつた．當夜の主な講話は，

關西聯盟來年度の方針	本野（三高）
鹿島東尾根の冬期登攀	四手井（京大）
1月の大池より白馬岳	今西（京大）
唐松冬營小屋の經驗	高橋健（京大）
同志社の冬期行動	高橋榮（同大）
鹿澤温泉	伊吹（同大）
冬期の立山	兒島（同大）
鹿澤の合宿	石戸（京醫）
二俣の合宿	本野（三高）
猿倉生活	藤田（三高）
唐松生活	上林（三高）

目次

編　輯　後　記

日本の山岳界は今重大な時期に面してゐる．此の一年の間に經過した關東及び關西山岳界諸狀勢の推移振りは，知る者をしてその今後の飛躍發展に少からぬ期待を抱かしめる．

關西聯盟の創立を企てた當初から，高橋と私とは當時の山岳界の展望に基き，關西聯盟の行く手に就いて一つの識見を有してゐた．それは然し不幸にして我々が局に當つてゐる間には遂に其機を得ずに終つたものだが，其後の山岳界の諸狀勢が益々我々の所期した方向に動いて居ることに徴しても，やがては我が關西聯盟はその大きな潮流の中に入つてその力强い動きを援助すべき日が到來せねばならない．私は，旣に學窓を去つて聯盟を直接に處理する立場でないために，一層，聯盟內部の者が此の間に處して執るべき道を誤らざるやう希望して止まない．

我々の一貫した素志は聯盟ノートの創立經過に表はした如く，眞に力を以てその職分を果し得べき聯盟の結成である．そのためには，進み行く周圍の狀勢に應じて現在の聯盟組織を活動的ならしめ，積極的進出の道を開くことも考へらるべき問題であらう．何れにせよ，我が關西聯盟が，將來しつかりした後繼者の出現に依つて導かれ，我々の素志を貫徹し，その理想を實現して呉れるであらう日の一日も早からんことを待つものである．

（在獨の同志高橋を想ひつゝ

一九三〇年秋　水野祥太郎）

＊　＊　　＊　＊

創業多端なりし關西學生山岳聯盟はその第一年に何を爲したか？　此處にその報告第一號を發表して嚴正なる批判を俟つ．聯盟加盟校は此の年報に依つて更に一段の自己批判を爲すであらう．

今日漸く發表するものではあるが，此の報告第一號はその含む處の總てに於て，聯盟結成の1929年7月より1930年3月末までのもの即ち第一年の報告に止まつてゐる．

年報發表のあまりに遲かりし事は編輯委員の責任であつて一言の辯解の辭なく，只管に御寬容を乞ふ．

第一號は第一年の報告に止まるが故に，『登山記錄抄』，『聯盟ノート』は素より，掲載の各篇はすべてこの期間のものである．各篇の執筆者の肩書はこの故を以つて，この期間に於て夫々示す處の校名所屬の現役であつた事を意味してゐる．

『聯盟ノート』は水野，『登山記錄抄』は伊藤に依つて分擔されたものである．聯盟ノートは聯盟記錄帳其他の記錄から，『登山記錄抄』は聯盟制定の『關西學生山岳聯盟記錄用紙』に加盟校から記入をして記錄係に送付されつゝあるものが基礎となつてゐる．編輯委員としてはこの登山記錄を發表する形式に就いて或る考を持つてゐたのであるが今ま此れを果し得ざる事情ある爲め，只登山記錄抄として僅かにその動靜の概觀を知るに資したのみである．詳細に就き知らんとせば聯盟に保存されたる該カードを閲覽あり度し．登山記錄抄に於て校名，動靜に漏れたるものありとすればそは記錄係の怠慢に依るよりも寧ろ，加盟校の義務不履行の結果である．これは聯盟の仕事の總てに就いて云はれる事であるが，聯盟の如き集團の仕事は全構成員の協力に俟つてこそ初めてその完成を期し得べく，その局に當る一二の者の以つて如

何ともすべからざるものである．この點に於て關西學生山岳聯盟は未だ多くの遺憾を有し，過去一年間その衝に當つた者はつぶさに困難を嘗めてゐる．就いては此處にこの春に先輩となつた人達に深甚の感謝を捧ぐ．

關西學生山岳聯盟の結成より今日迄僅か一年有餘月，その間に於て果したる任務及びその演じたる役割に就いては此處に述べず，只識者の批判に委ねる事とする．

從來各學校間に於て出版されてゐた部報が，聯盟加盟校の中に於ては既に一つの解決の道を見出しつゝある事はこの聯盟年報と部報が相互に制約的の關係にある證左であらう．

關西學生山岳聯盟の將來？と云ふ問題は私に取つて或る本質的なるものの矛盾と共に一つの苦惱であるが，これに就いては未だ此處に記す事は控えよう．高橋，水野の如き既に此の春に先輩となつた人達の素志——形式的ならざる眞の聯盟の結成はいつの日であらう？　聯盟がその本質に就いて鋭き自己批判を爲し，その潛在的なる缺陷と矛盾を淸算する時こそ其の日である．それまではこの聯盟は親睦を當面の任務として專ら連絡に主力を注がなねばならぬ．

再言——年報第一號が，斯くの如く出版が遲れた事に就いては上記の，聯盟の仕事に就いて云はれる事，其他種々なる理由もあるが，吾等の怠慢，職責を斯かる點に藉口して辯解するは許され難き事であり，敢て辯解するは更に過を犯す事である を思ひ，編輯委員はその責任を深く感じつゝ，此處に只管各位の寬大なる御宥恕を乞ふ次第である．

常務委員會の決議——『編輯委員は年報の內容に該當する年度の現役中より選任す』——に依つて水野及び私が任命されたものである．

表紙は神戸高工の先輩中村勝郎君の手を煩はした．同君に厚く感謝する．

（先輩を偲びつゝ
校正室にて 伊藤 愿）

* *　　* *

關西學生山岳聯盟報告 I 1930
發行所 關西學生山岳聯盟
事務所 京都市左京區吉田
京都帝國大學旅行部內

昭和5年11月1日印刷
昭和5年11月9日發行
編輯兼發行者 伊藤 愿
京都市左京區吉田
京都帝國大學旅行部內
印刷者 岡本省三
大阪南區鰻谷中之町39
印刷所 合資會社中村盛文堂
大阪南區鰻谷中之町39

目次